

若年者の自殺対策に関する調査研究等事業
報 告 書



平成24年8月
宮城県精神保健福祉センター

目 次

はじめに	1
第1章 若年者の自殺対策に関する調査研究等事業について	
1 事業の目的	2
2 事業の概要	2
3 調査研究等事業を進める上での仮説	3
4 調査研究等事業で明らかにしたいこと	3
第2章 児童生徒のこころと行動に関する調査について	
1 調査の概要	6
2 調査結果と考察	7
3 調査のまとめ	30
第3章 思春期の若者に対する支援について提言	35
終わりに	41
資料編	
事業の概要	
資料1 事業実績	1
資料2 若年者の自殺対策に関する調査研究等事業 「研究協議会」開催要領	2
資料3 若年者の自殺対策に関する調査研究等事業 「研究協議会」構成メンバー	3
資料4 児童生徒のこころと行動に関する調査要領	4
資料5 児童生徒のこころと行動に関する調査票	5
調査の結果	
調査結果	9
自由記載	37

はじめに

自殺の背景はその年代により抱える問題も様々である。そのため、効果的な自殺対策を実施するためには、各ライフサイクルの課題に沿って取り組むことが必要である。宮城県精神保健福祉センター（以下、当センター）では、これまでも自殺対策事業に取り組んできたが、それらは主に成人期を対象とするものであった。しかし、当センターにおける相談においても、成人期の対人関係の問題やひきこもりなどの背景に子ども時代の学校でのいじめ体験や不登校経験などが影響していると考えられるケースも少なくない。また、発達 の側面からみても、児童・思春期は社会での基礎的なスキルや安定した対人関係を築く力を身につける重要な時期であることから、この時期のメンタルヘルスはその年代だけの問題に留まらず、一生にわたる“こころの健康”の維持に、より重要である。そのため、効果的な自殺対策を実施するためには成人期への対策のみならず、若年者においても取り組みを行っていくことが必要と考えた。そこで当センターでは、若年者の自殺対策に焦点を当て、若年者の心の危険状態を表す問題行動（リスク行動）の実態を把握すると共に、その対応について検討を行う研究等事業を実施することにした。

当研究等事業は、自殺対策緊急強化事業の一環として、当初平成 21 年度から平成 23 年度の 3 年間の事業として企画した。平成 21 年度後半から開始し、導入（準備）の期間を経て、平成 22 年度前半に先行研究や文献等を参考にして仮説を立てると共に調査票の作成を行った。後半は調査を実施し、児童生徒の気になる行動や問題行動、教育現場での対応について実態を把握し、結果を分析した。平成 23 年度は東日本大震災により一時中断したが、同年 10 月から再開し、平成 24 年度まで調査結果の分析、考察、支援についての提言等の検討を行った。

以上の経過で調査研究を行い、若年者の自殺対策について検討したので報告する。

平成 24 年 8 月 31 日

宮城県精神保健福祉センター所長 西 條 尚 男

第1章 若年者の自殺対策に関する調査研究等事業の概要

1. 事業の目的

若年者は自殺が主要な死因であるだけでなく自殺企図が高頻度に見られることから、若年者を対象とした自殺対策は重要かつ緊急的な課題である。効果的な予防対策を実施するためには、若年者の自殺行動について把握し、実態を踏まえながら検討していくことが必要である。そこで、若年者の自殺行動のリスク因子、リスク行動、保護因子、介入について調査及び分析をし、本県において実施可能な自殺予防支援策について検討していく。

2. 事業の概要

若年者の自殺対策に関する調査研究等事業（以下、「研究等事業」という。）は自殺対策緊急強化事業の一環として実施した。実施期間は平成21年度～24年度の4年間である。事業の中心は「児童生徒のこころと行動に関する調査」であるが、詳細については第2章に記載している。本章では、研究等事業の全体像及び事業を進めるにあたって立てた仮説について以下に説明する。

1) 事業の実施体制

当事業を進めるにあたり、以下の体制を組みながら行った。

(1) 所内検討会

- ・ 班長以上、事業担当（企画班）で構成
- ・ 年度初めに実施
- ・ 事業に対する所の方針の確認

(2) 所内ワーキンググループ（以下「WG」という。）

- ・ 各班からメンバーを選出して構成
- ・ 必要に応じて開催

(3) 研究協議会（以下「協議会」という。）

- ・ 学識経験者、教育、保健福祉関係者等で構成
- ・ 年2回実施

※事業全体のスーパーバイズを和歌山県精神保健福祉センター小野善郎所長に依頼

2) 各年度毎の事業

各年度の事業の位置づけ、目標、実施内容は表1のとおりである。

表1

年度	位置づけ	目標	実施内容
平成21年度後半	導入期	知識の共有、問題の意識化	研修会
		情報交換、課題の確認	協議会

平成 22 年度	展開期	事業目的、進め方、体制等の確認	所内検討会
		問題の整理、課題の明確化、 リスク行動・因子について研究	WG
		課題の明確化、調査結果の検討	協議会
		実態把握	調査
		啓発	シンポジウム
平成 23 年度	総括期	調査の分析、考察、まとめ（支援） について検討、報告書作成	WG
		調査結果の検討・課題の整理	協議会
		啓発、調査の中間報告	シンポジウム
平成 24 年度	活用期	当事業の結果を踏まえ、今後の展 開等についての方針を立てる	所内検討会
		報告書作成	WG
		啓発	シンポジウム等

3. 調査研究等事業を進める上での仮説

研究等事業を進めるにあたり、各種文献を参考にして考えを整理し、仮説を立てた。事業全体の流れを図式化したものを図 1 に、仮説を図式化したものを図 2 に示した。

- 1) 自殺に至るまでは「準備状態」とも言うべき過程（心の状態）がある。様々な要因が関係し合って、長期間にわたって徐々に自殺につながる「準備状態」が形成されていく。
- 2) 「準備状態」にある心の状態は、何らかのリスク因子により、「心の危険状態」に移行することがある。「心の危険状態」にある若者は、様々な形の「問題行動」をとることが多い。さらに、この「心の危険状態」には、危険度を高めるリスク因子が存在する。
- 3) 心の危険状態を秘めた問題行動や、危険状態を高めるリスク因子は複数あるが、特に重要性となるのは「攻撃性」を示す若者の行動である。
- 4) 「心の危険状態」や「攻撃性」を和らげる、もしくは減少させる役割として「保護因子」がある。

4. 調査研究等事業で明らかにしたいこと

- 1) 「準備状態」から「心の危険状態」への移行に伴い、思春期の若者はどのような反応や行動を示すか。
- 2) 「心の危険状態」にある若者の行動のうち、特に重要と思われるのが「攻撃性」を秘めた行動である。これについて、実際にどのような問題行動をとることが多いか。
- 3) 「心の危険状態」や「攻撃性」を和らげる、または減少させる保護因子にはどのようなものがあるか。
- 4) 上記を踏まえ、「心の危険状態」を秘めた若者への支援について検討していく。

図1 事業全体の流れ

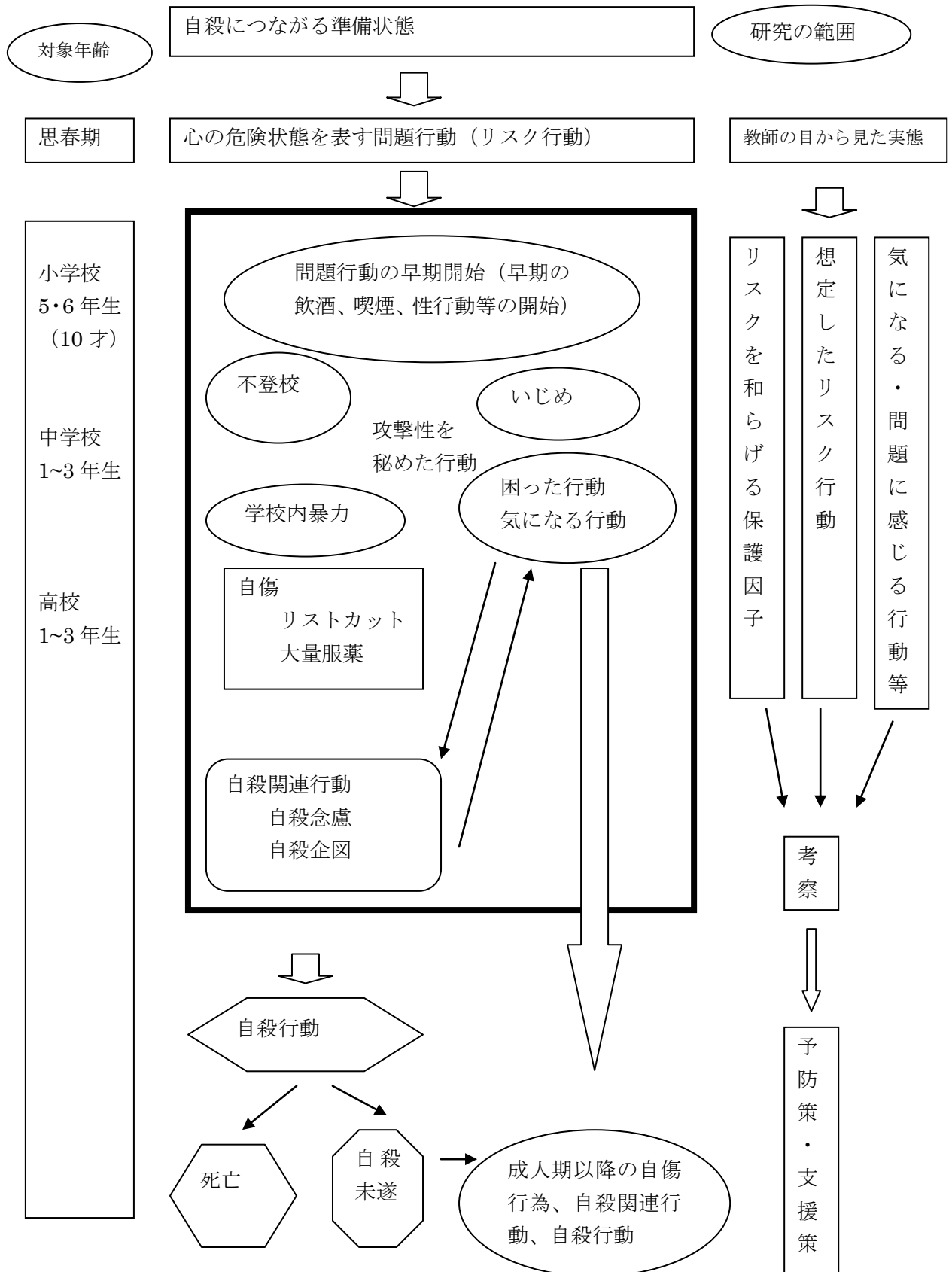
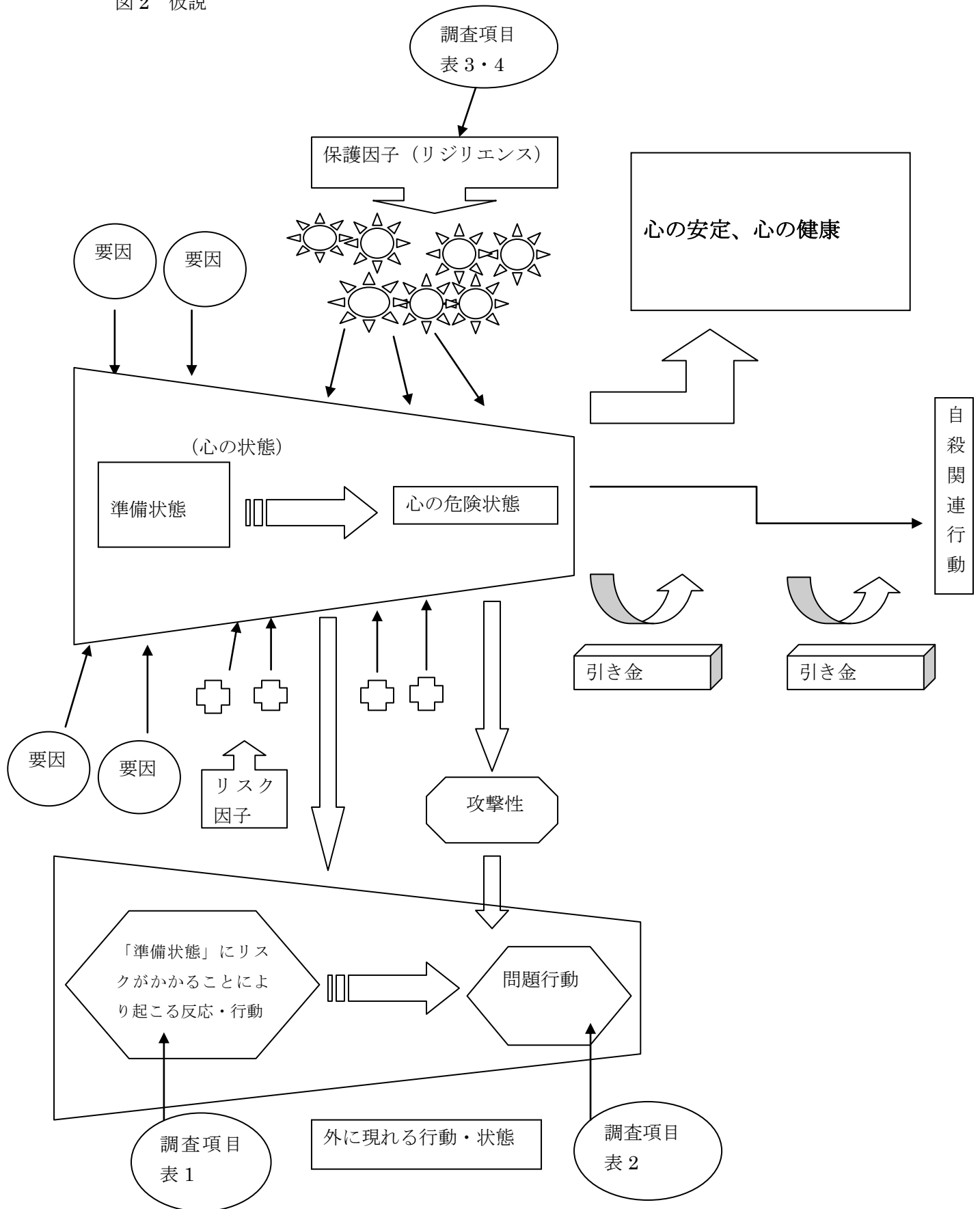


図2 仮説



第2章 児童生徒のこころと行動に関する調査について

1. 調査の概要

1) 目的

思春期の子ども達が示す攻撃的な行動や反社会的な行動は、自殺に関連した行動や心理状態に密接に関連すると言われている。このような、行動（問題〔リスク〕行動）について、教育現場での児童生徒の実態はどのようになっているか。また、リスクに拮抗する役割を果たす保護因子について、教育現場では保護因子的関わりがどのように行われているのか。

今回、児童生徒の問題(リスク)行動や学校の対応について把握し、今後、教育現場や地域の中で、子ども達を支援していくためには何が必要かを検討するため、調査を実施した。

2) 実施主体

宮城県精神保健福祉センター

3) 調査期間

平成22年12月～平成23年1月末

4) 実施方法

(1) 対象年齢・学年

10歳～18歳（①小学校5・6年生 ②中学校1～3年生 ③高校1～3年生）

(2) 調査対象者

各クラスの担任教師

(3) 方法

①小学校：県内国公立・私立小学校162校（分校除く）調査

公立（仙台市除く）小学校（157校を抽出）、私立小学校（4）、

国立小学校（1） 5・6学年から1クラスずつ抽出： $162 \times 2 = 324$

②中学校：県内国公立・私立中学校157校（分校除く）調査

公立（仙台市除く）中学校（148校）、私立中学校（8）、国立中学校（1）

1～3学年から1クラスずつ抽出： $157 \times 3 = 471$

③高校：全日制高校90校調査

県立高校（69）、私立高校（19）、市立高校（仙台市除く）（2）

1～3学年から1クラスずつ抽出： $90 \times 3 = 270$

※調査票の提出方法：返信用封筒にて宮城県精神保健福祉センターあて送付。

5) 調査内容

- ・担任教師が「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒の数
- ・想定した問題（リスク）行動がみられる児童生徒の数
- ・想定した問題（リスク）行動以外に、「気になる」「問題だ」と担任教師が感じて

いる児童生徒の行動

- ・想定した保護因子的関わりについての教育現場の現状
- ・教師の対応、取り組みの状況

6) 調査票の回収率

	小5	小6	小5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	総計
配布クラス	162	162		157	157	157	90	90	90	1,065
回収クラス	136	135	※8	142	140	138	83	83	83	948
回収率(%)	84.0	83.3		90.4	89.2	87.9	92.2	92.2	92.2	89.0

※小学校5年生及び小学校6年生の回答のうち、複合学級のため5・6年生分を1枚の調査票に記入し回答した学校が8校あり

7) 調査回答クラスの児童生徒数

全数(人)		小5	小6	小5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	総計
		3,255	3,288	70	3,791	4,250	4,187	3,031	2,877	2,851	27,600
内訳	男	1,646	1,613	28	1,925	2,143	2,108	1,460	1,333	1,322	13,578
	女	1,514	1,571	42	1,866	2,107	2,079	1,571	1,506	1,463	13,719
	性別記載なし	95	104	0	0	0	0	0	38	66	303

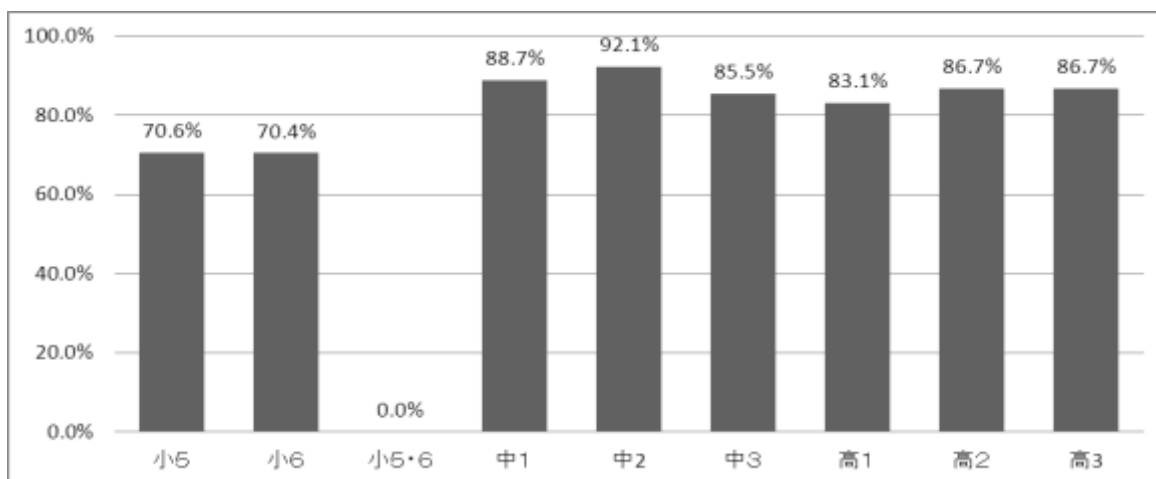
※クラス人数・性別等記載なかった1校(小5)については含まず

2. 調査結果と考察

1) 行動や心の健康で「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒の割合

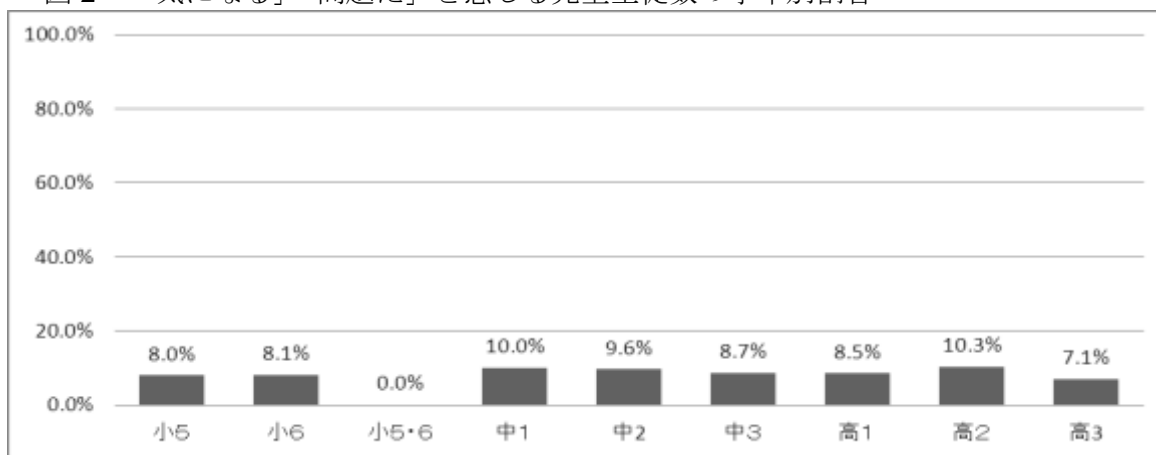
行動や心の健康で「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒が「いる」と回答した担任教師は全体の82.0%を占めていた。学年別では、最も割合が高いのは中学校2年生で92.1%、次いで中学校1年生で88.7%だった。

図1 「いる」と回答した担任教師の学年別割合



「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒の数は2,434人で、全体の8.8%だった。学年別で見ると、最も割合が高いのは高校2年生で10.3%、次いで中学校1年生で10.0%だった。

図2 「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒数の学年別割合



2) 「心に負担がかかった時に表す行動 (以下「表 1」という)」「心の状態の危険度が増した時に表す行動 (以下「表 2」という)」の調査結果と考察

表 1 調査項目

1	元気がなく、怠そうにしたり、疲れているようにみえる
2	悲しそうな顔や暗い表情をしたり、憂うつそうにしている
3	頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える
4	過呼吸を起こす
5	いつも眠そうにしている
6	急にヤせてきた、逆に急に太ってきた
7	イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる
8	落ち着きがない
9	集中力がない
10	ぼーっとしていることが増えた
11	保健室を頻繁に利用する
12	遅刻や欠席が多い・出席率が悪い
13	不登校または不登校傾向がある
14	家に帰りたがらない
15	急に成績が下がった
16	誰とも話したがらないなど、周りとの関係を持とうとしない
17	急に友達とのつきあいが減った、クラスメートの中に自分から入っていかない等、孤立している
18	教育費・給食費の支払い遅れや未払いがあった、必要な文房具が揃えられない、本人から経済的困窮に関する訴えがある等、経済的な問題がある (以下、「教育費・給食費の未払いや遅れ、本人からの経済的困窮に関する訴え等、経済的な問題がある」という)
19	暴力やネグレクト (不衛生な着衣、食事が与えられない等) 等、虐待が疑われる

表 2 調査項目

1	自転車、バイク、自動車等で無謀な運転をしたり、しばしば事故を起こしてしまう
2	たびたびけんかをする
3	身の危険を顧みないような行為を繰り返す、または、しばしばケガを負う
4	家庭内暴力がみられる
5	他の児童生徒に対して暴力をふるう
6	教師に対して暴力をふるう
7	学校内の施設や物を壊したりする
8	性的逸脱行為がある
9	授業をさぼる
10	夜遅くまで遊ぶ
11	触法行為等がある（万引きや自転車を盗む、家のお金を黙って持ち出す 等）
12	無断外泊や、家に帰らずに遊び歩くことが多い
13	急に、髪、化粧、服装等が派手になった
14	喫煙をする
15	飲酒をする
16	薬物の乱用がある（シンナー、薬の過量服薬 等）
17	リストカットをしたことがある
18	「死にたい」と口にすることがある

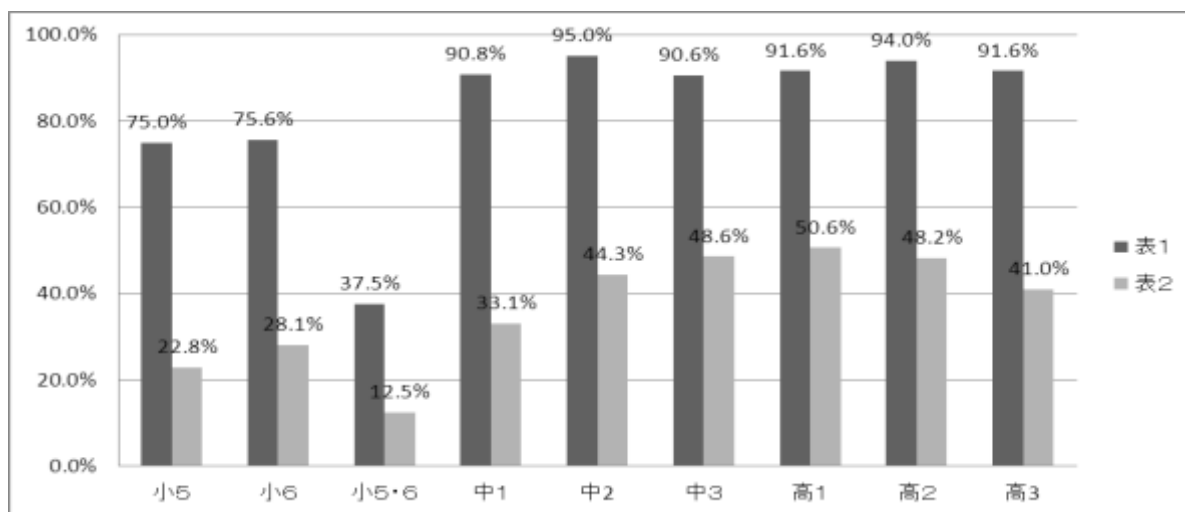
(1) 表 1・表 2 に該当する児童生徒の割合

表 1 は、心に負担がかかった時に表す行動を想定し、表 2 は心の状態の危険度が増した時に表す行動を想定して項目立てをした。

表 1 に該当する児童生徒が「いる」と回答した担任教師は全体の 86.9%を占めていた。学年別で見ても、7～9 割と高い割合を示している。最も高い割合を示しているのは中学校 2 年生で 95.0%、次いで高校 2 年生で 94.0%だった。

表 2 に該当する児童生徒が「いる」と回答した担任教師は全体の 38.2%を占めていた。学年別で見ると、2～5 割とばらつきが見られ、小学校、中学校、高校と学年が上がるにつれ割合は高くなっている。最も高い割合を示しているのは高校 1 年生で 50.6%、次いで中学校 3 年生で 48.6%だった。

図3 表1・2に「該当あり」の担任教師の割合

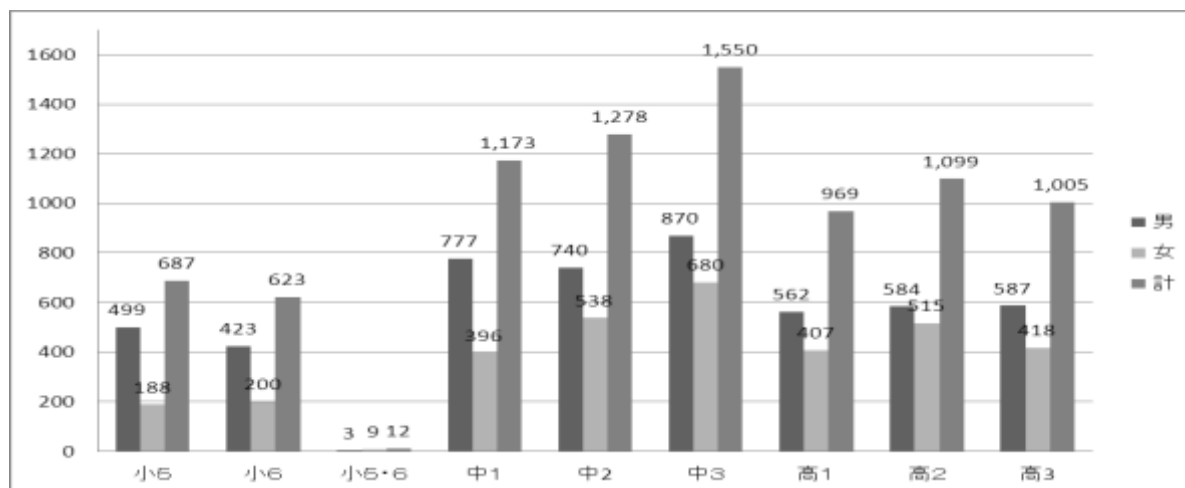


(2) 表1の結果と考察

①該当する児童生徒数と傾向

表1の各項目に該当する児童生徒の人数を合計し、図4に学年別、男女別に表した。総該当児童生徒数は延べ 8,396 人だった。該当人数を学年毎に見ると、全学年を通じて男子の方が多。しかし、学年が上がるにつれて男女の差が小さくなり、特に、高校の男女の差が小さい。

図4 表1に該当する児童生徒延人数

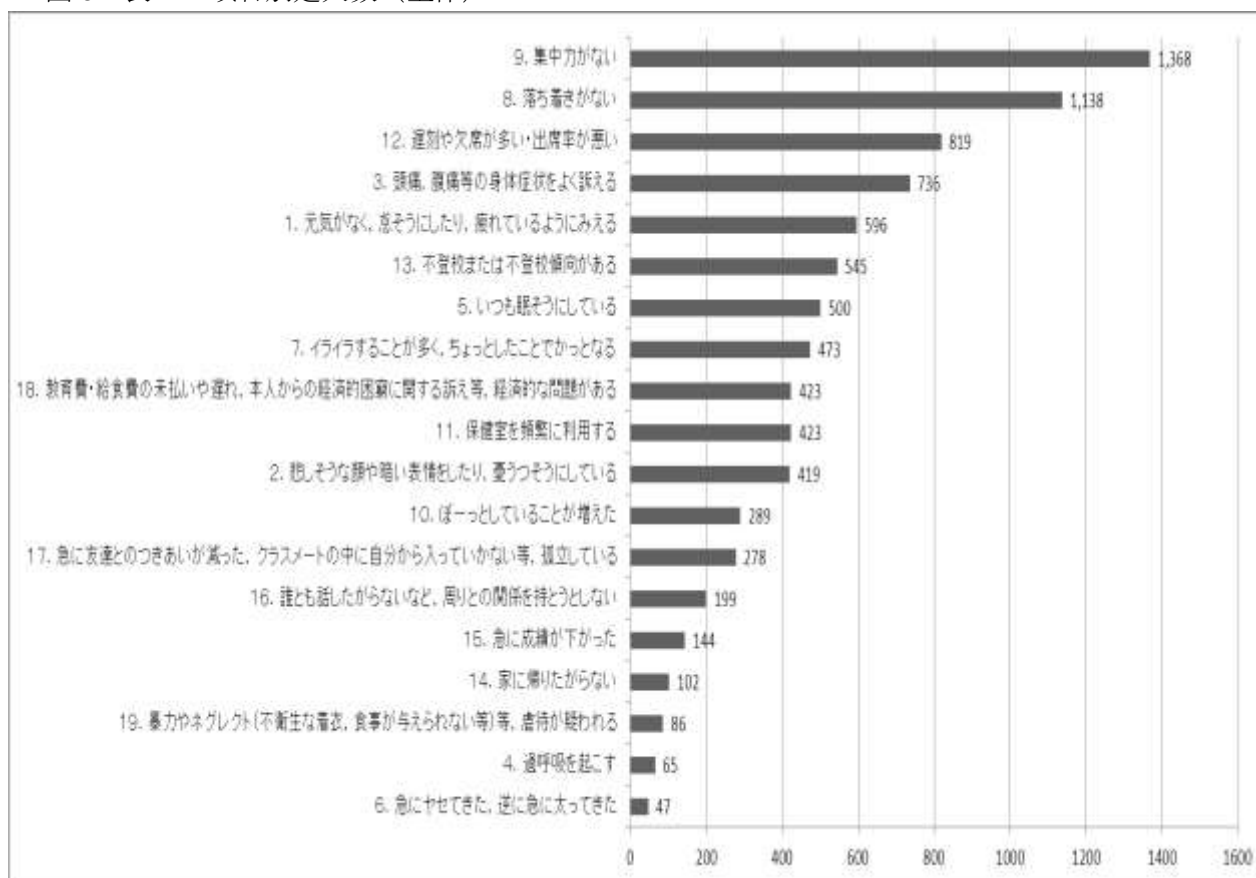


②調査結果と特徴

A. 全体

総該当児童生徒数のうち上位項目の最多は「9.集中力がない」であり、次いで「8.落ち着きがない」「12.遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」「3.頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える」「1.元気がなく、怠そうにしたり、疲れているようにみえる」の順であった。

図5 表1の項目別延人数（全体）



B. 男女別

男子は全学年を通して「9.集中力がない」「8.落ち着きがない」が全体の38.2%と高く、次いで「12.遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」「5.いつも眠そうにしている」「1.元気がなく、怠そうにしていたり、疲れているように見える」「7.イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる」と続いていた。

女子は「3.頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える」「12.遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」「9.集中力がない」「11.保健室を頻繁に利用する」「13.不登校または不登校傾向がある」と続き、男子ほど各項目に差はなかった。

図6 表1の項目別延人数(男子)

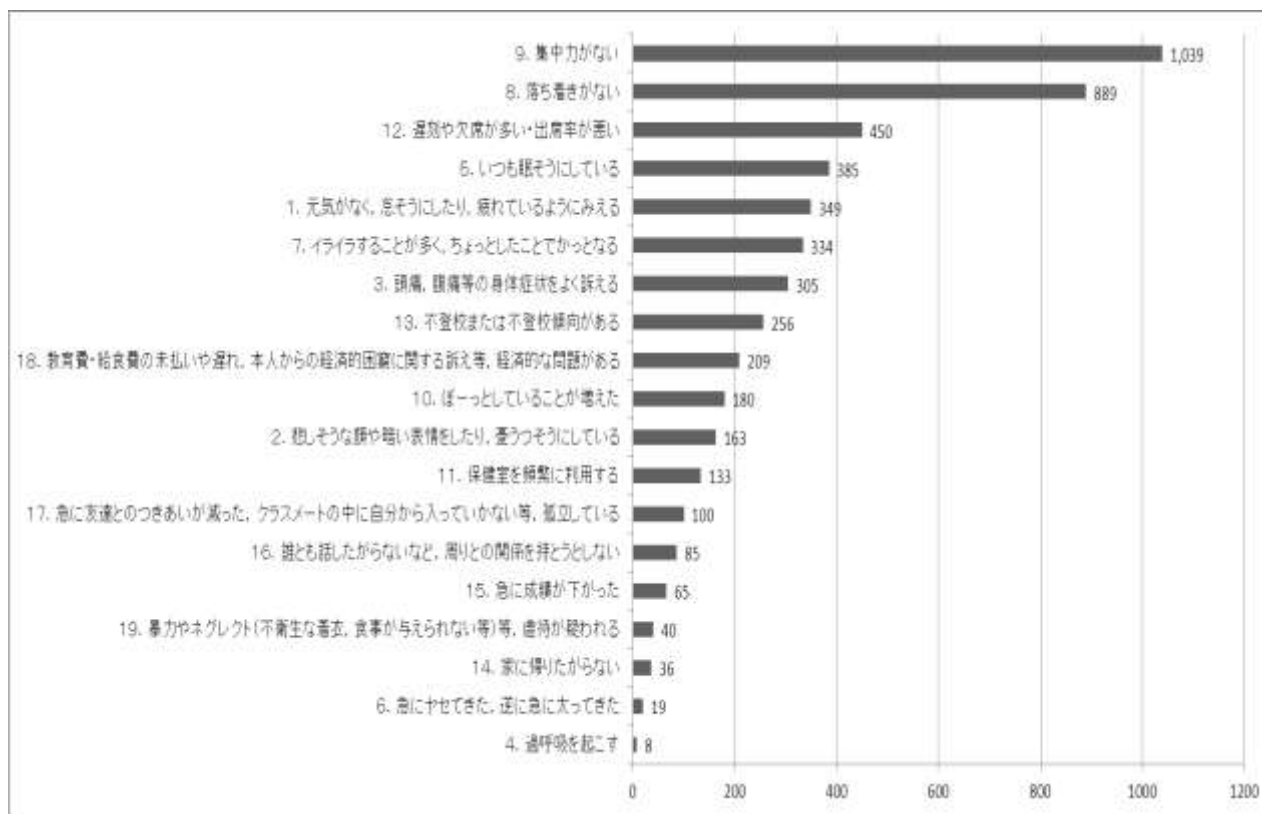
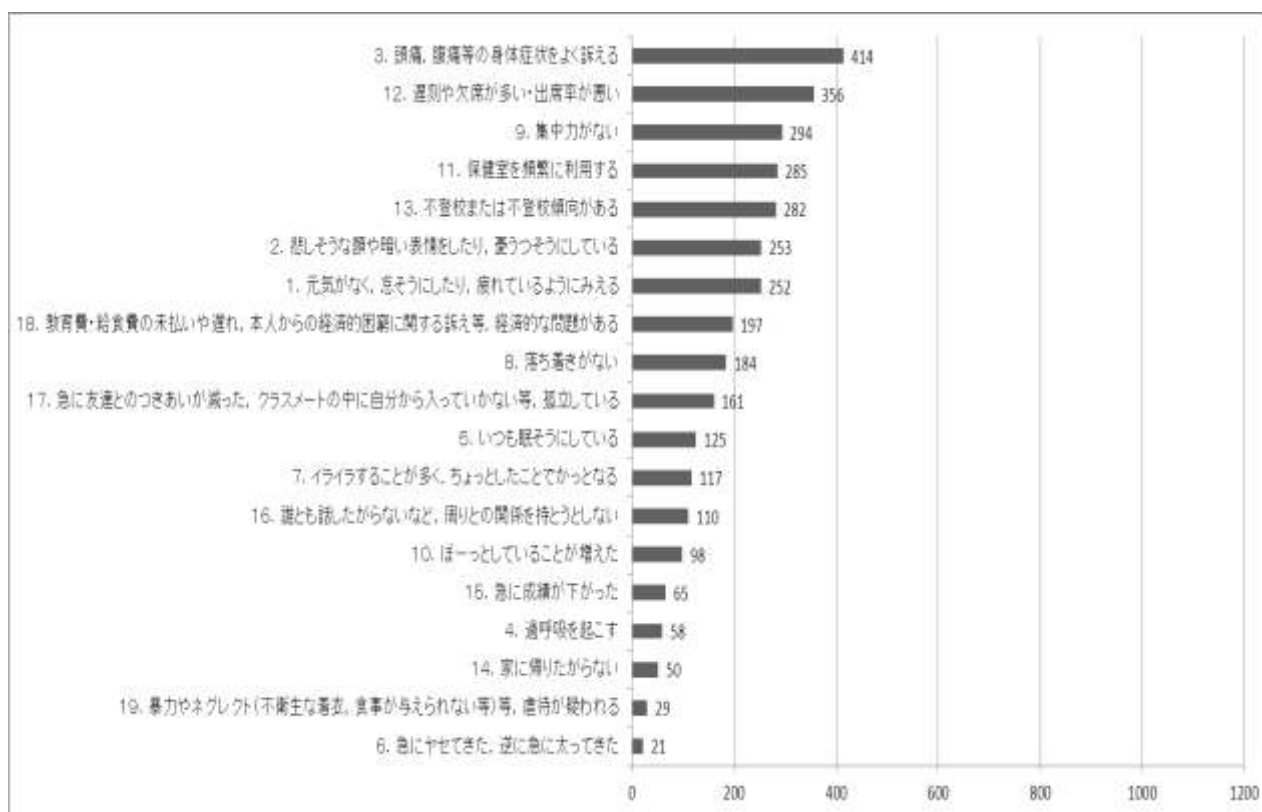
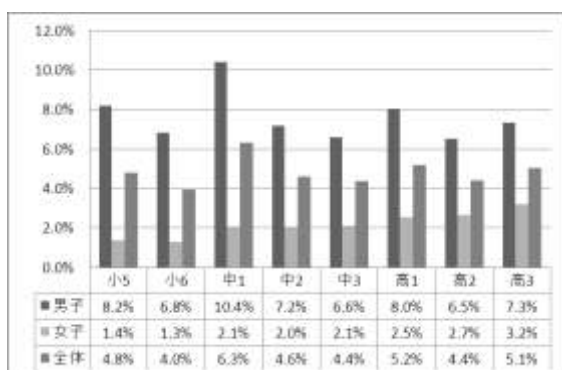


図7 表1の項目別延人数(女子)



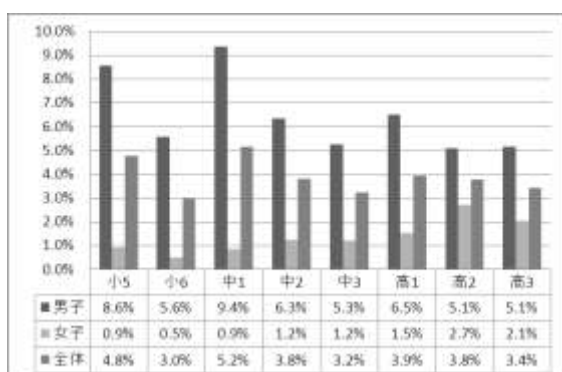
C. 上位 8 項目

「9. 集中力がない」



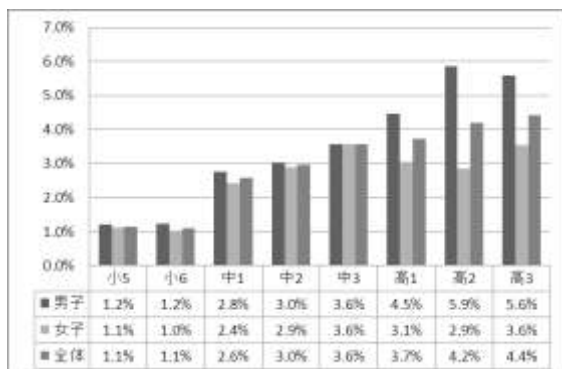
男子が女子よりも学年を通して高率であり、差が大きかった。男子では全体として横ばい傾向だが、中学校 1 年生にピークがあり、女子は学年が上がるに従って上昇傾向であった。

「8. 落ち着きがない」



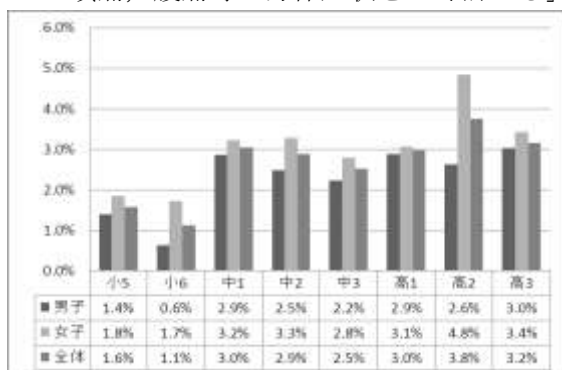
男子が女子よりも学年を通して高率であった。男子では全体として横ばい傾向だが、その中でも小学校 5 年生と中学校 1 年生で高かった。女子では学年が上がるに従って上昇傾向であり、ピークは高校 2 年生であった。

「12. 遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」



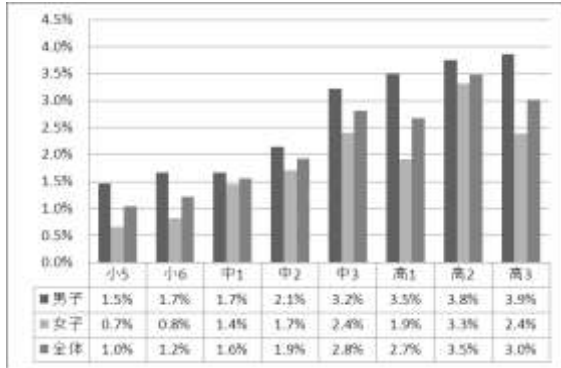
小学校 5・6 年生では男女共に同程度の割合となっていた。その後はどちらも学年が上がるに従って上昇傾向を示していたが、男子の方がその傾向が強かった。

「3. 頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える」



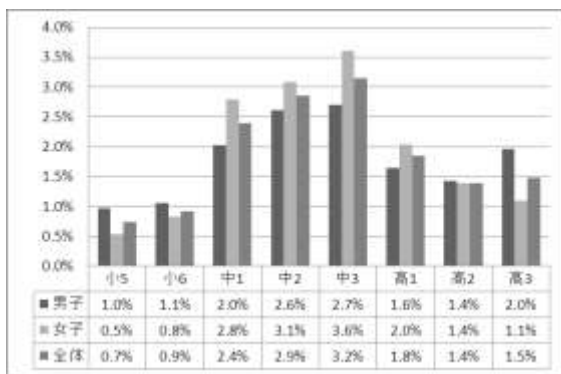
女子が男子よりも学年を通して全体として高かった。男子は中学校になって高まり、以降はほぼ横ばいであった。女子も同様の傾向だが、高校 2 年生にピークがあった。

「1. 元気がなく、怠そうにしたり、疲れているように見える」



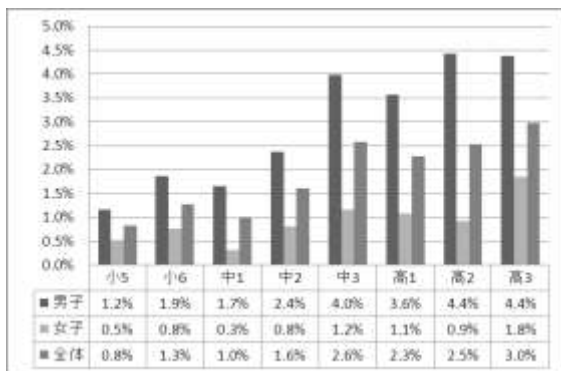
男女共に学年が上がるに従って上昇傾向であった。男女共に同程度の割合であった。

「13. 不登校または不登校傾向がある」



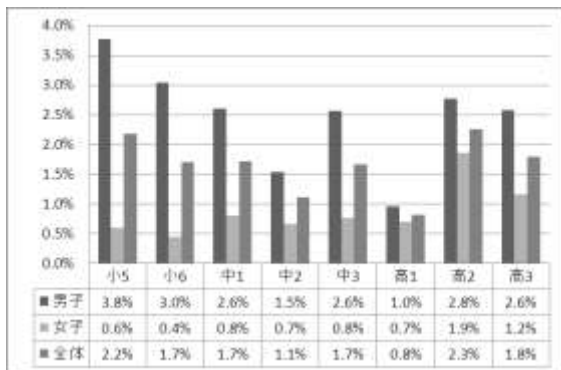
男女差は少なく、中学校で高い傾向であった。

「5. いつも眠そうにしている」



男子が女子よりも学年を通して高く、男女共に学年が上がるに従って上昇傾向であった。

「7. イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる」



男子が女子よりも学年を通して高かった。男子は小学校5年生が1番高く、中学校2年生と高校1年生を底にしたW型であった。女子は全体として横ばいだが、高校2年生にピークがあった。

③考察

表1の項目は、学校生活の中で子ども達の気になる行動として日常的に見られ、教師や養護教諭などが日頃から関わっている内容であると思われる。「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒は全体の8.8%（2,434人）であったが、表1の総該当児童生徒数は8,396人であり、一人が複数の項目に該当していることが推測される。これらの項目はリスクの高い「問題行動」と直接結びつくとは言えないが、子ども達の心に何らかの負担がかかっている状態と考えられる。これらに対応することは、子ども達の心の健康づくりいわゆるポピュレーションアプローチとして必要と思われる。

項目別では、男子に見られる「9.集中力がない」「8.落ち着きがない」「7.イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる」の項目に関しては、小学校5・6年生、中学1年生で高い傾向が見られたため、それより低い学年からの関わりが重要で、発達の側面からも十分に考慮しつつ考えていく必要がある。また「3.頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える」は中学校の初期から注目すべき項目であると考えられる。さらに女子に多い「11.保健室を頻繁に利用する」については、保健室利用を支援への希求行動として捉え、その背景に隠されている要因を視点に接していく必要がある。また、身体的な訴えを持ちながらも保健室利用を希望しない子ども達や、全体で5番目に多い「1.元気がなく、怠そうにしたり、疲れているようにみえる」に該当する子ども達は自発的な訴えが少なく、関わりが難しいことが伺われる。「12.遅刻や欠席が多い・出席率が悪い」に関しては、学年が上がるほど関わりが難しくなることが予想され、「13.不登校または不登校傾向がある」ともつながっていく項目である。長期の不登校の一部はひきこもりへの移行が指摘されており、地域の関係機関との連携がより必要となると考えられる。

上位には入っていないが「18.教育費・給食費の未払いや遅れ、本人からの経済的困窮に関する訴え等、経済的な問題がある」については、子ども達の家環境、特に経済的な要因は、子ども達の心の負担として少なからず影響していると思われる。

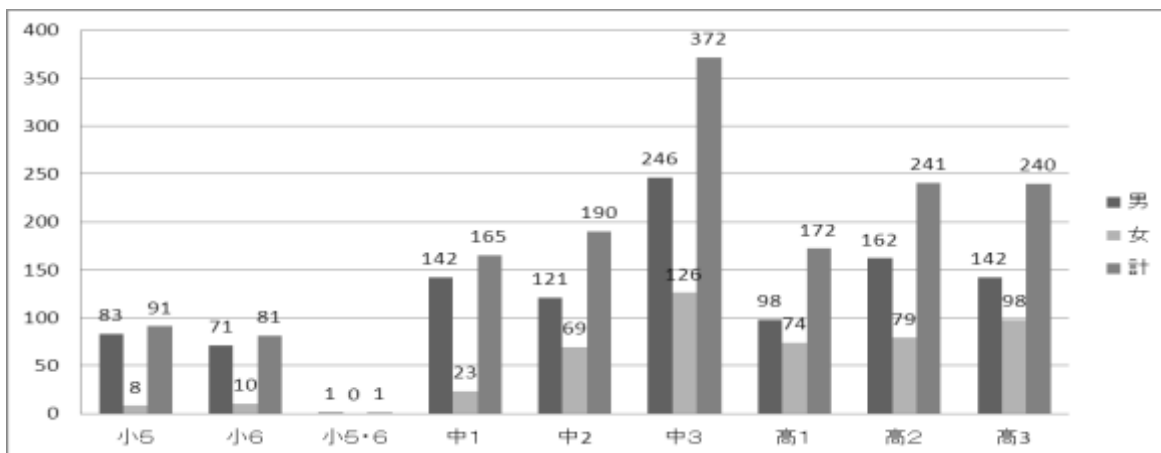
(3) 表2の結果と考察

①該当する児童生徒数と傾向

表2の各項目に該当する児童生徒の人数を合計し、学年別、男女別を図8に表した。総該当児童生徒数は1,553人であり、表1の総該当児童生徒数の2割弱であった。

表2は表1よりも該当数が少なかったが、これは表1よりもより精神的な負担がかかった状況を想定した項目であり、予想された結果であった。男女比については、男子が女子の約2倍、総該当児童生徒数の約7割を占めていた。

図8 表2に該当する児童生徒延人数

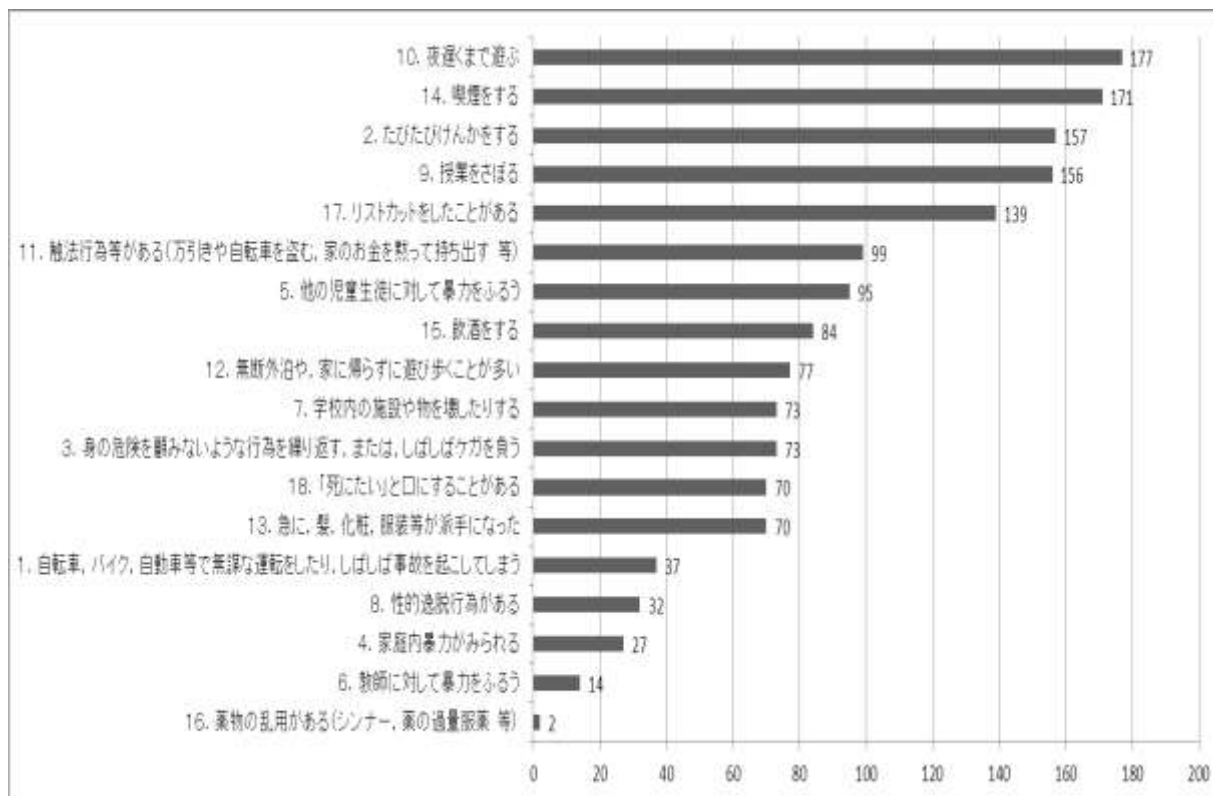


②調査結果と特徴

A. 全体

総該当児童生徒数のうち、上位項目の最多は「10.夜遅くまで遊ぶ」で、次いで「14.喫煙をする」「2.たびたびけんかをする」「9.授業をさぼる」「17.リストカットをしたことがある」の順であった。

図9 表2の項目別延人数（全体）



B. 男女別

上位の項目を男女別で見ると、男子では「14.喫煙をする」「2.たびたびけんかをする」が並んで多く、次いで「10.夜遅くまで遊ぶ」「9.授業をさぼる」「5.他の児童に対して暴力をふるう」の順であった。総該当児童生徒数に占める男子の割合が大きいことから、全体の傾向とほぼ同様であった。

女子では、最多が「17.リストカットをしたことがある」で、次いで「18.「死にたい」と口にすることがある」「10.夜遅くまで遊ぶ」「9.授業をさぼる」「13.急に、髪、化粧、服装等が派手になった」の順であった。中でも最多の「17.リストカットをしたことがある」は女子全体の27.1%で、2位以下を大きく引き離していた。それに次ぐ「18.「死にたい」と口にすることがある」12.1%と合わせると、自傷行為や希死念慮に関する項目で4割近くを占めていた。

図10 表2の項目別延人数（男子）

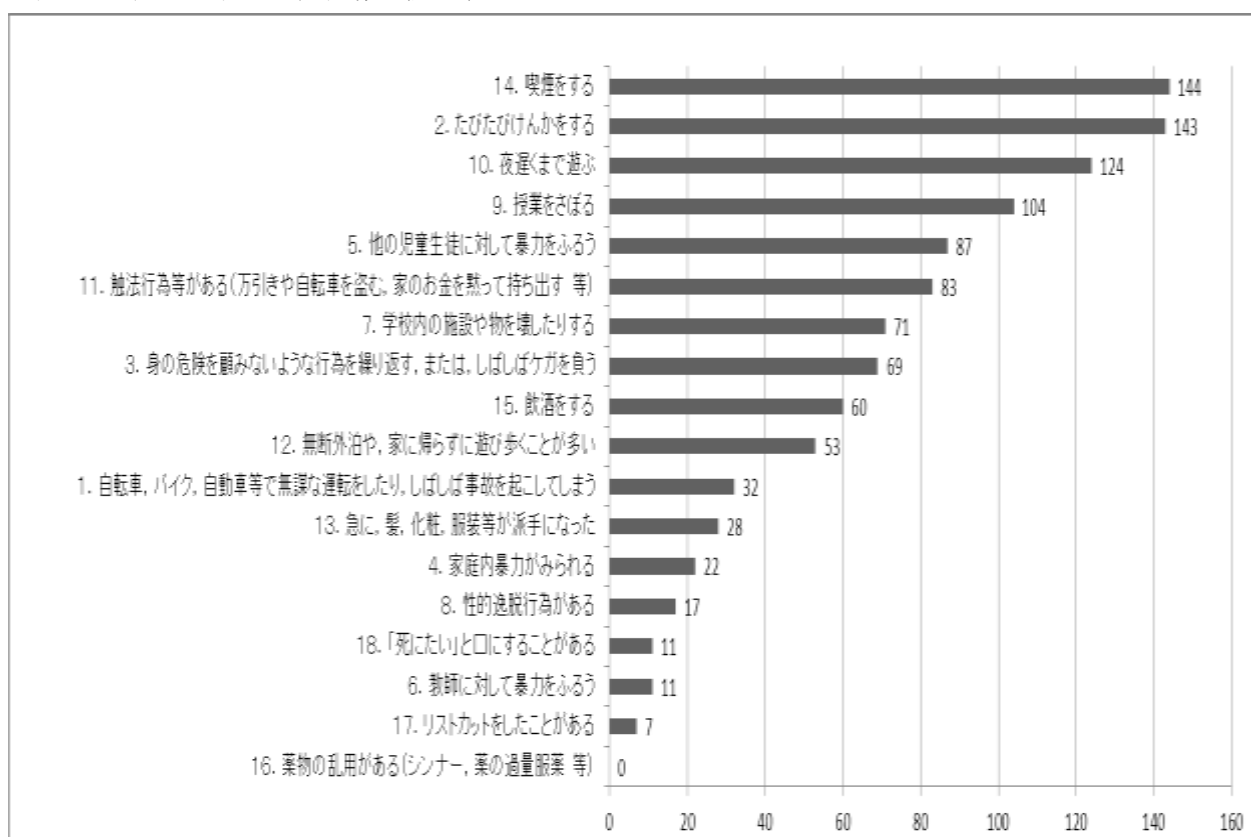
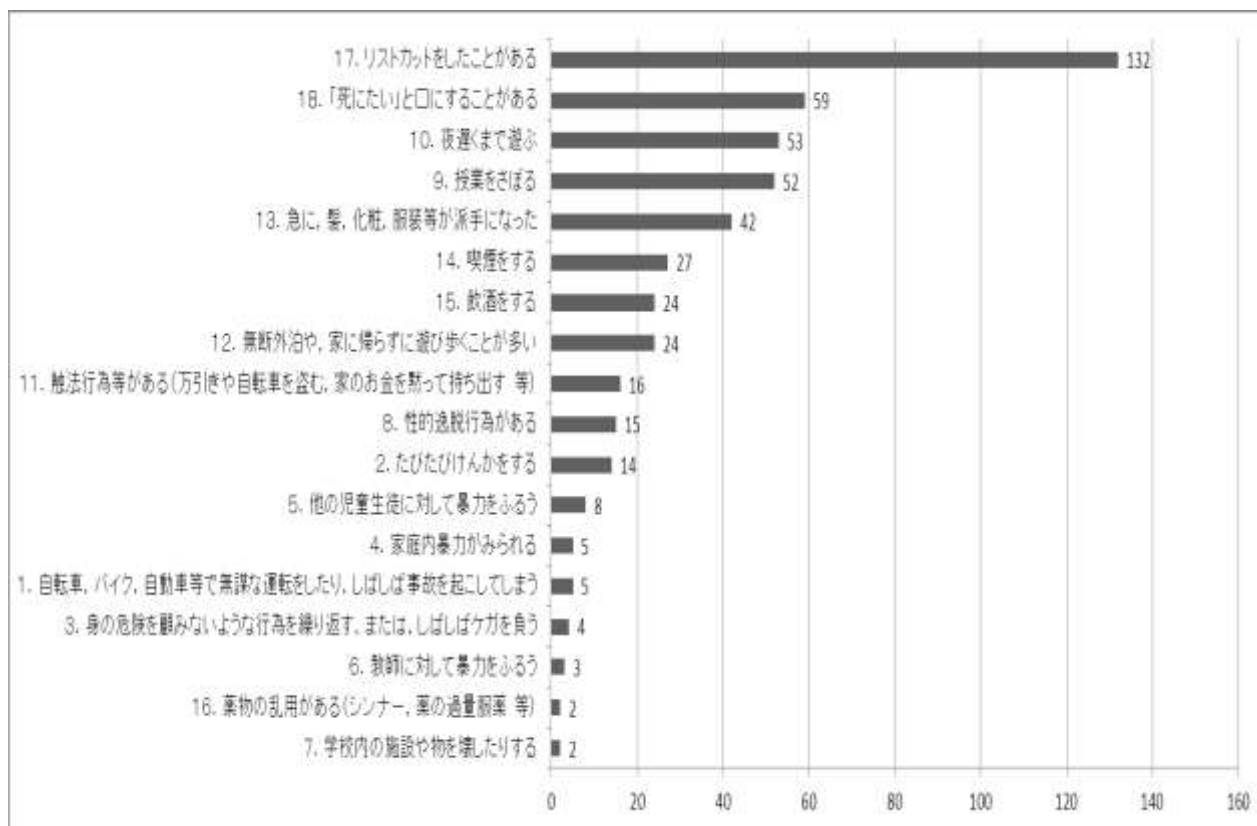
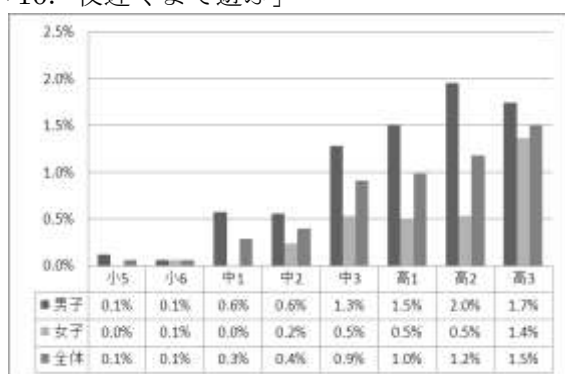


図 11 表 2 の項目別延人数（女子）



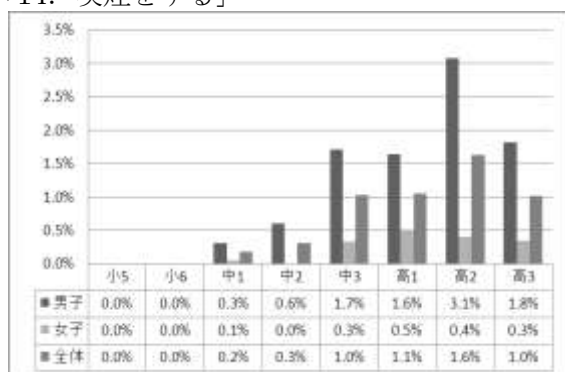
C. 上位 8 項目

「10. 夜遅くまで遊ぶ」



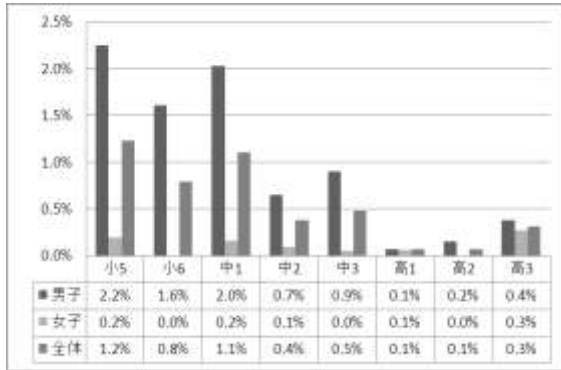
全体で最多の項目であり、男女共に中学校以降の学年で増加する傾向が見られた。男子が女子よりも学年を通して多かった。

「14. 喫煙をする」



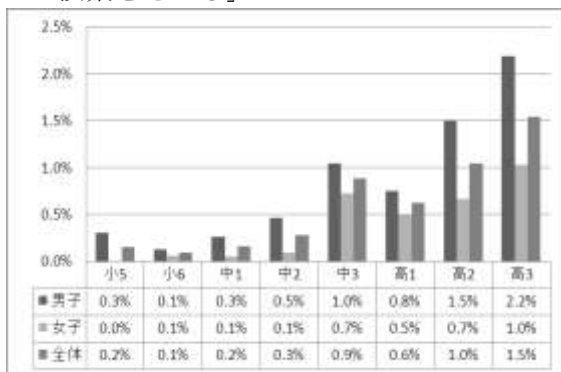
全体では 2 番目に多く、男子では最多の項目であった。男女共に中学校以降の学年で増加し、男女の差が大きい。男子では中学校 3 年生以上の学年で多く、高校 2 年生で最多であった。

「2. たびたびけんかをする」



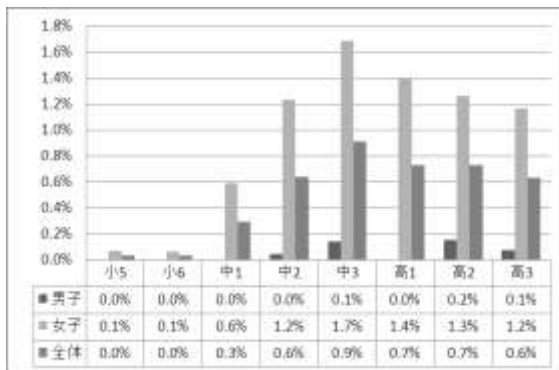
全体では3番目に多く、男子では2番の項目であった。学年が上がるに従って減少する傾向が見られ、男子は小学校と中学校1年生が多く、女子は全体を通して少なかった。

「9. 授業をさぼる」



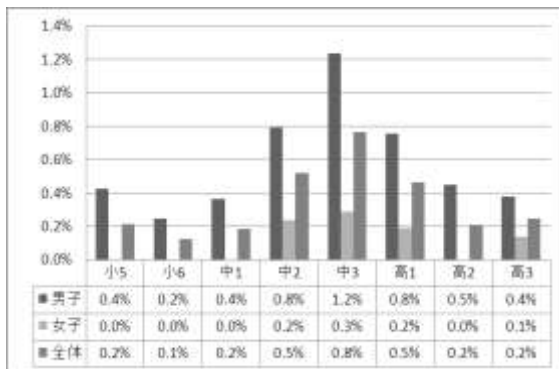
全体、男女別共に4番目の項目であった。男女共に学年が上がるに従って増加する傾向が見られ、男子が女子よりも全体を通して多かった。学年別に見ると男女共に高校3年生が最多であった。

「17. リストカットをしたことがある」



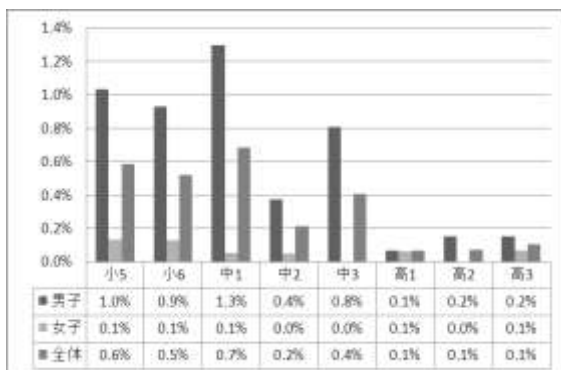
全体では5番目、女子では最多の項目であった。女子は小学校では少数で、中学校以降で該当数が多く、中学校3年生が最多であった。男女差が大きく、男子は全体を通して少数であった。

「11. 触法行為等がある（万引きや自転車を盗む、家のお金を黙って持ち出す等）」



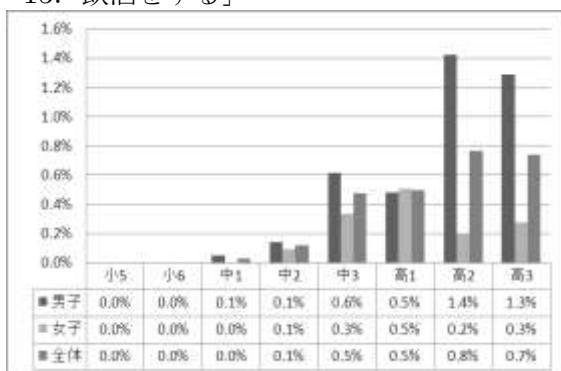
全体では6番目、男子でも6番目の項目であった。男女差が大きく、男子では特に中学校3年生が多かった。

「5. 他の児童に対して暴力を振るう」



全体では7番目、男子では5番目の項目であった。学年が上がるに従って減少する傾向が見られる。男女差が大きく、女子は全体を通して少数であった。男子は小学校、中学校で多く、中学校1年生が最多であった。

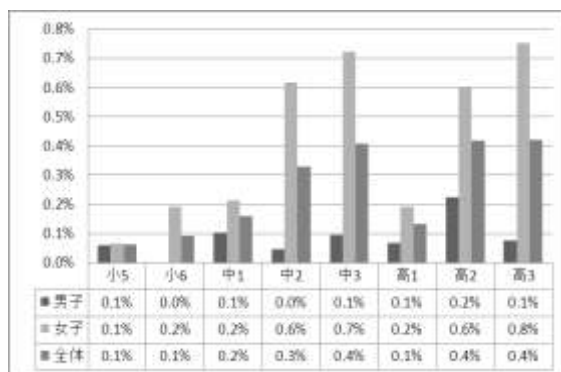
「15. 飲酒をする」



全体で8番目であった。中学校以降に見られることや男女差が大きいこと、高校に特に多いことで「14. 喫煙をする」と同じような傾向が見られた。

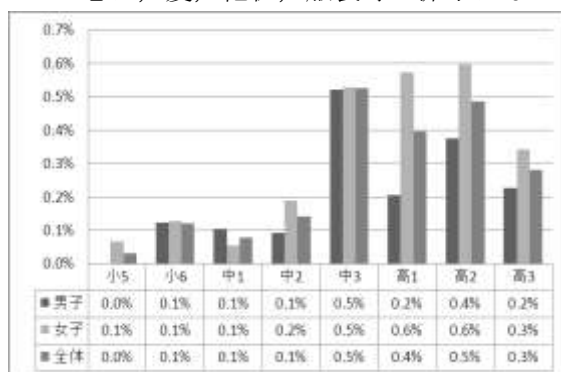
D. その他、特徴的な結果を示す項目

「18. 「死にたい」と口にすることがある」



全体では上位に上がらないが、女子では2番目に多かった項目であった。男女差が大きく、男子は全体を通して少数であった。女子は中学校、高校で多く、その中でも高校3年生が最多であった。

「13. 急に、髪、化粧、服装等が派手になった」



全体では上位に上がらないが、女子では5番目の項目であった。中学校3年生以降に多く、女子は高校2年生が最多であった。

③考察

表 2 の総該当児童生徒数は表 1 と比較して、2 割弱と少なかったが、これは表 1 よりもより精神的に負担がかかった状況を想定した項目であり、当初の予想と一致していた。また、男子が女子よりも多い点や学年が上がるに従って総該当児童生徒数が増加する傾向などは表 1 と類似していた。

全体では上位の項目に、「10.夜遅くまで遊ぶ」「14.喫煙をする」「2.たびたびけんかをする」「9.授業をさぼる」など、生活の乱れも含め、学校生活からより逸脱する傾向、いわゆる非行行為の項目が多く上がっていた。また、男子においては上位 5 項目に次ぐ項目として「11.触法行為等がある（万引きや自転車を盗む、家のお金を黙って持ち出す等）」「7.学校内の施設や物を壊したりする」「3.身の危険を顧みないような行為を繰り返す」の順であり、これらの項目は中学校に多い傾向を示していた。また、学年が上がるに従って減少傾向を示す項目は、「2.たびたびけんかをする」「5.他の児童に対して暴力をふるう」であった。これらの結果から、男子全体では学年が上がるに従って総該当児童生徒数が増加する傾向にあるものの、項目によっては小学校や中学校に多い傾向がみられることがわかった。また、それらの項目はけんかや物を壊すこと、触法行為などであり、より直接的に他者や周囲に向かう攻撃的な行動であると思われる。このような攻撃的な行動が、学年が上がるに従って減少しているのは、成長とともに感情がコントロールされ、直接的な行動が抑制されることも一因ではないかと思われる。いずれにしても背景は多様であるため、心身の発達も含めて多面的に考えていく必要がある。

女子は、「17.リストカットをしたことがある」が女子全体の約 3 割と多く、2 位以下を大きく引き離す結果であり、それに次ぐ「18.「死にたい」と口にすることがある」と合わせると、自傷行為や希死念慮に関する項目で 4 割近くを占める特徴的な結果となった。これらの行動は、直接的に自身に向ける攻撃的な行動と、周囲に向けた SOS の表明という両側面の意味を持つと考えられる。また、女子のその他上位の項目は、服装等の乱れや夜遊び、授業をさぼる、たばこや飲酒などほぼ男子と類似しており、いわゆる非行行為と呼ばれる学校や生活での逸脱行動であった。なお、男子では小学校や中学校に多い傾向の項目があったが、女子ではそのような項目はなかった。

表 2 の項目は、表 1 よりも精神的に負担が強まった場合に子どもに表れやすいリスク行動を想定して設定しているため、行動の変化の程度が大きく、通常よりもより逸脱した行動レベルになっている。また、結果的には表 1 よりもより他者との関係の中で表れる行動（例えば暴力など）や本人の意識的な行動（例えば喫煙や飲酒）を拾い上げている。また、表 1 が、学校生活のより身近な観察の中で把握される行動であるのに対して、表 2 は学校生活から逸脱し、学校以外の地域社会でも把握されうる行動が多い内容となっている。

今回の表 2 の結果からは、夜遊びや喫煙、飲酒やけんか、授業をさぼるなどのいわゆる非行行為が、男女に共通して多く見られる反面、直接的な暴力傾向や自傷行為などは、男女差があるといった特徴的な傾向も見られた。加えて年代による特徴も見られることから、心身の発達をよく踏まえることが大切であり、学校のみならず、家庭や地域のそれぞれの立場から変化を把握してゆく必要性があると思われる。

また、表 2 の結果を別の側面から見ると、学校現場においては学校生活に留まらず、家庭を含めた地域社会における行動の乱れも含めてかなりの情報が把握されていることが明らかになったと思われる。これは子ども達への支援を考えていく上で、学校が把握している情報を家庭や地域とどのように共有し、それぞれの立場の支援にどう活かしていくかという点で重要な課題ではないかと考えられる。

3) 「気になる子や問題のある子への対応 (以下「表 3」という)」「実際の対応の中で心がけてきたこと難しいと感じること (以下「表 4」という)」の調査結果と考察

表 3・表 4 は「気になる子」や「問題のある子」に対して、保護因子になると考えられる学校での対応や先生の心構えを想定し、項目立てをした。各項目の傾向や学年による違いを分析し、学校での対応状況を明らかにした。

(1) 表 3 の結果と特徴

表 3 調査項目

1	学校への登校が途切れないように継続的に声がけをしている
2	面接、家庭訪問等でコミュニケーションをとり、児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている
3	補習授業など学習面での配慮を行っている
4	出席日数への配慮等を行っている (例えば、出席日数が不足しないための配慮 等)
5	出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している
6	校内で話し合いを持ち、生徒への統一した対応方針などを協議・決定している
7	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、校医等に相談しながら対応している
8	他機関と連携しながら対応している

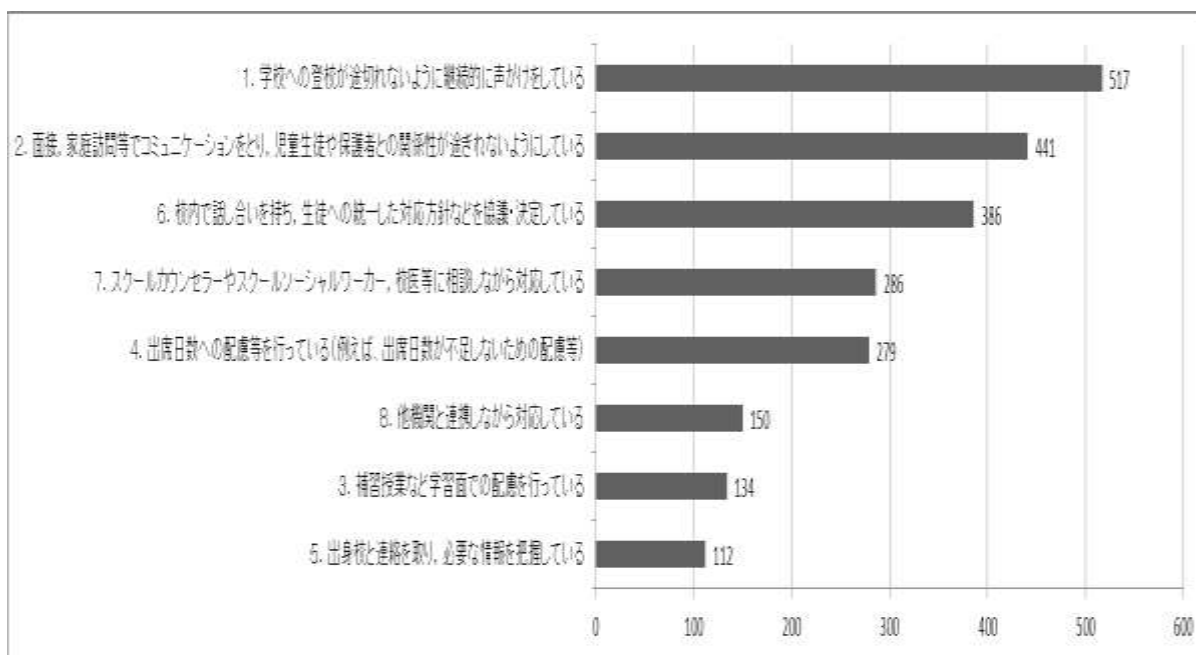
分析方法

各項目への対応について「a 十分に実施していると思う」「b 実施しているが、やや不十分だと思う」「c 実施しているが、まだまだ不十分だと思う」「d 実施していない」から該当する所を選んでもらった。以下、「a 十分に実施している」を「十分に実施」、「b 実施しているが、やや不十分だと思う」と「c 実施しているが、まだまだ不十分だと思う」を合わせ「不十分だが実施」、「d 実施していない」は「実施していない」で分析した。

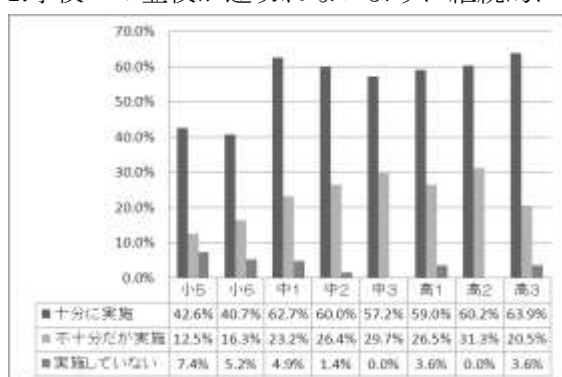
① 「十分に実施」項目

全学年を通して高い項目は「1.学校への登校が途切れないように継続的に声がけをしている」「2.面接、家庭訪問等でコミュニケーションをとり、児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている」だった。

図 12 「十分に実施」の項目別延人数

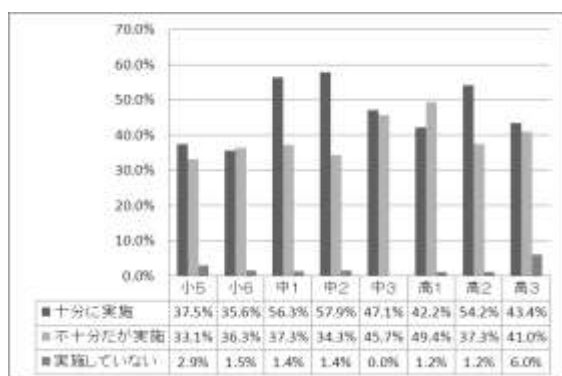


「1.学校への登校が途切れないように継続的に声かけをしている」



小学校で4割、中学校・高校では6割となっている。

「2.面接、家庭訪問等でコミュニケーションをとり、児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている」

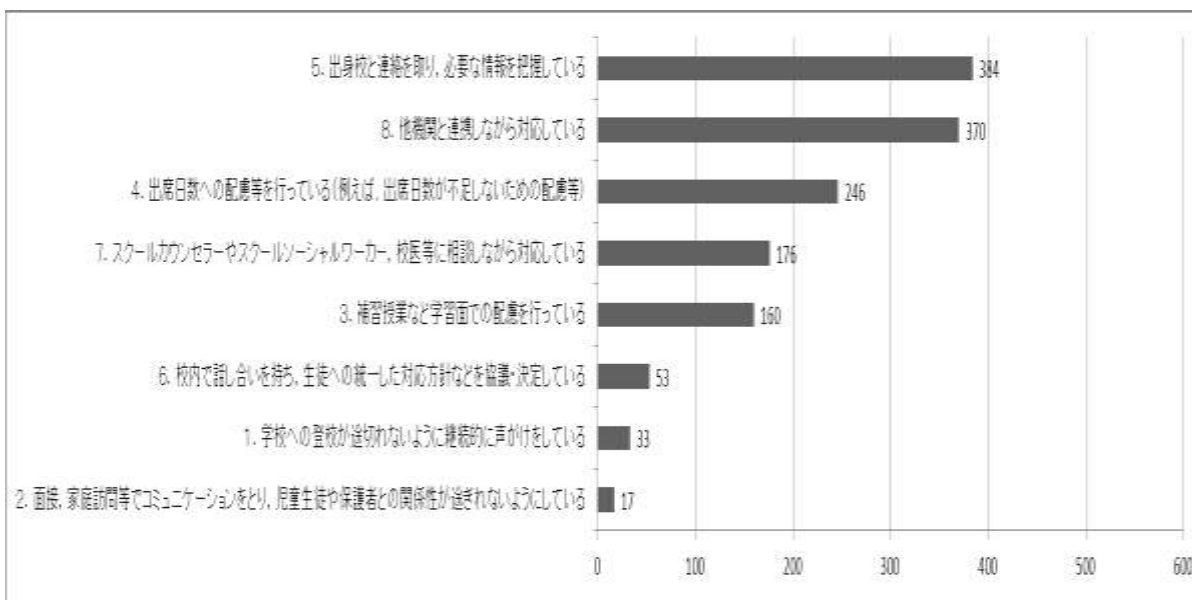


小学校では3割強で、中学校・高校では5割前後となっている。

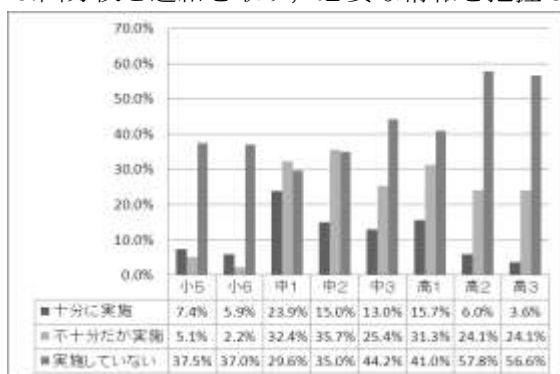
②「実施していない」項目

全学年を通して高い項目は「5.出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している」「8.他機関と連携しながら対応している」だった。

図 13 「実施していない」の項目別延人数

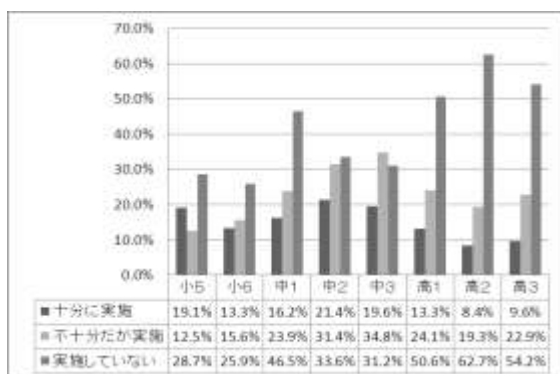


「5.出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している」



高校2・3年生が6割弱となっている。

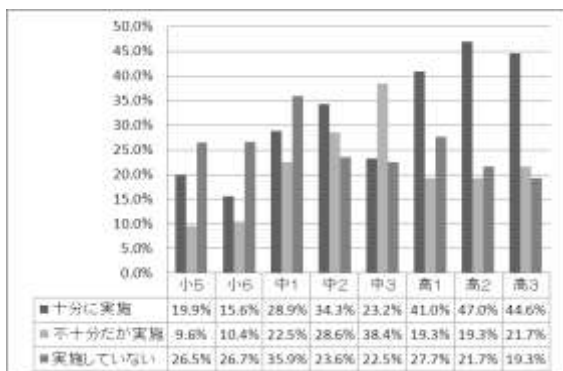
「8.他機関と連携しながら対応している」



小学校では3割、中学校では4割、高校では5割と学年が上がるに従って実施していない割合が高くなっている。

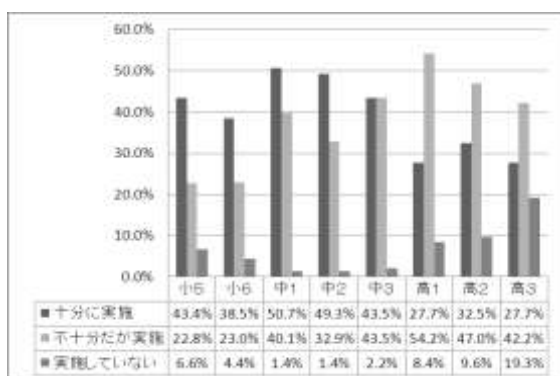
③学年により差がある項目

「4. 出席日数への配慮等を行っている（例えば、出席日数が不足しないための配慮等）」



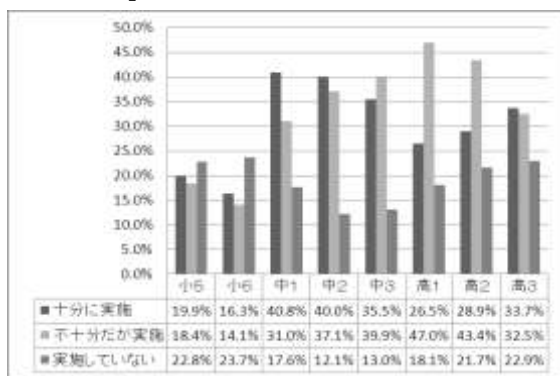
「十分に実施」の割合は、学年が上がるにつれ高くなり、高校では4割強と最も高く、中学校では3割、小学校では2割弱と低くなり、逆に「実施していない」の割合が高くなっている。

「6. 校内で話し合いを持ち、生徒への統一した対応方法などを協議・決定している」



「十分に実施」が小学校で4割、中学校では5割であり、高校では3割となっている。高校については「十分に実施」が低く、「不十分だが実施」が5割前後と高くなっている。

「7. スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、校医等に相談しながら対応している」



小学校で「実施していない」が2割強で、「十分に実施」より高くなっている。中学校では「十分に実施」の割合は4割で、高校では「不十分だが実施」の割合が高くなっている。

(2) 表4の結果と特徴

表4 調査項目

1	子どもの気持ちを知ろうとする努力をすること
2	その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること
3	なるべく孤立しないように働きかけること
4	受容され、見守られている感覚がもてるようにすること
5	学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保証し、伝えること
6	問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること
7	学習面だけでなく、子どもが学校に来やすくなるような配慮や働きかけをすること
8	成長過程を踏まえた上で、今どのように関わるべきかを意識すること
9	学校のみならず、家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること

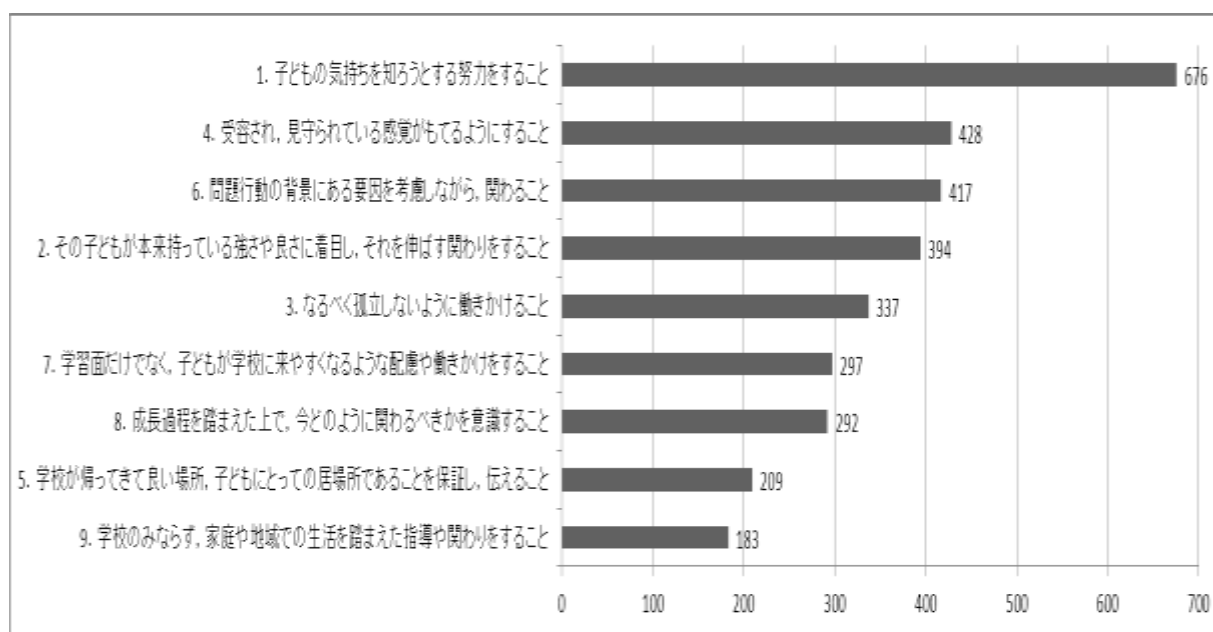
分析方法

「心がけてきた点」「難しいと感じること」について、各項目から3つ以内で選んでもらった。以下、「心がけてきた点」を「心がけてきた」、「難しいと感じること」を「難しい」、「心がけてきた」と「難しい」両方を選択している場合「両方（再掲）」で分析した。

①「心がけてきた」項目

「1.子どもの気持ちを知ろうとする努力をすること」は、全学年で7割前後と他の項目と比べて飛び抜けて高く、次いで「4.受容され、見守られている感覚がもてるようにすること」「6.問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること」「2.その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること」が4割前後となっている。

図14 「心がけてきた」の項目別延人数



② 「難しい」項目

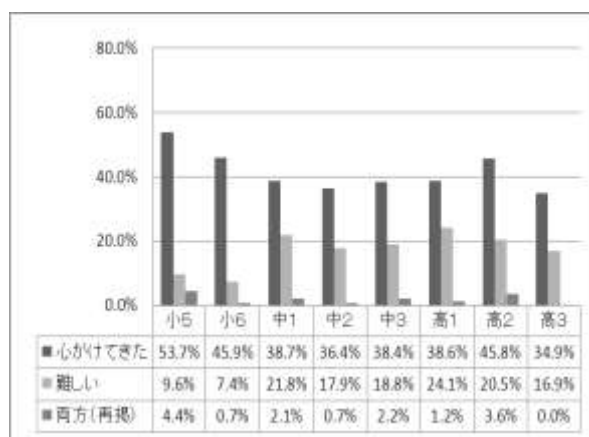
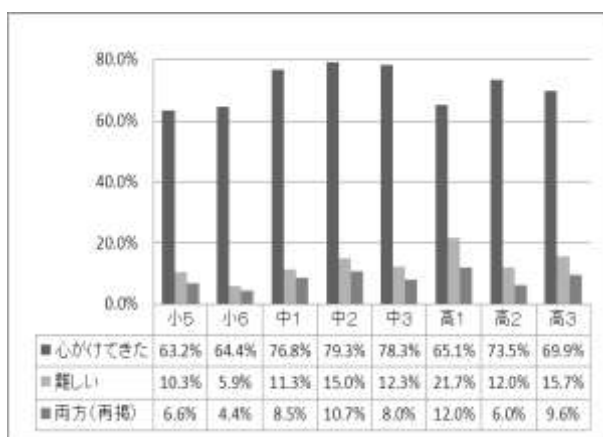
「9.学校のみならず、家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること」が全学年で5割前後と高く、次いで「6.問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること」「8.成長過程を踏まえた上で、今どのように関わるべきかを意識すること」が2～3割前後となっている。

図 15 「難しい」の項目別延人数

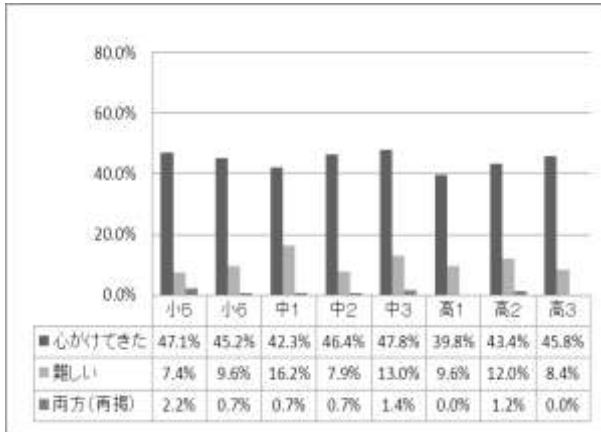


③ 「心がけてきた」「難しい」の各上位4項目

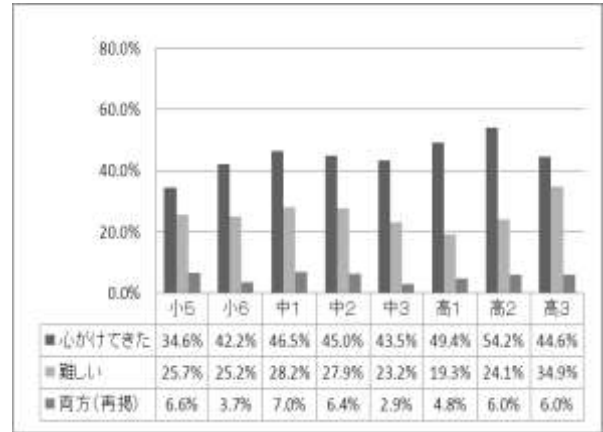
「1. 子どもの気持ちを知ろうとする努力をすること」 「2. その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること」



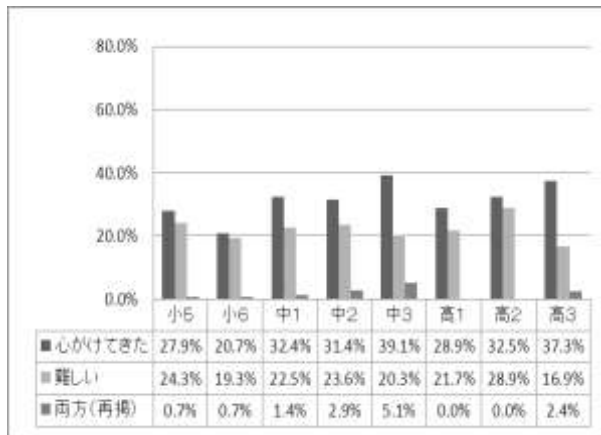
「4. 受容され、見守られている感覚がもてるようにすること」



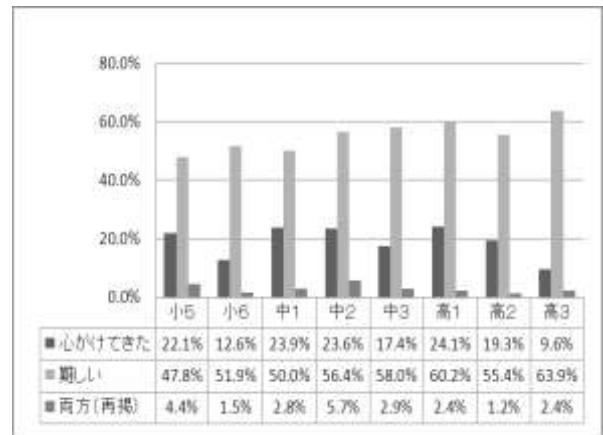
「6. 問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること」



「8. 成長過程を踏まえた上で、今どのように関わるべきかを意識すること」

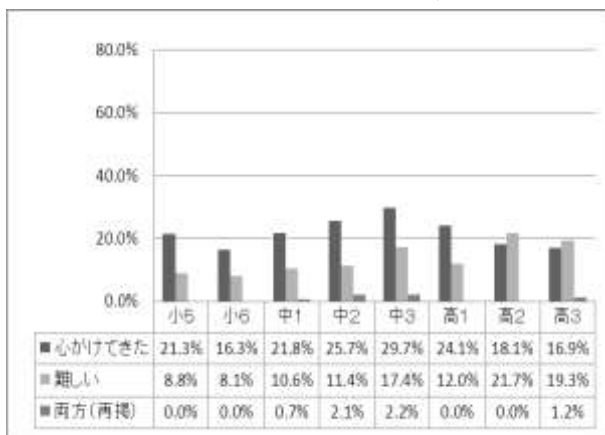


「9. 学校のみならず、家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること」



④その他、特徴的な結果を示す項目

「5. 学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保証し伝えること」



小学校5年生～高校1年生までは「心がけてきた」の割合が高いが、高校2～3年生は逆転し「難しい」の割合が高くなっている。

(3) 考察

表 3 を見ると「1.学校への登校が途切れないように継続的に声がけをしている」「2.面接、家庭訪問等でコミュニケーションをとり、児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている」は全学年を通じて実施されていた。一方、「5.出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している」「8.他機関と連携しながら対応している」が全学年を通じて実施していない率が高かった。実施されている項目は、学校主体又は単独で取り組める内容のもので、さらには、学校又は教師が本来持っている役割の中で実行しやすい関わりであると言える。このように、学校本来の役割、業務として行える保護因子については、学校としても無理なく取り組まれていることがわかる。

表 4 を見ると、心がけてきた項目としては「1.子どもの気持ちを知らうと努力すること」が全学年を通して 6 割以上であり、最も高かった。また、難しい項目としては「9.学校のみならず、家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること」でこれも全学年を通して 5 割前後で、他の項目を大きく引き離していた。また、「心がけてきた」「難しい」のそれぞれ上位 4 項目のうち、2 位以下の項目を見ると「2.その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること」と「6.問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること」がどちらにも入っており、難しさを抱えつつも教師が生徒一人一人をより理解し、対応しようとしている状況が反映されていると考えられた。また、上位には入っていないが「5.学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保証し、伝えること」では、小学校 5 年生～高校 1 年生までは「心がけてきた」が高いが、高校 2・3 年生と学年が上がると「難しい」が高くなっていた。このような逆転は他の項目には見られないものであった。子どもの発達段階、すなわち学年により居場所の意味は変化してくると思われ、今回の結果からはそれらの変化に合わせた対応が行われていることが伺われた。

表 3・表 4 の、学校で実施されていない項目は、学校のみでは取り組めない内容であることから、難しいと感じていると考えられる。一方で、問題を抱える児童生徒への関わりは、長期的、継続的な対応や、学校や家庭、地域ぐるみの支援が必要とされるため、学校と関係機関との連携や開かれた学校づくりがより重要になってくる。地域において児童生徒が健全に育つ環境（保護因子）を整えていくためには、学校での取り組み難さを関係機関が理解しつつ、学校という場を活かしながら連携や地域とのつながりを作り上げていくことが必要であると考えられる。

3. 調査のまとめ

1) 調査項目の特徴

子ども時代のメンタルヘルスの問題は、一生にわたる“こころの健康”に密接に関連し、この年代への取り組みは将来の自殺予防の上でも重要だと考え、当センターでは若年者の自殺対策の一環として本調査研究等事業に取り組んだ。

思春期の児童生徒の気になる行動や問題行動の背景や要因には、心に悩みや不安、ストレスを抱えている等、「心」の問題が含まれている場合も少なくないことから、思春期の児童生徒の“こころの健康”と問題行動に関する現状を把握するための調査を実施した。

本調査の特徴は、自殺に関連した行動や心理状態に密接に関連すると言われている“攻撃性”に着目し、思春期の若者が示す攻撃的な行動や反社会的な行動に関する調査項目を設定したことにある。様々なリスク因子により、“こころの健康”が阻害された時に、児童生徒が示す行動の傾向について知ることで、今後の支援に役立つと考えた。さらに、今回、学校の対応状況について併せて調査したが、保護因子的な関わりが支援をしていく上で重要な役割を示すと考え、リスクを和らげる保護因子的な関わりを調査項目に設定した。

2) 調査結果から見てきた児童生徒の問題行動の特徴とその対応

(1) 心に負担がかかった時に表す行動（表1）と心の状態の危険度が増した時に表す行動（表2）の関係性

今回の調査では、心の負担の程度により心に負担がかかった時に表す行動（表1）・心の状態の危険度が増した時に表す行動（表2）の2つのカテゴリーで問題行動を想定した。心に負担がかかった時に表す行動（表1）は学校生活でのより身近な観察の中で、把握されやすいレベルの変化や行動であり、心の状態の危険度が増した時に表す行動（表2）はより心の負担が強まった状態であるため、行動の変化の程度が大きく、通常よりもより逸脱した行動レベルになっている。そのため、心に負担がかかった時に表す行動（表1）の方が該当する児童生徒が多くなっている。これらの結果から、今回の調査では時系列的には比較できないが、心に負担がかかった時に表す行動（表1）を示す児童生徒の多くが心の状態の危険度が増した時に表す行動（表2）に移行するわけではないことが推測でき、多くは、その発達過程の中で攻撃性や問題行動が収まってくると考えられる。しかし、その中の一部が学年が上がるにつれ、学校生活からの逸脱傾向、夜遊びやけんか、飲酒や喫煙、授業をさぼるなどのいわゆる非行行為や自傷行為など攻撃性の高い行動に移行すると考えられた。

(2) 性別による違い

心に負担がかかった時に表す行動（表1）・心の状態の危険度が増した時に表す行動（表2）共に、男女では行動の表し方に違いがあるということがわかった。心に負担がかかった時に表す行動（表1）では男子は「落ち着きがない」「集中力がない」、女子は「頭痛、腹痛の身体症状をよく訴える」「保健室を頻繁に利用する」が多く見られた。準備状態にある心の状態にリスクが加わった初期の段階や攻撃的な行動に

至る前段階の男子は、集団行動や学習の場面で把握されやすい変化として表れ、女子は身体症状を訴え比較的周囲の目を引きやすい行動として表れる。

心の状態の危険度が増した時に表す行動（表 2）では、男子は他者や周囲に向かう攻撃的な行動、女子は自身に向かう攻撃的な行動や周囲への SOS の表明というように、攻撃性の表し方、向け方に違いがあった。男子の攻撃性は他者に向かい易く、いろいろな形での暴力行為となって表れるのに対し、女子は自己に向けられることが多い。小野は「女子の攻撃性の特徴は、攻撃性の方向性にもみることができる。攻撃性は他者に向けられることが一般的であるが、それが自己に向けられると自傷行為や自殺関連行動となる。」（文献 1）と述べているが、今回の調査の結果もそれを表している。女子の場合はその行動が精神的な不安定さや自殺行動の危険性を表していると認識しやすいが、男子は非行や反社会的な行動という形で表れることも多いため、心の問題との関連が認識されにくい面もある。

以上のように、今回の調査の結果から、男女で心に負担や問題を抱えた時に取る行動の違いがあることが分かった。男子は、心に負担がかかった時に表す行動（表 1）・心の状態の危険度が増した時に表す行動（表 2）共に該当数が多く、一見心の健康問題と結びつきにくい行動であった。一方、女子は該当数は少ないものの、その行動の内容は比較的心の健康問題と結びつきやすい行動だった。このような男女の違いを理解していくことにより、児童生徒一人一人の行動の意味するところの理解を深めていけると思われる。

（3）学年による違い

今回の結果では、クラスにおいて「気になる」「問題だ」と感じられる児童生徒の割合は、各学年を通して 10%前後と大きな差は見られなかった。一方で、心に負担がかかった時に表す行動（表 1）・心の状態の危険度が増した時に表す行動（表 2）に該当するとされる児童生徒の延人数は、中学校で学年が上がる毎に増加し、高校になると大幅に低下するという傾向が共通していた。各学年の調査回答クラスの児童生徒数がそれぞれ異なるため、心に負担がかかった時に表す行動（表 1）・心の状態の危険度が増した時に表す行動（表 2）共に該当児童生徒数による学年の比較はできないが、傾向として、中学生では心に負担や問題を抱えた際に児童生徒が示すリスク行動が多くなり、高校生になると少なくなることが伺われた。

その背景の一つには、高校という新しい環境に身を置くことにより、気持ちの切り替えができる為ではないかと思われる。また、中学校から高校は受験という制度上情報の伝達が少なくなる為、新入である高校 1 年生では担任教師が把握しきれていない可能性もあると思われる。先の考察にもあるように、行動の表し方には年代による特徴もあるため、支援については心身の発達をよく踏まえることが大切である。また、中学校から高校への移行時に、必要な情報を伝達できる連携体制が必要であり、さらに、学校のみならず、家庭や地域のそれぞれの立場から変化を把握していくことが必要となる。

3) 支援を必要とする児童生徒の考え方及びアプローチ方法

今回の調査では、調査回答クラスの担任教師の 82.0%が、行動や心の問題で「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒がいると回答し、実際に該当する児童生徒の割合は 8.8%であった。

心に負担がかかった時に表す行動(表 1)は比較的児童生徒によく見られる行動であり、これに該当する児童生徒が全て心に負担を抱えているとは言えない。例えば、男子に多く見られる「落ち着きがない」「集中力がない」は、その児童生徒の気質に関連した行動との識別が難しい。また、女子に多く見られる「頭痛、腹痛の身体症状を良く訴える」「保健室を頻繁に利用する」は、身体の具合が悪いのか、心の問題なのか識別が難しい場合もある。

心の状態の危険度が増した時に表す行動(表 2)についても、全てが心に問題を抱えた児童生徒とは限らない。その子の気質や環境といった要因や表現の仕方も様々であり、時にはわかりにくい場合もある。しかし、思春期の“こころの健康”を考える時には、心配ないと片付けてしまうより、危険なサインとして慎重に捉えておく方が、安全の確保につながると考えられる。

いずれにしても、その表面的な行動だけに囚われるのではなく、それをきっかけにして、心に悩みや不安、ストレスを抱えていないか、その行動が「心」の問題のサインになっていないか等、その行動の意味するところは何かを理解しようと働きかけることが支援の第一歩となると考えられる。

4) 保護因子的関わり

(1) 学校の機能を活かした取り組みと連携

調査では、気になる子や問題のある子への対応(表 3)・実際の対応の中で心がけてきたこと難しいと感じること(表 4)の中で学校での保護因子的関わりを挙げ、実施状況と実施の困難度を把握した。その結果、教師が心がけてきた関わり、実施されている関わりには、登校の保障、子どもの気持ちの受容、児童生徒や保護者との関係性の継続といった、学校が本来担っている役割の中で実行しやすく、学校主体あるいは単独で取り組める内容が多かった。教師が日々行っているこれらの児童生徒への関わりや学校機能そのものが、児童生徒の心の危険状態や攻撃性を和らげる保護因子と考えられ、改めて学校での関わりの重要性を認識していくことが必要である。

今後、保護因子的関わりの充実を考えていく場合には、支援者が学校の機能を上手に活かして取り組むことが効果的である。つまり学校の強みである「児童生徒が毎日通う場であること」「いつも子ども達に接している教師、養護教諭、スクールカウンセラー等のマンパワーの存在」「学級という既存の集団」等を活かした関わりを考えていくことである。しかし、現在新たな保護因子的関わりを学校に求めていくことは、負担感の増大につながりかねない。その際には、学校という機能を活かしながら、そこに他機関や様々な職種の人が入り共に関わっていくことで、学校機能をサポートしていくことが重要である。

また、教師は「出身校や他機関、家庭や地域等といった他との連携」に難しさを感じていた。子ども達の問題行動の背景には、家族や社会的な問題がある場合もあり、子ど

も達のライフステージが上がる時には情報を次の場へ確実につなげていく体制や、地域で支援していくための情報共有の場も必要である。このように、学校と他機関が連携した支援体制づくりは今後の大きな課題であると思われる。

(2) 保護因子としての「学校」の存在

「学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保障し伝えること」(表4)の項目では、小学校5年生～高校1年生までは「心がけてきた」と回答する教師が多かったが、高校2・3年生は「難しい」と回答する教師の方が多く逆転した。学年が上がるにつれ難しく感じる要因として、児童生徒の年齢によって「居場所」の捉え方が変わってくるのが考えられる。「居場所」とは、学校という「場」そのものを指すこともあれば、教師や仲間といった「人」の存在を指すこともある。低学年では学校という場そのものが居場所となりやすいが、学年が上がるにつれて人の存在が心の拠り所となりやすいと思われる。大人に近づきつつある子ども達が、学校以外の場に居場所を求め外に向かって行動していく時に、改めて学校が居場所であると伝えていくことに難しさを感じることは、自然なこととも思われる。

しかし、思春期から大人へと移行し、社会に出て行く過渡期にある子ども達にとって、自分を受け止めてくれる場所があると実感した経験こそが、今後社会生活を送る上で大きな心の支えになると思われる。生活の中で人や組織とつながっているという感覚は、様々なリスク行動に対する保護因子であり、良好な精神的健康を獲得することに大きく関連している。学校は家庭以外で一番長く過ごす場、社会に出たときの心の拠り所となる場として、その存在は大きい。だからこそ「居場所」「心の拠り所」である学校へのつながりが途切れないようにしていくことがとても大事なことなのである。

小野は「攻撃性のリスク因子には低学力や素行不良が含まれ、学校への不適応は全般的に攻撃性のリスクを高くする要因である」と述べており、保護因子として「学校への登校、学校生活への参加」を挙げている(文献1)。子ども達自身が学校を居場所として感じられることは、登校の保障、学習の保障の土台ともなり、そのために子ども達の気持ちを知ろうと耳を傾け、子ども達が大人からケアされている(気にかけてくれる)という感覚、受容され見守られている感覚を持てるような関わりをしていくことが大切だと考える。

《文献》

1. 小野善郎：児童・青年の攻撃性・反社会的行動の発達の側面. 齋藤万比古、小野善郎、本間博彰（編集）子どもの攻撃性と破壊的行動障害. 中山出版 2009
2. 高橋 祥友 編著 青少年のための自殺予防マニュアル 金剛出版 2008
3. 橋本 治 著 いじめと自殺の予防教育 明治図書 1998
4. ハーバート・ヘディン 高橋祥友 訳 アメリカの自殺 明石書店 2006
5. 本橋 豊 編 心といのちの処方箋 秋田魁新報社 2005
6. 大石由紀子 編著 青年期の危機とケア 第8章自殺の予防と対応 ふくろう出版 2009

第3章 思春期の若者に対する支援についての提言

～思春期の若者に対する支援についての基本的な考え方～

和歌山県精神保健福祉センター所長 小野善郎（児童精神科医）

1. 子どものリスク行動に着目する意義

子どもの精神保健上の問題は言語的に表現されるというよりも、情緒あるいは行動の問題として表現されることが多く、それらの問題は子どものこころの危機に気づき、必要な支援や指導をするためには重要な役割を持っている。しかし、これらの情緒・行動上の問題の多くは、一般的に「問題行動」と認識されることが多く、子どもの支援ニーズとしてうまく受け止められないことも少なくない。今回の調査研究で取り上げた気になる行動の中にも、ともすれば子どものやる気のなさや無責任さで片付けられてしまいかねないものも多く含まれている。

たしかに、これらの「気になる行動」は、特定の精神疾患や自殺の危険性などと必ずしも直接的な関連が証明されているわけではなく、これらの行動だけでその後のリスクを予測できるものではない。それでも、こころにさまざまな負担を抱えている子どもたちが、何らかの支援を求めているサインとしては非常に重要な意味があり、これらの行動をきっかけに子どもの支援ニーズを知ることは、家庭や学校での不適応を予防し、心身の健全な発達・成長を保障するためには非常に重要である。したがって、子どものリスク行動に着目することは、子どもの精神保健活動のスタートラインとしての意義があるのである。

2. 精神保健の視点からの「リスク行動」の再定義

今回の調査研究で取り上げたリスク行動は、精神保健の問題として対応すべきものが多く含まれている。特に、表1に含まれる行動等については、抑うつや不安などの精神病理に関連したものが多く、周囲の大人たちからもこころの問題としてケアが必要と感じられることも多いだろう。このような問題については、従来から児童生徒の精神保健の対象として養護教諭やスクールカウンセラー等が対応している。

一方、表2で取り上げた行動は外向性の問題行動が中心で、伝統的には精神保健の問題というよりも生徒指導の対象となる行動として受け止められ対応されてきたものが多い。たとえば、喫煙や飲酒は学校では指導や何らかの懲戒処分の対象になることもある。しかし、これらの行動も精神保健の視点からはこころの危機を反映した情緒障害と理解することができ、何らかのケアの対象となりうるものである。

このように、どちらかといえば日本の子どもの精神保健は主として内向性の問題行動を取り扱う傾向があり、外向性の問題は生徒指導上の問題として対応されることが多い。しかし、内向性の問題も外向性の問題も、どちらも子どもの情緒・行動上の問題であり、子どもの精神保健の対象である。精神保健の扱う範囲が広いアメリカでは、激しい情緒的混乱や攻撃性を示す子どもたちへの対応も精神保健が担っており、このような子どもたちは「重度情緒障害（Serious Emotional Disorder [SED]）」と認定され、集中的な精神保健サ

一ビスの対象となるとともに、特別支援教育などの教育的支援の対象にもなっている。

子ども・若者の精神保健では、表 2 に含まれるようなリスク行動もこころのリスク行動として再定義して取り組んでいくことが重要である。

3. 生徒指導と学校保健の連携

より攻撃的で反社会的な要素も含まれる外向性の問題行動が、子どもたちのこころの健康に深く関連しているとすれば、これらの行動に対する学校内での対応は、従来からの生徒指導だけでなく精神保健を含む学校保健の視点からの対応も重要となり、両者の緊密な連携が求められることになる。

社会や学校のルールから逸脱する行動については、時には厳しい態度で指導に臨むことが必要になり、内向性の問題のケアのように受容的・支持的な関わりだけでは対応ができないことも多い。したがって、従来からの生徒指導の活動は学校教育においてはこれからも必要であり、外向的な問題をすべて学校保健で対処することを求めるのは現実的とはいえないだろう。

大切なことは、内向性の問題も外向性の問題もいずれも精神保健上の問題であることを関係者が共有することである。つまり、生徒の逸脱行動はその行動に対して指導を行い、その結果としてその行動が止まりさえすれば良いのではなく、一定の指導とともにその行動の背景にある生徒のこころの問題にアプローチするきっかけとなることが重要なのである。したがって、外向的な問題への対応は生徒指導が入り口になることが一般的であっても、同時に何らかのこころのリスク状態にある生徒として、そこから精神保健につながるようにする連携が求められるのである。

精神保健のサイドからも生徒指導との連携は重要である。精神保健の支援は、基本的には生徒自身が相談することから始まるのが基本となる。その他にも担任や親の心配から支援が始まることもあるが、いずれにしても本人や周囲の大人が何らかの問題に気づいて支援を求めなければ始まらない。このことは、本人や周囲の大人たちの問題に対する受け止め方によって支援を求めるか求めないかが決まることを意味しており、支援を必要とする問題を抱えていても、必ずしもすべての子どもに支援の手が届くとは限らないという限界がある。少しでも精神保健のケアが必要な子どもたちと関わるようにするためには、支援のきっかけをできる限り広くすることが必要である。その意味において、生徒指導との連携は、支援の入り口を広める効果が期待される。

4. 学校をベースとした精神保健活動の重要性

今回の調査研究の結果に基づくまでもなく、思春期はさまざまな情緒・行動上の問題が非常に多いので、児童生徒の精神保健活動は特に重要であることは既に広く知られている。小中学校においては、学校保健活動の中で精神保健も取り扱われてきており、近年においては学校保健活動の内容は精神保健に関するものを中心になってきている。特に、不登校児童生徒の増加の結果として多くの小中学校にスクールカウンセラーが配置されるなど、外部からの専門職も加わって学校精神保健活動はより強化されてきている。

その一方で、児童生徒の精神保健活動は学校内の支援だけで対応されるものとは限らず、必要に応じて地域の医療機関や相談機関も活用しながら、個別の児童生徒のニーズに合わせた支援が行われることもある。発達障害や精神疾患の診断が付けられるような事例が増えてきた昨今では、学校から地域の精神科医や相談機関に児童生徒を紹介することも増えており、地域資源を活用したより広範な子どもの精神保健が展開される傾向にある。

しかし、多様で複雑な思春期の精神保健上の問題に対して、外部の専門機関との協力を強化することも重要ではあるが、外部の専門家の協力も得ながら、学校をベースとした精神保健活動を強化することもひとつの有望な選択肢である。学校精神保健が地域の子どもの精神保健を担うことは現状ではあまり一般的とはいえないが、学校には精神保健活動の「場」としてのいくつかの優位性がある。

1) 気づきの場

言うまでもなく、学校は子どもたちが日中の大半の時間を過ごす場であり、また、友だちや教職員との人間関係や社会的枠組みの中での生活を体験する場でもあり、ここではさまざまな情緒・行動上の問題が顕在化する可能性がある。もちろん、家庭も子どもの精神保健上の問題に気づく重要な場であることは間違いないが、学年が上がるにつれて学校で過ごす時間は長くなることや、学習や対人関係の問題が直接観察できることから、学校は子どもたちの問題に気づく重要な場としての意味を持っている。今回の調査研究においても、多くの担任が児童生徒のリスク行動に気づいていることが明らかになったように、学校における教職員の子どもの観察は精神保健活動の入り口として重要である。

2) ケアの間

何らかの精神保健の問題に対して支援を行う場合、学校はケアの間としての優位性がある。そのもっとも優位な面はケアへのアクセスである。学校はもともと子どもたちが毎日通ってくる場であり、そこへ行くためのアクセスは確立している。それに対して、外部の専門機関は遠方であったり、交通のアクセスが悪く、保護者が送迎して1日かかりの作業になってしまうこともしばしばある。その場合、保護者が仕事を休まなければならないので、経済的な問題も絡み、必要な支援に対する障壁となることも多い。必要な支援を確実に提供するためには、子どもと家族にとってもっともアクセスが良い場を活用することは重要であり、学校はその意味においても有望な場といえる。

3) 予防の間

情緒・行動上の問題が顕在化していない児童生徒についても、潜在的なリスクを持っていることは少なくない。それらの児童生徒には予防的な精神保健活動が必要であり、やはり子どもたちが毎日通ってくる学校は予防の間としての可能性を持っている。さらに、学校生活への適応を促すことは、リスク行動に対する保護因子を高めることや、児童生徒のリジリエンスを向上する可能性がある。活動での成功体験や友だち・教職員・学校とのつながりなど、リジリエンスを向上させる重要な要素は学校の中にたくさんあり、それらは予防的な精神保健活動と密接な関連がある。

5. 思春期の若者支援の方法論の課題

学校をベースとした思春期の若者に対する支援を展開していくうえで、今回の調査研究からいくつかの課題が明らかになった。これらの課題を踏まえて、具体的な支援策が検討されていくことが望まれる。

1) 学校・学年の特異性

学校での児童生徒への支援では、学年ごとに発達段階の違いがあり、そのためそれぞれの学年の特徴を踏まえた支援を計画する必要がある。今回の調査研究においても、担任から見た気になる行動や問題行動は、中学3年生と高校2年生で頻度が高い傾向が認められ、これらの学年での精神保健活動の重要性が示唆された。これらの学年でのリスク行動の増加は、思春期の発達との関連だけでなく、高校進学を中心とした教育制度との関連もあるものと思われるので、特に高校教育のあり方も含めた検討も必要になるであろう。

また、予防的な観点からは、リスク行動が顕在化する前の段階での支援が重要となる。すなわち、中学2年生と高校1年生への予防的な取り組みによってリスク行動を軽減する可能性があるので、学年に応じた精神保健活動の展開が重要となる。

2) 家庭と学校、学校間の連続性

思春期の若者への支援は学校だけでなく、家庭や地域における支援も含まなければならない。本来、学校での支援は家庭や地域をも含めたものであり、これまでも不登校児童生徒の支援においては、担任が積極的に家庭訪問をしたり、学校外の適応指導教室との連携も行われてきている。若者の精神保健活動では、家庭との連携はきわめて重要であり、一体的にケアを展開する仕組みを作る必要がある。そのためには、たとえば近年注目されてきているスクールソーシャルワーカーを活用したソーシャルワークなどが期待される。

また、中学校から高校への移行に際しても課題がある。今回の調査研究の結果から、高校1年生でのリスク行動への気づきの低下は、中学校から高校への情報の伝達が不十分である可能性が示唆されており、高校進学によって支援が途切れることがないようにするためには、進学先への情報提供が不可欠である。現行の入学試験制度では、精神保健上のリスクはどうしても生徒の「不利な」情報として正確に伝達されないことも多い。高校進学によって支援が途切れない情報伝達の仕組みを確立することも急務である。

3) 児童生徒の情報の共有

子どもの精神保健活動は、すでに乳幼児健康診査から始まっており、発達の経過が定期的にチェックされる仕組みになっているが、多くの場合、小学校就学とともに学校保健の制度に移行し、それまでの発達経過の情報が有効に活用されないこともある。また、就学後においても、小学校から中学校、そして高校への移行に際して、情報や支援の連続性が損なわれる可能性がある。さらには、学校間だけでなく、学校と地域の支援機関

との間においても情報共有の課題があり、効果的な支援計画の障壁となっていることも多い。子どもが生まれて育つプロセスの中で、必要に応じた適切な支援が途切れなく受けられるようにするために、一人ひとりの情報が活用できる支援システムの構築が必要である。多様なニーズに対応するためには、ケースマネジメントの方法論が有効であり、障害者や高齢者の支援に活用されてきている。学齢期の子どもたちの多様なニーズに対して途切れのない支援を実施していくためには、学校を中心としたケースマネジメントの手法が期待される。

4) 保護因子・レジリエンスの重要性

予防的な精神保健活動では、リスク因子だけでなく、保護因子やレジリエンスの強化が特に重要であり、「居場所」や「つながり」といった保護因子的な要素について、すべての教職員が理解を共有し、取り組んでいくことが求められる。しかし、今回の調査研究では、「学校は帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保障し、伝えること」が、高校2年生から3年生の担任では「難しい」と感じるが多くなることが明らかにされ、特に高校における保護因子的な関わりに課題があることが示唆された。その背景には、高校教育は義務教育ではなく、本人の希望や意志に基づいて受けることができる付加的な教育という伝統的な考え方が影響している可能性がある。それは「来たくなければ来なくても良い」という認識につながりやすく、居場所として保障する動機を損なうかもしれない。しかし、今日においては、高校教育は決して付加的な教育ではなく、むしろ社会に入るための事実上の最低条件になっており、困難を抱えた生徒が高校教育に止まることができるような努力は、保護因子を強化する精神保健活動の観点からも教育現場で積極的に取り組まれていく必要がある。

6. 今後の若者支援のあり方

子どもの健全な発達・成長は家庭だけの責任ではなく、地域社会のさまざまな支援を活用することで社会全体として担っていくべきものである。特に、就学後の子どもたちにとっては、学校は単に教育の場というだけでなく、心身の健全な育成にも大きな役割を果たしてきている。したがって、子ども・若者の支援は、家庭・地域・学校がそれぞれの役割を持ちながら連携・協力することがもっとも基本的な構造となる。

思春期の若者の精神保健は、現時点で顕在化している問題への対応だけでなく、一人ひとりの発達経過を踏まえた理解と、今後の成人期への影響を視野に入れる縦断的な視点が重要である。つまり、思春期に顕在化するリスク行動には、それまでの育ちの中でのリスク因子が反映されたものが多いので、支援を組み立てる際には子どもの生育歴を踏まえて現在の問題を理解する必要がある。それを踏まえてリスク因子を軽減し、保護因子を強化することは合理的な支援計画の立案に役立つだけでなく、将来に向けたリスクを軽減することにもつながり、成人期以降の精神保健の問題の予防にも寄与することが期待できる。

思春期は確かに「問題の多い時期」かもしれないが、一方で、それまでの育ちにおけるリスク因子に気づくチャンスでもあり、その後の適応を改善し健康な大人になるための支援を行うことができる貴重な時期でもある。子どもに関わるすべての人々が、このような

認識を共有して思春期の若者たちの問題に取り組んでいくことが望まれる。

思春期には精神医学的な「診断」が付けられるような情緒・行動上の問題がしばしば認められることも事実であり、精神科医の診察や専門的な治療を要する場合もあり、実際に精神科や心療内科で継続的な治療を受けている子どもたちも多くなってきている。しかし、思春期の精神保健活動は、単に精神医学的な問題を予防し、治療するだけのものではなく、最終的には健康で適応的な大人への移行を目指す支援でなければならない。その意味においては、何らかの「診断」が付くような状態を示す若者だけでなく、すべての若者を対象とする広範な活動として発展・整備されていく必要がある。

現代日本社会において、大人になることはますます複雑かつ多様化し、大人への移行期、すなわち思春期は長期化していることが指摘されている。高校進学率が98%に達し事実上の高校全入時代になり、ほとんどの若者たちはこの不安定な移行期を学校の中で過ごすことが一般的になってきた。高校に入学してくる生徒の中には、それまでの生育歴の中で多くのリスク因子を抱えている者も少なくなく、個別的な支援を必要とする場合も多い。高校の3年間は社会に出るための基盤を作る重要な時期でもあり、成人へ向けた移行支援の場としての重要性もあることから、高校における精神保健活動は、単なる学校精神保健活動にとどまらず、地域の若者の精神保健と大人への移行の中核的な支援活動として再定義されていく必要があるだろう。そのためにも、学校をベースとした精神保健活動の構築は今後の若者支援のもっとも重要な方向性であり課題であると考えられる。

終わりに

本調査は、若年者の自殺行動のリスク因子、リスク行動、保護因子、介入について調査及び分析し実施可能な自殺予防支援策を検討することを目的に取り組んだ。また、調査と共に研究協議会やシンポジウムを開催したねらいは、思春期の若者を取り巻く教育現場や地域の関係者、地域住民が若者の心の状態や心の健康についての理解や関心を深め、子ども達の支えやつながりを共に考えていくことにあった。

心の健康に係る取り組みは、心に問題を抱えた児童生徒への支援だけでなく、全ての児童生徒の健康を高めると共に成人期以降の将来の健康にも寄与するものであり、ライフサイクル全般における自殺予防とも関係が深いと言われている。調査結果からも児童生徒全体を視野に入れた心の健康に関する支援や予防的取り組み等の生徒にも普遍的に必要な関わりと、心の問題を抱えた児童生徒への早期の気づきと支援、すなわち、ポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチが求められることが明らかになった。このような子ども時代の心の健康への取り組みは、大人になってからの心の健康や自殺予防につながることを学校関係者、地域関係者が共通認識を持ち、共に取り組んでいくことが大切である。

本調査を学校の教師対象としたのは、学校は思春期の若者が長く過ごす場であり、さらには心の拠り所として、その存在は大きく重要であると考えたからである。今回の調査が、学校及び地域の支援やつながりについて考える一助となることを期待したい。

最後に、本調査に御協力いただいた各学校の皆様に感謝申し上げたい。

資料編



事業の概要



資料 1

事業実績

年度	事業項目	回数	事業内容
H21	研修会	1	パネルディスカッションとグループワーク テーマ「早期小児期からの自殺行動の予防を考える」 参加者 95名
	研究協議会	1	議題「各現場で抱える子どもの自殺関連問題と予防について」
H22	所内検討	2	事業内容、今後の進め方について確認・検討
	WG	10	① 課題の整理、文献学習、各種調査の確認 等 ② 仮説の検討 ③ サンプル調査の検討（目的、対象、手法、調査項目 等）
	研究協議会	2	《1回目》 ① 将来の自殺関連行動につながるリスク行動について ② 実態把握のためのアンケート調査について 《2回目》 ① 「児童生徒のこころと行動に関する調査」の結果（速報）について
	調査		「児童生徒のこころと行動に関する調査」の実施 (H22.12月～H23.1月末)
	シンポジウム	1	テーマ 「思春期のこころと行動 ～気づき・つながり・育てる～」 シンポジスト 古川緑ヶ丘病院兼大崎市スクールソーシャルワーカー 精神保健福祉士 安藤操里 氏 北海道大学 子ども発達臨床研究センター 学術研究員 川俣智路 氏 和歌山県精神保健福祉センター 所長 小野善郎 氏 参加者 182名
H23	WG	15	調査結果の分析
	研究協議会	2	《1回目》 「児童生徒のこころと行動に関する調査」の結果について 《2回目》 「児童生徒のこころと行動に関する調査」の結果と考察、支援について
	シンポジウム	1	①調査中間報告 ②テーマ 「震災と若者のこころの健康 ～思春期をのりこえるために～」 シンポジスト (独)国立病院機構南和歌山医療センター 主任臨床心理士 厚坊浩史 氏 宮城県石巻高等学校 養護教諭 千葉久美子 氏 児童自立援助ホーム「せんだんの家」 児童指導員 菅原 温 氏 参加者 127名
H24	WG	13	調査結果の分析・報告書の作成

資料 2

若年者の自殺対策に関する調査研究等事業

「研究協議会」開催要領

- 1 目的 自殺は今日の精神保健の重大なテーマであり、国を上げた予防的取り組みが進められている。現在のわが国の自殺者は中高年に多い傾向が認められているが、若年者においては自殺者の実数は少ないものの、疾病による死亡率が低いことから自殺は主要な死因のひとつであり、20歳代においては男女ともに死因の第一位を示している。また、思春期以降には自傷行為や過量服薬などの自殺に関連した行動や「死にたい」という自殺念慮を持つことが非常に多いことも知られている。そのため、自殺予防の取り組みは若年者においても非常に重要である。有効な予防的介入をおこなっていくためには、「子どもの自殺行動」の発達のな特徴や関連する要因について理解を深めることが不可欠となる。そこで、これまで知られている子どもの自殺行動の特徴、リスク因子、および関連する精神医学的問題などを整理し、より早期の段階から自殺行動を予防する取り組みについて検討することを目的に、この領域における専門家と地域の母子保健及び児童福祉関係者及び教育関係者等の協力を得て、研究協議会を開催する。
- 2 開催年 2回
- 3 構成メンバー
 - ① 学識経験者、母子保健関係者、児童福祉関係者、教育関係者等 15名
 - ② 宮城県精神保健福祉センターワーキンググループメンバー 6名

資料 3

若年者の自殺対策に関する調査研究等事業

「研究協議会」構成メンバー

(学識経験者、母子保健関係者、児童福祉関係者、教育関係者等)

NO	区分	氏名	所属	職種	従事年度
1	学識経験者	小野 善郎	宮城県精神保健福祉センター H22~和歌山県精神保健福祉センター	児童 精神科医	H21~23
2	母子保健関係者	峰岸 千枝	松島町子育て支援センター	保健師	H21
3	母子保健関係者	笠松 祐子	栗原市子育て支援課	保健師	H21~23
4	母子保健関係者	日下 朋子	角田市健康推進課	保健師	H21~23
5	母子保健関係者	大宮 美希子	仙台保健福祉事務所 塩釜総合支所	保健師	H21~23
6	母子保健関係者	小野 玲子	仙南保健福祉事務所	保健師	H23
7	保育関係者	上野 律子	登米市子育て支援課	保育士	H21
8	幼児教育	荒井 千鶴子	東二番丁幼稚園	幼稚園教諭	H21
9	児童福祉関係者	大場 ゆかり	東部児童相談所	保健師	H21
10	児童福祉関係者	佐々木 洋子	登米市児童館	保育士	H22~23
11	児童福祉関係者	工藤 淳	北部児童相談所	臨床心理士	H22~23
12	児童福祉関係者	後藤 百合子	中央児童相談所	保健師	H23
13	教育関係者	戸村 たつひ	仙台市立加茂中学校 H23~仙台市立光陽台中学校	養護教諭	H21~23
14	教育関係者	中島 京子	多賀城市立山王小学校 H23~宮城教育大学附属小学校	養護教諭	H21~23
15	教育関係者	横田 文子	岩出山高等学校	養護教諭	H22~23
16	教育関係者	菅井 理恵	県スポーツ健康課	養護教諭	H22~23
17	教育関係者	高橋 賢	高校教育課	指導主事	H22~23
18	保健福祉関係者 及び教育関係者	安藤 操里	古川緑ヶ丘病院兼 大崎市スクールソーシャルワーカー	精神保健 福祉士	H22~23
19	保健福祉関係者	岡崎 茂	仙台市精神保健福祉総合センター	精神保健 福祉士	H22~23
20	保健福祉関係者	阿部 景子	仙台市精神保健福祉総合センター	臨床心理士	H23

資料 4

宮城県若年者自殺対策調査研究等事業一

児童生徒のこころと行動に関する調査要領

1 調査の目的

思春期の子ども達が示す攻撃的な行動や反社会的な行動は、自殺に関連した行動や心理状態に密接に関連すると言われている。このような、行動（問題 [リスク] 行動）について、教育現場での児童生徒の実態はどのようになっているか。また、リスクに拮抗する役割を果たす保護因子について、教育現場では保護因子的関わりがどのように行われているのか。

今回、児童生徒の問題(リスク)行動や学校の対応について把握し、今後、教育現場や地域の中で、子どもたちを支援していくためには何が必要かを検討するため、調査を実施する。

2 実施主体 宮城県精神保健福祉センター

3 調査期間 平成 22 年 12 月～平成 23 年 1 月末

4 実施方法

(1) 対象年齢・学年

10 才～18 才（小学 5～6 年生、中学 1～3 年生、高校 1～3 年生）

(2) 調査対象者 : 各クラスの担任教師

(3) 方 法

① 小学校：県内国公立・私立小学校 162 校（分校除く）から調査

公立（仙台市除く）小学校（157 校を抽出）、私立小学校（4）、

国立小学校（1） 5,6 学年から 1 クラスずつ抽出： $162 \times 2 = 324$

② 中学校：県内国公立・私立中学校 157 校（分校除く）から調査

公立（仙台市除く）中学校（148 校）、私立中学校（8）、国立中学校（1）

1～3 学年から 1 クラスずつ抽出： $157 \times 3 = 471$

③ 高等学校：全日制高校から調査（90 校）

県立高校（69）、私立高校（19）、市立高校（仙台市除く）（2）

1～3 学年から 1 クラスずつ抽出： $90 \times 3 = 270$

(4) 調査票の提出方法

全記入分を同封の返信用封筒に入れ、提出期限（小・中学校は 1 月 17 日、高等学校は 1 月 31 日）までに、宮城県精神保健福祉センターあて送付。

5 調査内容

(1) クラス担任が「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒の数

(2) 想定した問題（リスク）行動がみられる児童生徒の数

(3) 想定した問題（リスク）行動以外に、「気になる」「問題だ」とクラス担任が感じている児童生徒の行動

(4) 想定した保護因子的関わりについての教育現場の現状

(5) 教師の対応、取り組みの状況

資料5 児童生徒のこころと行動に関する調査票

—宮城県若年者自殺対策調査研究等事業—

児童生徒のこころと行動に関する調査

平成22年12月 実施
宮城県精神保健福祉センター

学校区分	<input type="checkbox"/> 小学校	<input type="checkbox"/> 中学校	<input type="checkbox"/> 高等学校
------	------------------------------	------------------------------	-------------------------------

* 以下について該当するところをチェック、またはご記入をお願いします。

学年の概要	<input type="checkbox"/> 小学5年	<input type="checkbox"/> 小学6年	<input type="checkbox"/> 中学1年	<input type="checkbox"/> 中学2年	<input type="checkbox"/> 中学3年	<input type="checkbox"/> 高校1年	<input type="checkbox"/> 高校2年	<input type="checkbox"/> 高校3年
クラス状況	① 人数 () ② 内訳：男 () 女 ()							
記入者状況	① 教師歴 () 年							
調査記入月	H 年 月							

** 記載上の留意点

- ・この調査票は調査時点の状況でご記入ください。
- ・学校や家庭での状況について、あなたの把握する範囲でお答えください。
- ・記入は、あなたの感じたままです。

*** 提出期限は、平成23年1月17日(月)です。よろしくお願いします。

以下の項目について、ご記入ください。

1 あなたが担当しているクラスの中に、行動や心の健康で「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒はいますか。該当する箇所に○をつけ、「a」に該当する場合はその人数を記入してください。

a いる b いない c その他 ()
 └─┬─> 実人数 () 名

2 あなたが担当しているクラスの中に、表1に当てはまる児童生徒はいますか。

a いる b いない c その他 ()

3 2で「a いる」と回答した方、具体的にどの行動等がみられますか。みられる行動等、ひとつの項目について、当てはまる人数を男女別で記入してください。

記載例

	行 動 等	男	女
1	元気がなく、怠そうにしたり、疲れているようにみえる	5	1

記入

表1

(人)

	行 動 等	男	女
1	元気がなく、怠そうにしたり、疲れているようにみえる		
2	悲しそうな顔や暗い表情をしたり、憂うつそうにしている		
3	頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える		
4	過呼吸を起こす		
5	いつも眠そうにしている		
6	急にヤせてきた、逆に急に太ってきた		
7	イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる		
8	落ち着きがない		
9	集中力がない		
10	ぼーっとしていることが増えた		
11	保健室を頻繁に利用する		
12	遅刻や欠席が多い・出席率が悪い		
13	不登校または不登校傾向がある		
14	家に帰りがらない		
15	急に成績が下がった		
16	誰とも話したがらないなど、周りとの関係を持とうとしない		
17	急に友達とのつきあいが減った、クラスメートの中に自分から入っていかない等、孤立している		
18	教育費・給食費の支払い遅れや未払いがあった、必要な文房具が揃えられない、本人から経済的困窮に関する訴えがある等、経済的な問題がある		
19	暴力やネグレクト（不衛生な着衣、食事が与えられない等）等、虐待が疑われる		

4 あなたが担当しているクラスの中に、表2に当てはまる児童生徒はいますか。

a いる b いない c その他 ()

5 4で「a いる」と回答した方、具体的にどの行動等がみられますか。みられる行動等、ひとつの項目について、当てはまる人数を男女別で記入してください。

表2

(人)

	行 動 等	男	女
1	自転車、バイク、自動車等で無謀な運転をしたり、しばしば事故を起こしてしまう		
2	たびたびけんかをする		
3	身の危険を顧みないような行為を繰り返す、または、しばしばケガを負う		
4	家庭内暴力がみられる		
5	他の児童生徒に対して暴力をふるう		
6	教師に対して暴力をふるう		
7	学校内の施設や物を壊したりする		

	行 動 等	男	女
8	性的逸脱行為がある		
9	授業をさぼる		
10	夜遅くまで遊ぶ		
11	触法行為等がある（万引きや自転車を盗む、家のお金を黙って持ち出す 等）		
12	無断外泊や、家に帰らずに遊び歩くことが多い		
13	急に、髪、化粧、服装等が派手になった		
14	喫煙をする		
15	飲酒をする		
16	薬物の乱用がある（シンナー、薬の過量服薬 等）		
17	リストカットをしたことがある		
18	「死にたい」と口にすることがある		

6 「気になる子」や「問題行動のある子」への対応に関して。表3にあげた項目の実施について、該当する所に○を記入してください。

表3

項 目	実施状況	a	b	c	d
		十分に実施していると思う。	実施しているが、やや不十分だと思う。	実施しているが、まだまだ不十分だと思う。	実施していない
1	学校への登校が途切れないように継続的に声がけをしている				
2	面接、家庭訪問等でコミュニケーションをとり児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている				
3	補習授業など学習面での配慮を行っている				
4	出席日数への配慮等を行っている（例えば、出席日数が不足しないための配慮 等）				
5	出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している				
6	校内で話し合いを持ち、生徒への統一した対応方針などを協議・決定している				
7	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、校医等に相談しながら対応している				
8	他機関と連携しながら対応している				

7 「気になる子」や「問題行動のある子」への対応について、あなたが実際の対応の中で特に「心がけてきた」点はどのようなことですか？ また、「難しい」と感じるのはどのようなことですか。表4の項目の中から、該当するものをそれぞれ3つ以内で選び○をつけてください。

表4

	項 目	心がけてきた	難しい
1	子どもの気持ちを知ろうとする努力をすること		
2	その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること		
3	なるべく孤立しないように働きかけること		
4	受容され、見守られている感覚がもてるようにすること		
5	学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保証し、伝えること		
6	問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること		
7	学習面だけでなく、子どもが学校に来やすくなるような配慮や働きかけをすること		
8	成長過程を踏まえた上で、今どのように関わるべきかを意識すること		
9	学校のみならず、家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること		

8 [全ての方へ] 以下についてお考えを記入してください。

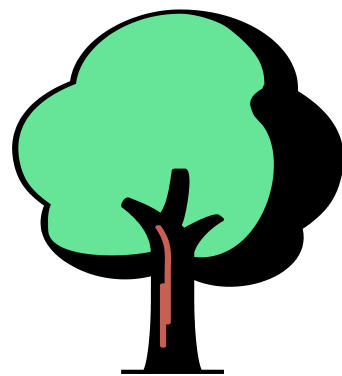
児童生徒の言動や行動について、「気になる」「問題だ」と思われる行動はどんな行動ですか。

また、それに対し、基本的にどのような対応が必要だと思いますか。(自由記載)。

※表1・2に該当者がいない場合、現在担当しているクラスに該当者がいない場合でも、今までの経験から「気になる」「問題だ」と思われる児童生徒の行動についてお答えください。

御協力ありがとうございました

調査の結果



児童生徒のこころと行動に関する調査結果

設問1 あなたが担当しているクラスの中に、行動や心の健康で「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒はいますか。該当する箇所に○をつけ、「a」に該当する場合はその人数を記入してください。

(1) 設問1に回答した担任教師数

(人)

	小5	小6	小 5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
a いる	96 (70.6)	95 (70.4)	0 (0.0)	126 (88.7)	129 (92.1)	118 (85.5)	69 (83.1)	72 (86.7)	72 (86.7)	777
b いない	40 (29.4)	38 (28.1)	7 (87.5)	16 (11.3)	10 (7.1)	20 (14.5)	14 (16.9)	11 (13.3)	10 (12.0)	166
c その他	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (12.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.3)	2
d 未記入	0 (0.0)	2 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3
計	136	135	8	142	140	138	83	83	83	948

()内は%

c その他の内容…

「生活面ではいる」(小5・6 複合クラス)「受験のプレッシャーで疲れている生徒は多い」(高3)

(2) 「気になる」「問題だ」と感じる児童生徒数 (実人数)

(人)

	小5	小6	小 5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
人数	259 (8.0)	265 (8.1)	0 (0.0)	380 (10.0)	409 (9.6)	365 (8.7)	258 (8.5)	296 (10.3)	202 (7.1)	2,434

()内は%

設問2 あなたが担当しているクラスの中に、表1に当てはまる児童生徒はいますか。

表1 項目

	行 動 等
1	元気がなく、怠そうにしたり、疲れているように見える
2	悲しそうな顔や暗い表情をしたり、憂うつそうにしている
3	頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える
4	過呼吸を起こす
5	いつも眠そうにしている
6	急にヤせてきた、逆に急に太ってきた
7	イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる
8	落ち着きがない
9	集中力がない
10	ぼーっとしていることが増えた
11	保健室を頻繁に利用する
12	遅刻や欠席が多い・出席率が悪い
13	不登校または不登校傾向がある
14	家に帰りたがらない
15	急に成績が下がった
16	誰とも話したがるらないなど、周りとの関係を持とうとしない
17	急に友達とのつきあいが減った、クラスメートの中に自分から入っていかない等、孤立している
18	教育費・給食費の支払い遅れや未払いがあった、必要な文房具が揃えられない、本人から経済的困窮に関する訴えがある等、経済的な問題がある
19	暴力やネグレクト（不衛生な着衣、食事が与えられない等）等、虐待が疑われる

表1に「該当あり」と回答した担任教師の割合

(人)

	小5	小6	小 5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
a いる	102 (75.0)	102 (75.6)	3 (37.5)	129 (90.8)	133 (95.0)	125 (90.6)	76 (91.6)	78 (94.0)	76 (91.6)	824
b いない	34 (25.0)	33 (24.4)	5 (62.5)	13 (9.2)	7 (5.0)	13 (9.4)	7 (8.4)	5 (6.0)	7 (8.4)	124
計	136	135	8	142	140	138	83	83	83	948

()内は%

設問3 設問2で「a いる」と回答した方、具体的にどのような行動がみられますか。みられる行動等、ひとつの項目について、当てはまる人数を男女別で記入してください。

(1) 表1に該当する児童生徒延人数

(人)

	小5	小6	小 5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
男	499	423	3	777	740	870	562	584	587	5,045
女	188	200	9	396	538	680	407	515	418	3,351
計	687	623	12	1,173	1,278	1,550	969	1,099	1,005	8,396

(2) 項目別該当数

①全体

	小5		小6		中1		中2		中3		高1		高2		高3	
1	34	1.0%	40	0.8%	59	1.4%	82	1.7%	118	2.4%	81	1.9%	100	3.3%	86	2.4%
2	20	0.6%	19	1.1%	52	1.5%	74	2.3%	84	2.6%	48	1.5%	70	2.7%	48	1.8%
3	51	1.6%	37	1.7%	115	3.2%	122	3.3%	105	2.8%	90	3.1%	108	4.8%	90	3.4%
4	1	0.0%	6	0.3%	7	0.3%	11	0.5%	13	0.6%	5	0.3%	16	0.9%	6	0.4%
5	27	0.8%	42	0.8%	38	0.3%	68	0.8%	108	1.2%	69	1.1%	73	0.9%	85	1.8%
6	1	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	0	0.0%	20	0.4%	3	0.1%	4	0.2%	10	0.4%
7	71	2.2%	56	0.4%	65	0.8%	47	0.7%	70	0.8%	25	0.7%	65	1.9%	51	1.2%
8	155	4.8%	98	0.5%	196	0.9%	162	1.2%	136	1.2%	119	1.5%	109	2.7%	98	2.1%
9	156	4.8%	130	1.3%	239	2.1%	196	2.0%	183	2.1%	157	2.5%	127	2.7%	144	3.2%
10	12	0.4%	11	0.1%	24	0.5%	47	0.8%	62	1.0%	33	0.9%	53	1.7%	36	0.7%
11	10	0.3%	16	0.6%	32	1.1%	70	2.2%	104	3.5%	53	2.7%	71	3.2%	62	2.5%
12	37	1.1%	36	1.0%	98	2.4%	126	2.9%	149	3.6%	113	3.1%	121	2.9%	126	3.6%
13	24	0.7%	30	0.8%	91	2.8%	121	3.1%	132	3.6%	56	2.0%	40	1.4%	42	1.1%
14	9	0.3%	7	0.3%	10	0.2%	5	0.1%	25	0.6%	6	0.2%	9	0.5%	14	0.5%
15	2	0.1%	3	0.1%	27	0.6%	11	0.3%	25	0.5%	17	0.8%	29	1.1%	16	0.3%
16	8	0.2%	20	0.7%	14	0.4%	32	1.0%	44	1.5%	25	1.0%	27	0.7%	25	0.6%
17	16	0.5%	16	0.7%	34	1.0%	44	1.3%	58	1.9%	44	1.7%	25	0.9%	23	0.9%
18	43	1.3%	44	1.3%	57	1.3%	49	1.1%	94	1.9%	23	0.8%	51	1.8%	43	1.6%
19	10	0.3%	12	0.1%	13	0.3%	11	0.2%	20	0.5%	2	0.1%	1	0.1%	0	0.0%

②男子

	小5		小6		中1		中2		中3		高1		高2		高3	
1	24	1.5%	27	1.7%	32	1.7%	46	2.1%	68	3.2%	51	3.5%	50	3.8%	51	3.9%
2	6	0.4%	1	0.1%	24	1.2%	26	1.2%	30	1.4%	25	1.7%	30	2.3%	21	1.6%
3	23	1.4%	10	0.6%	55	2.9%	53	2.5%	47	2.2%	42	2.9%	35	2.6%	40	3.0%
4	1	0.1%	1	0.1%	2	0.1%	0	0.0%	1	0.0%	1	0.1%	2	0.2%	0	0.0%
5	19	1.2%	30	1.9%	32	1.7%	51	2.4%	84	4.0%	52	3.6%	59	4.4%	58	4.4%
6	1	0.1%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	11	0.5%	1	0.1%	1	0.1%	4	0.3%
7	62	3.8%	49	3.0%	50	2.6%	33	1.5%	54	2.6%	14	1.0%	37	2.8%	34	2.6%
8	141	8.6%	90	5.6%	180	9.4%	136	6.3%	111	5.3%	95	6.5%	68	5.1%	68	5.1%
9	135	8.2%	110	6.8%	200	10.4%	154	7.2%	139	6.6%	117	8.0%	87	6.5%	97	7.3%
10	9	0.5%	10	0.6%	15	0.8%	31	1.4%	42	2.0%	19	1.3%	28	2.1%	26	2.0%
11	2	0.1%	7	0.4%	11	0.6%	23	1.1%	31	1.5%	11	0.8%	23	1.7%	25	1.9%
12	20	1.2%	20	1.2%	53	2.8%	65	3.0%	75	3.6%	65	4.5%	78	5.9%	74	5.6%
13	16	1.0%	17	1.1%	39	2.0%	56	2.6%	57	2.7%	24	1.6%	19	1.4%	26	2.0%
14	1	0.1%	3	0.2%	6	0.3%	3	0.1%	12	0.6%	3	0.2%	2	0.2%	6	0.5%
15	1	0.1%	1	0.1%	15	0.8%	4	0.2%	14	0.7%	5	0.3%	13	1.0%	12	0.9%
16	3	0.2%	9	0.6%	6	0.3%	11	0.5%	13	0.6%	10	0.7%	17	1.3%	16	1.2%
17	7	0.4%	5	0.3%	16	0.8%	16	0.7%	18	0.9%	17	1.2%	11	0.8%	10	0.8%
18	22	1.3%	23	1.4%	32	1.7%	25	1.2%	54	2.6%	10	0.7%	24	1.8%	19	1.4%
19	6	0.4%	10	0.6%	8	0.4%	7	0.3%	9	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%

③女子

	小5		小6		中1		中2		中3		高1		高2		高3	
1	10	0.7%	13	0.8%	27	1.4%	36	1.7%	50	2.4%	30	1.9%	50	3.3%	35	2.4%
2	14	0.9%	18	1.1%	28	1.5%	48	2.3%	54	2.6%	23	1.5%	40	2.7%	27	1.8%
3	28	1.8%	27	1.7%	60	3.2%	69	3.3%	58	2.8%	48	3.1%	73	4.8%	50	3.4%
4	0	0.0%	5	0.3%	5	0.3%	11	0.5%	12	0.6%	4	0.3%	14	0.9%	6	0.4%
5	8	0.5%	12	0.8%	6	0.3%	17	0.8%	24	1.2%	17	1.1%	14	0.9%	27	1.8%
6	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	9	0.4%	2	0.1%	3	0.2%	6	0.4%
7	9	0.6%	7	0.4%	15	0.8%	14	0.7%	16	0.8%	11	0.7%	28	1.9%	17	1.2%
8	14	0.9%	8	0.5%	16	0.9%	26	1.2%	25	1.2%	24	1.5%	41	2.7%	30	2.1%
9	21	1.4%	20	1.3%	39	2.1%	42	2.0%	44	2.1%	40	2.5%	40	2.7%	47	3.2%
10	3	0.2%	1	0.1%	9	0.5%	16	0.8%	20	1.0%	14	0.9%	25	1.7%	10	0.7%
11	8	0.5%	9	0.6%	21	1.1%	47	2.2%	73	3.5%	42	2.7%	48	3.2%	37	2.5%
12	17	1.1%	16	1.0%	45	2.4%	61	2.9%	74	3.6%	48	3.1%	43	2.9%	52	3.6%
13	8	0.5%	13	0.8%	52	2.8%	65	3.1%	75	3.6%	32	2.0%	21	1.4%	16	1.1%
14	8	0.5%	4	0.3%	4	0.2%	2	0.1%	13	0.6%	3	0.2%	7	0.5%	8	0.5%
15	1	0.1%	2	0.1%	12	0.6%	7	0.3%	11	0.5%	12	0.8%	16	1.1%	4	0.3%
16	5	0.3%	11	0.7%	8	0.4%	21	1.0%	31	1.5%	15	1.0%	10	0.7%	9	0.6%
17	9	0.6%	11	0.7%	18	1.0%	28	1.3%	40	1.9%	27	1.7%	14	0.9%	13	0.9%
18	21	1.4%	21	1.3%	25	1.3%	24	1.1%	40	1.9%	13	0.8%	27	1.8%	24	1.6%
19	4	0.3%	2	0.1%	5	0.3%	4	0.2%	11	0.5%	2	0.1%	1	0.1%	0	0.0%

(3) 項目別

表1-1 元気がなく、怠そうにしたり、疲れているように見える

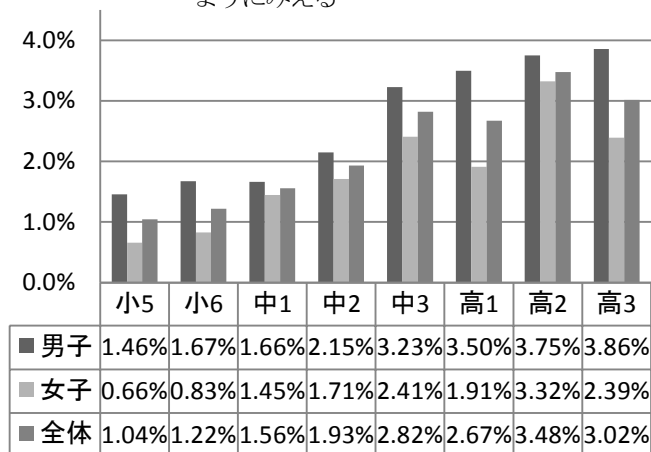


表1-2 悲しそうな顔や暗い表情をしたり、憂うつそうにしている

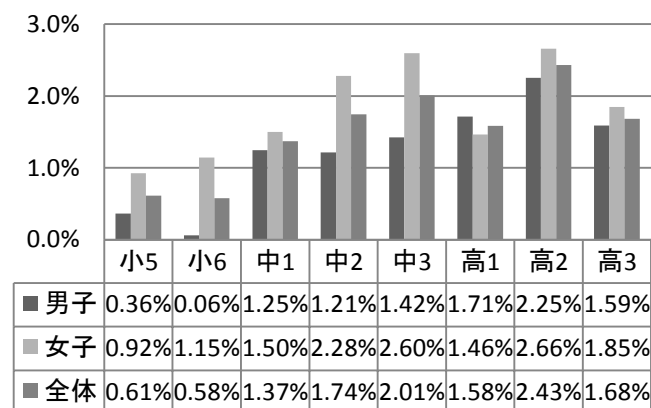


表1-3 頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える

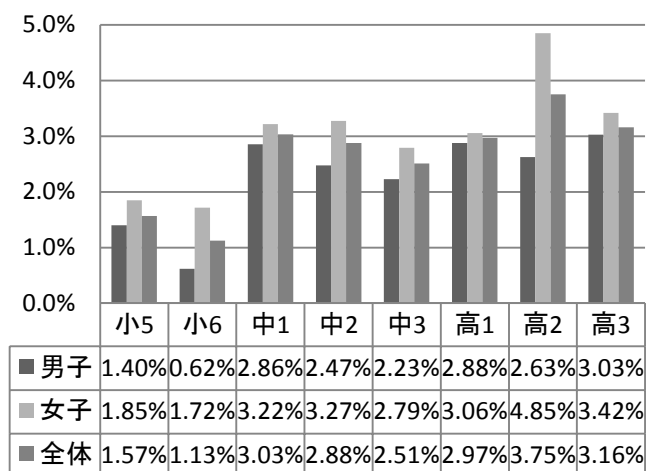


表1-4 過呼吸を起こす

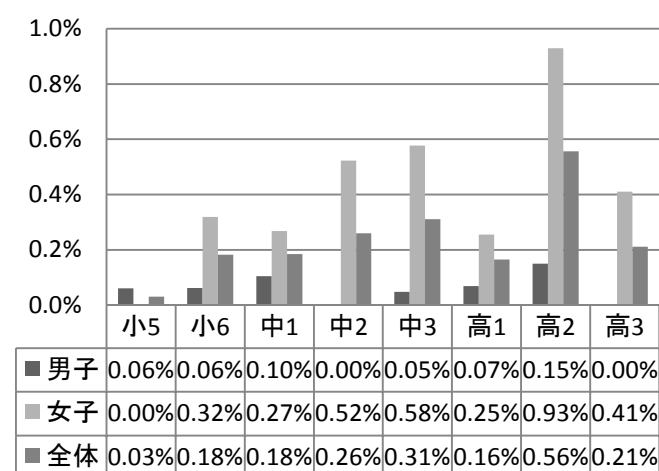


表1-5 いつも眠そうにしている

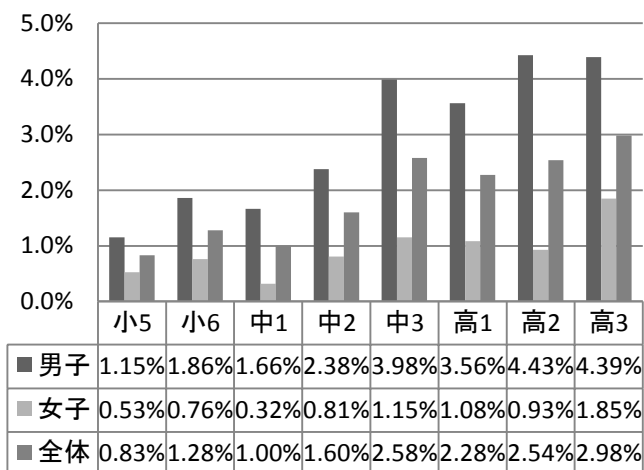


表1-6 急にヤせてきた、逆に急に太ってきた

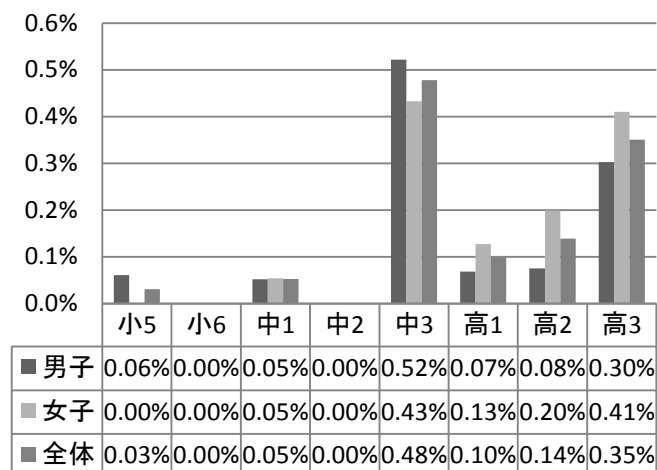


表1-7 イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる

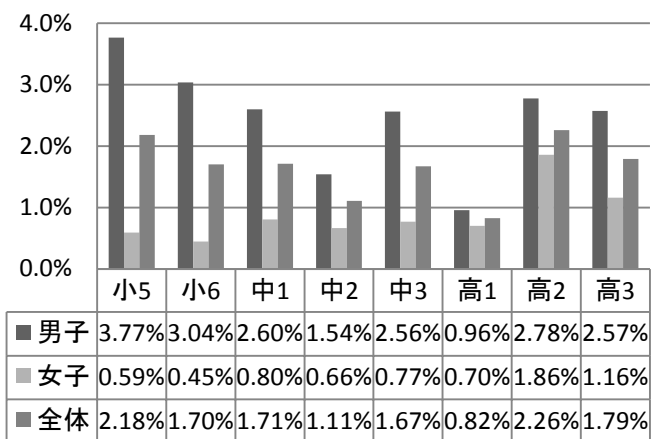


表1-8 落ち着きがない

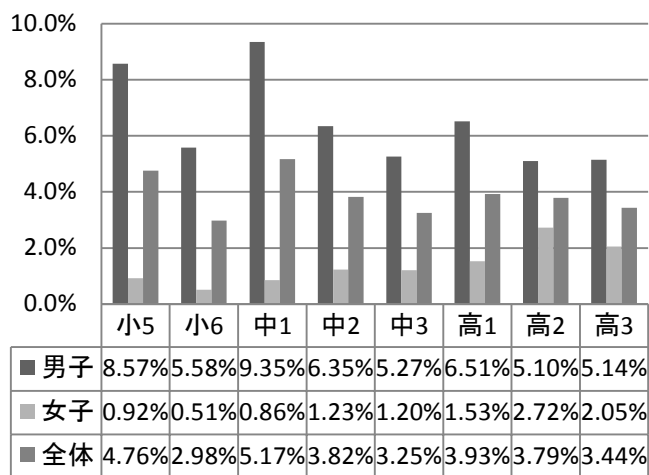


表1-9 集中力が低い

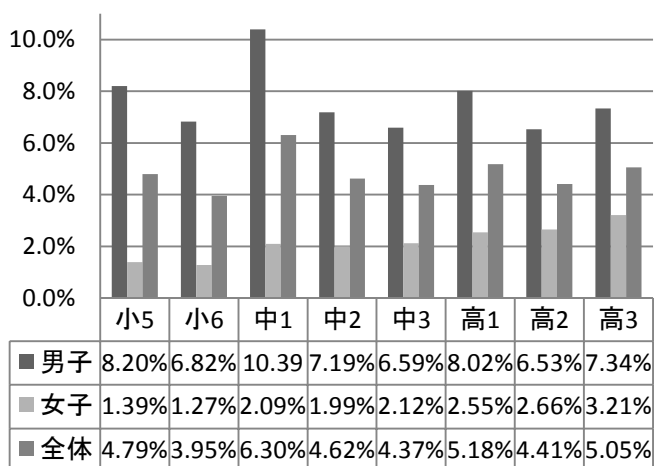


表1-10 ぼーっとしていることが増えた

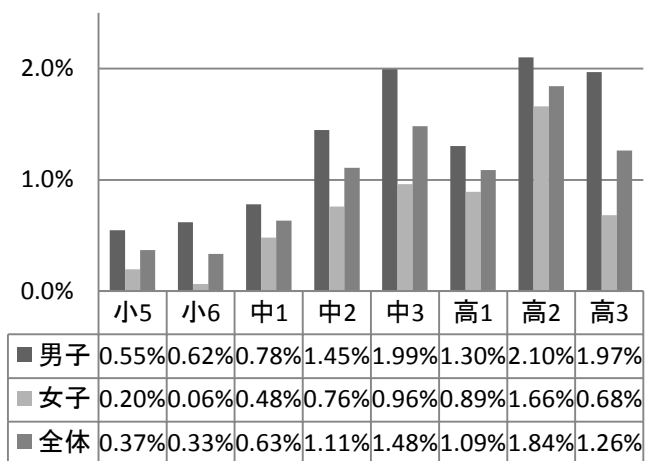


表1-11 保健室を頻繁に利用する

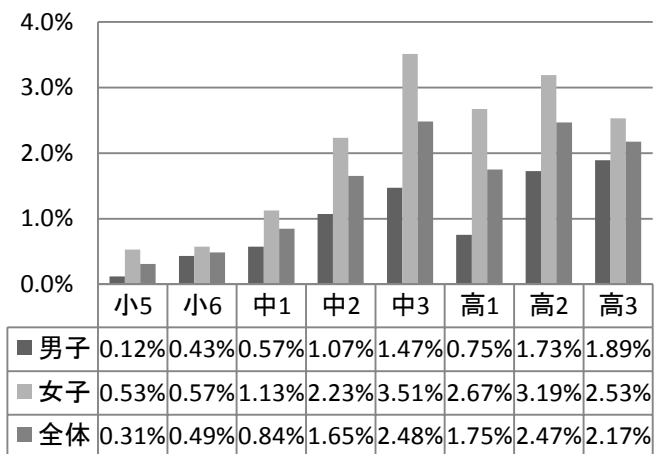


表1-12 遅刻や欠席が多い・出席率が悪い

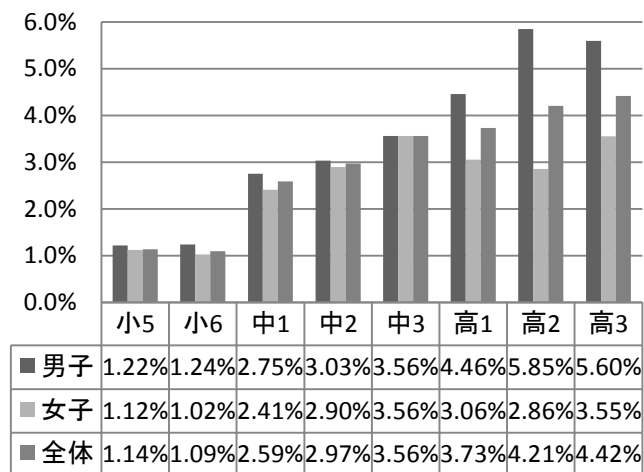


表1-13 不登校または不登校傾向がある

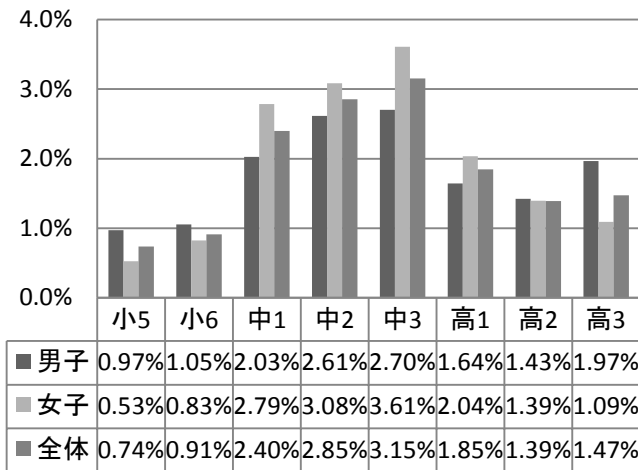


表1-14 家に帰りたがらない

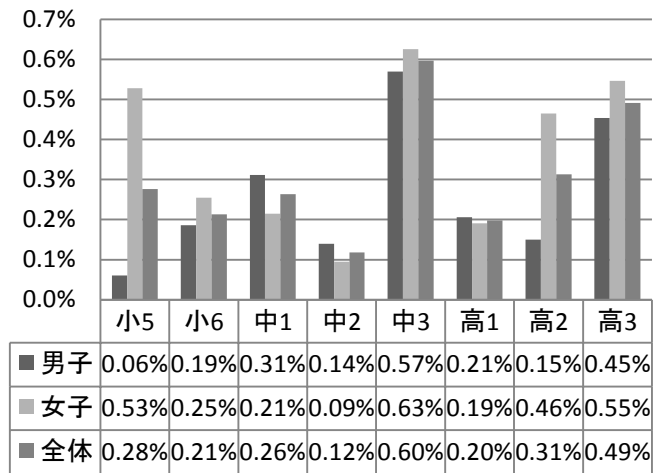


表1-15 急に成績が下がった

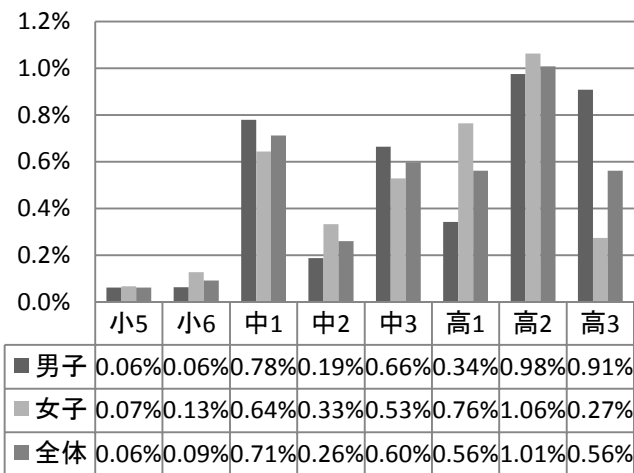


表1-16 誰とも話したがらないなど、周りとの関係を持とうとしない

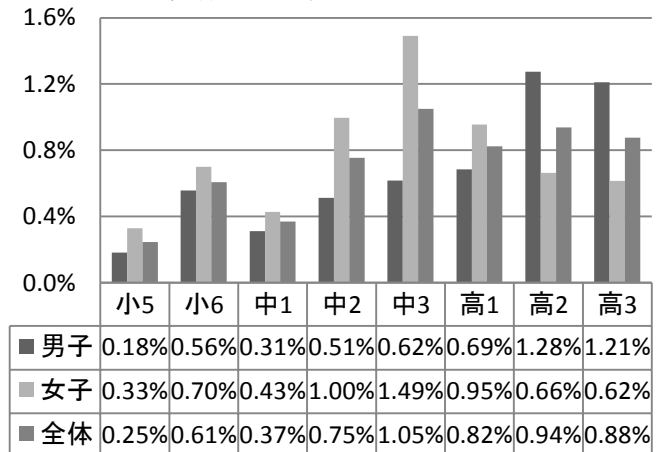


表1-17 急に友達とのつきあいが減った、クラスメートの中に入っていない等孤立している

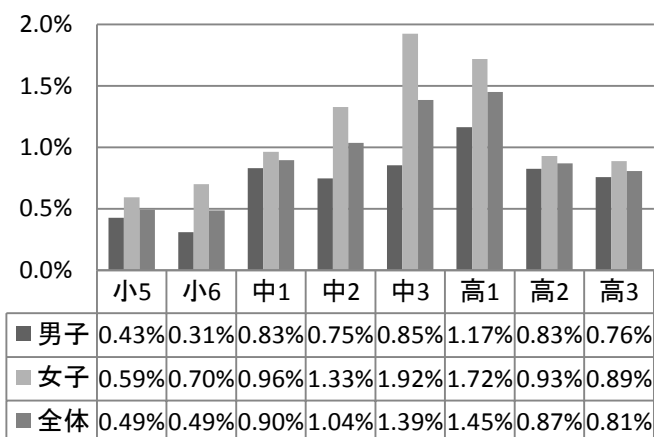


表1-18 教育費・給食費の支払い遅れや未払いがあった等経済的な問題がある

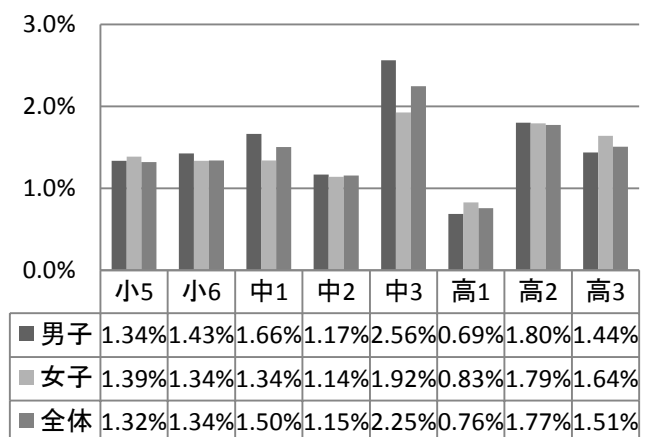
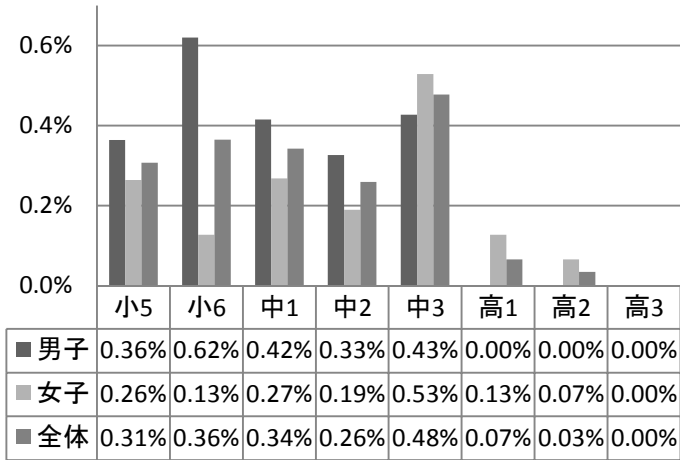
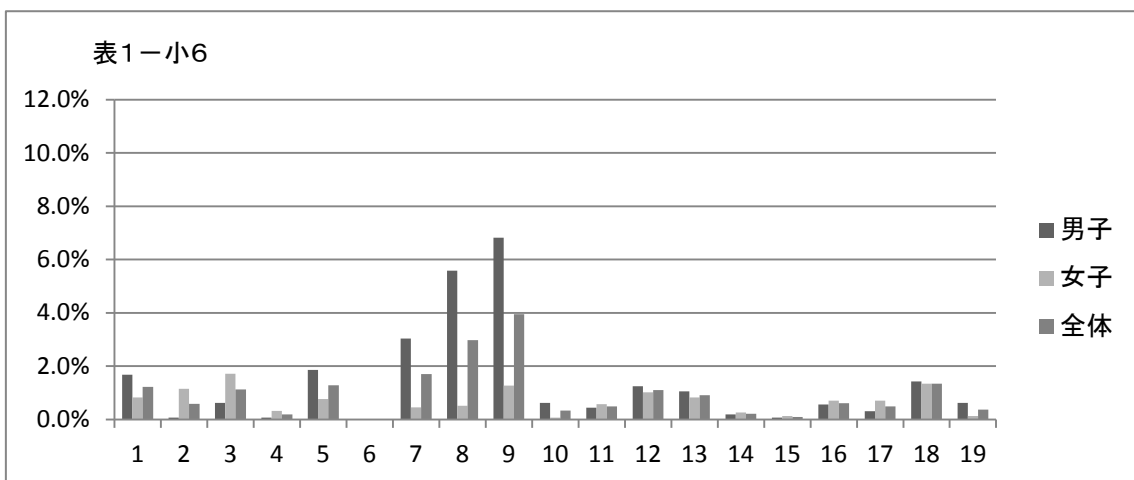
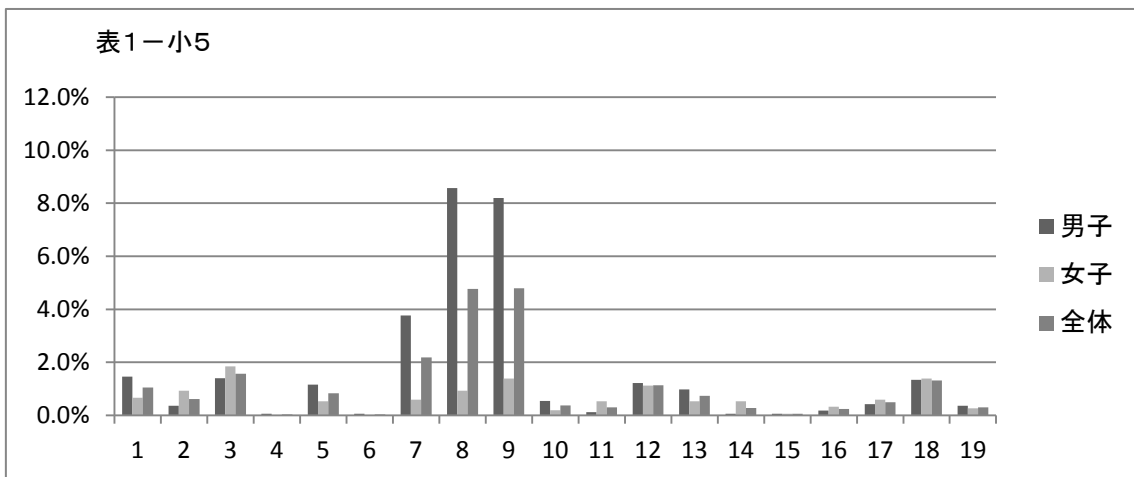
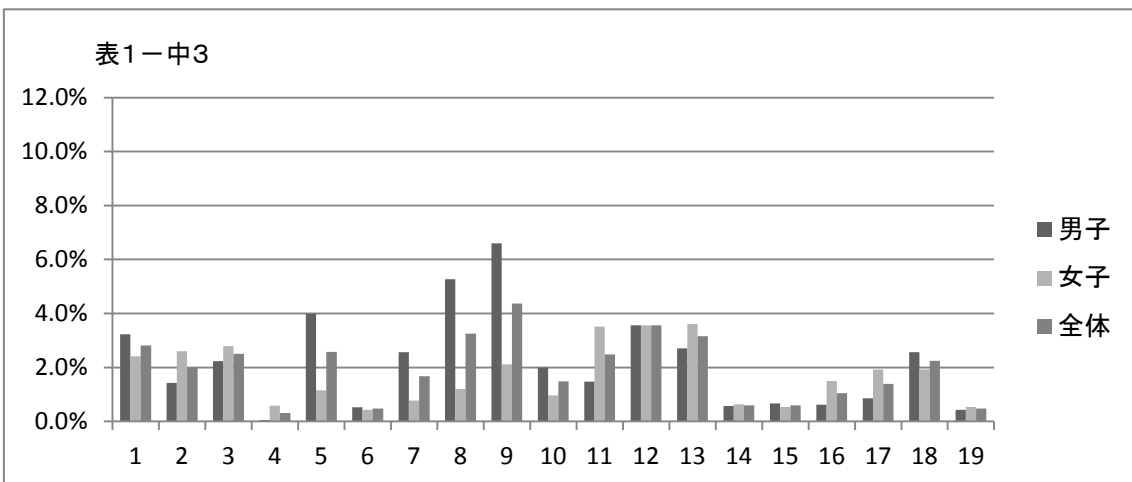
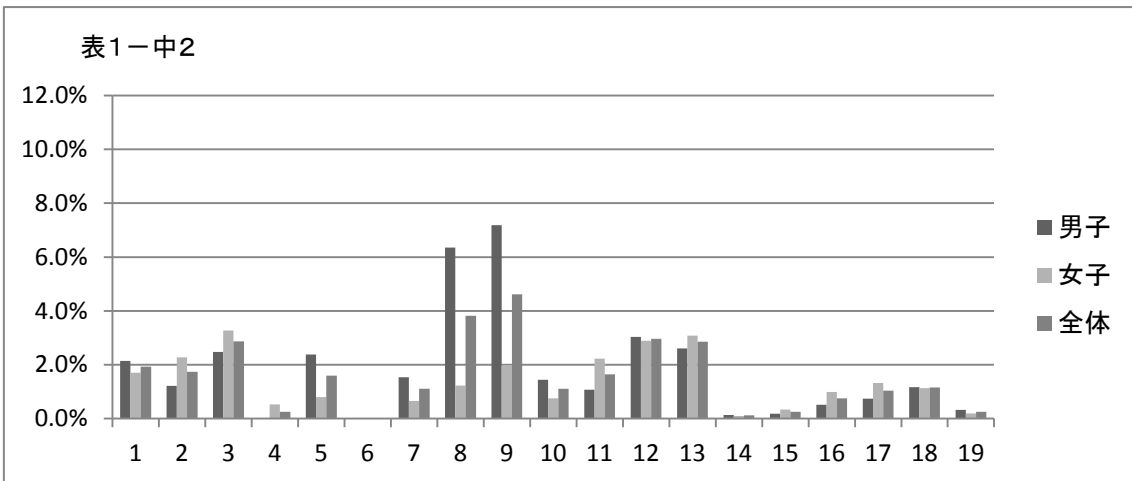
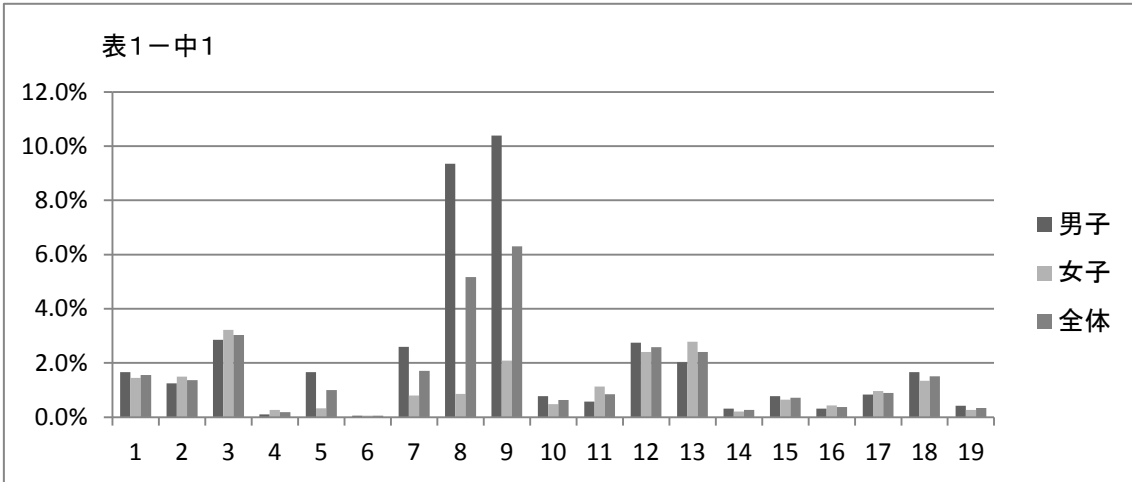


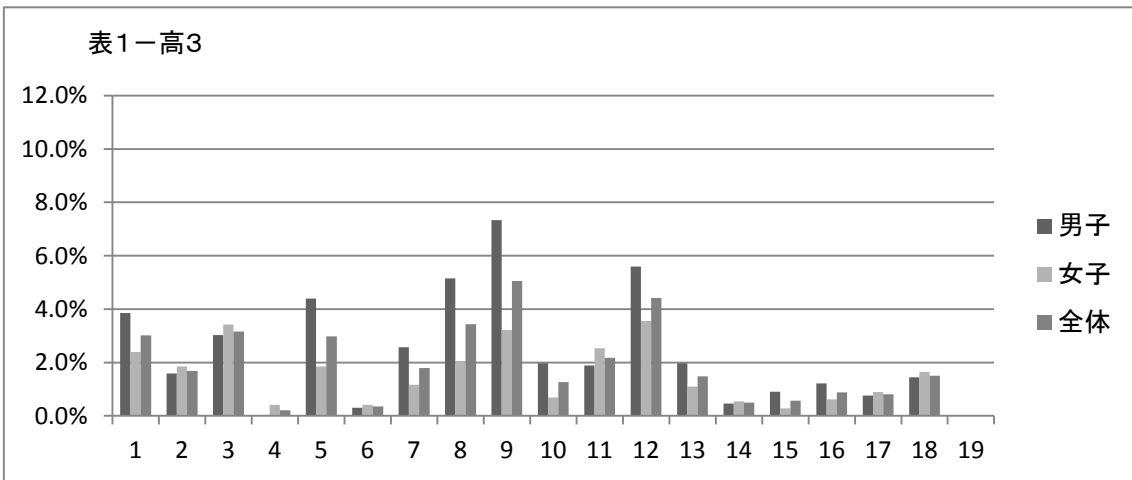
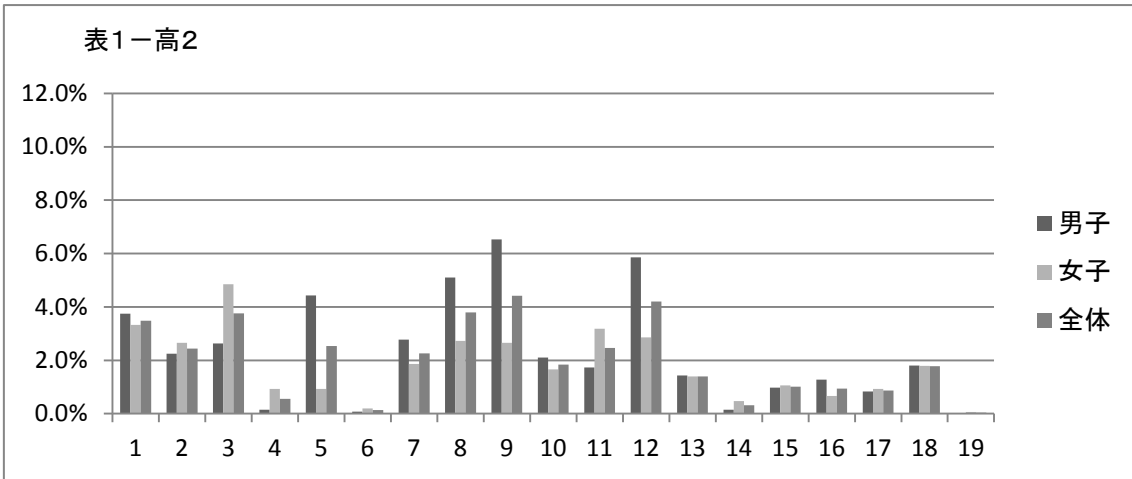
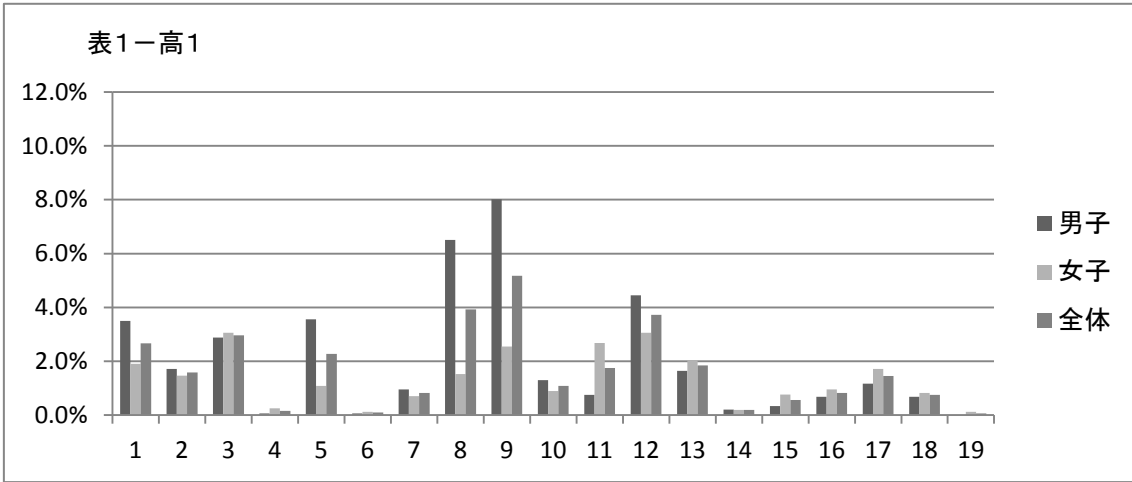
表1-19 暴力やネグレクト等，虐待が疑われる



(4) 学年別







(5) 学年別上位3項目

①男子

	1位	%	2位	%	3位	%
小5	8. 落ち着きがない	8.6	9. 集中力がない	8.2	7. イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる	3.8
小6	9. 集中力がない	6.8	8. 落ち着きがない	5.5	7. イライラすることが多く、ちょっとしたことでかっとなる	3.0
中1	9. 集中力がない	10.4	8. 落ち着きがない	9.4	3. 頭痛、腹痛等の身体症状をよく訴える	2.9
中2	9. 集中力がない	7.2	8. 落ち着きがない	6.3	12. 遅刻や欠席が多い	3.0
中3	9. 集中力がない	6.6	8. 落ち着きがない	5.3	5. いつも眠そうにしている	4.0
高1	9. 集中力がない	8.0	8. 落ち着きがない	6.5	12. 遅刻や欠席が多い	4.5
高2	9. 集中力がない	6.5	12. 遅刻や欠席が多い	5.9	8. 落ち着きがない	5.1
高3	9. 集中力がない	7.3	12. 遅刻や欠席が多い	5.6	8. 落ち着きがない	5.1

②女子

	1位	%	2位	%	3位	%
小5	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える	1.8	9. 集中力がない	1.4	18. 経済的な問題がある	1.4
小6	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える	1.7	9. 集中力がない	1.3	18. 経済的な問題がある	1.3
中1	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える	3.2	13. 不登校・不登校傾向がある	2.8	12. 遅刻や欠席が多い	2.4
中2	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える	3.3	13. 不登校・不登校傾向がある	3.1	12. 遅刻や欠席が多い	2.9
中3	12. 遅刻や欠席が多い	3.6	13. 不登校・不登校傾向がある	3.6	11. 保健室を頻繁に利用する	3.5
高1	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える 12. 遅刻や欠席が多い			3.1	11. 保健室を頻繁に利用する	2.7
高2	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える	4.8	1. 元気がなく怠そうに疲れているようにみえる	3.3	11. 保健室を頻繁に利用する	3.2
高3	12. 遅刻や欠席が多い	3.6	3. 頭痛・腹痛等の身体症状をよく訴える	3.4	9. 集中力がない	3.2

設問4 あなたが担当しているクラスの中に、表2に当てはまる児童生徒はいますか

表2 項目

	行 動 等
1	自転車、バイク、自動車等で無謀な運転をしたり、しばしば事故を起こしてしまう
2	たびたびけんかをする
3	身の危険を顧みないような行為を繰り返す、または、しばしばケガを負う
4	家庭内暴力がみられる
5	他の児童生徒に対して暴力をふるう
6	教師に対して暴力をふるう
7	学校内の施設や物を壊したりする
8	性的逸脱行為がある
9	授業をさぼる
10	夜遅くまで遊ぶ
11	触法行為等がある（万引きや自転車を盗む、家のお金を黙って持ち出す 等）
12	無断外泊や、家に帰らずに遊び歩くことが多い
13	急に、髪、化粧、服装等が派手になった
14	喫煙をする
15	飲酒をする
16	薬物の乱用がある（シンナー、薬の過量服薬 等）
17	リストカットをしたことがある
18	「死にたい」と口にすることがある

表2に「該当あり」と回答した担任教師の割合

(人)

	小5	小6	小 5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
a いる	31 (22.8)	38 (28.1)	1 (12.5)	47 (33.1)	62 (44.3)	67 (48.6)	42 (50.6)	40 (48.2)	34 (41.0)	362
b いない	105 (77.2)	97 (71.9)	7 (87.5)	95 (66.9)	78 (55.7)	71 (51.4)	40 (48.2)	42 (50.6)	49 (59.0)	584
c その他	0	0	0	0	0	0	1 (1.2)	1 (1.2)	0	2
計	136	135	8	142	140	138	83	83	83	948

()内は%

設問5 設問4で「a いる」と回答した方、具体的にどのような行動等がみられますか。みられる行動等、ひとつの項目について、当てはまる人数を男女別で記入してください。

(1) 表2に該当する児童生徒延人数

(人)

	小5	小6	小5・6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
男	83	71	1	142	121	246	98	162	142	1,066
女	8	10	0	23	69	126	74	79	98	487
計	91	81	1	165	190	372	172	241	240	1,553

(2) 項目別該当数

①全体

	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
1	3 0.1%	2 0.1%	3 0.1%	2 0.0%	7 0.2%	5 0.2%	5 0.2%	9 0.3%
2	40 1.2%	26 0.8%	42 1.1%	16 0.4%	20 0.5%	2 0.1%	2 0.1%	9 0.3%
3	6 0.2%	5 0.2%	14 0.4%	12 0.3%	17 0.4%	4 0.1%	11 0.4%	4 0.1%
4	0 0.0%	6 0.2%	4 0.1%	5 0.1%	6 0.1%	1 0.0%	3 0.1%	2 0.1%
5	19 0.6%	17 0.5%	26 0.7%	9 0.2%	17 0.4%	2 0.1%	2 0.1%	3 0.1%
6	3 0.1%	0 0.0%	3 0.1%	6 0.1%	2 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
7	1 0.0%	7 0.2%	14 0.4%	12 0.3%	24 0.6%	1 0.0%	5 0.2%	9 0.3%
8	1 0.0%	1 0.0%	2 0.1%	7 0.2%	8 0.2%	1 0.0%	7 0.2%	5 0.2%
9	5 0.2%	3 0.1%	6 0.2%	12 0.3%	37 0.9%	19 0.6%	30 1.0%	44 1.5%
10	2 0.1%	2 0.1%	11 0.3%	17 0.4%	38 0.9%	30 1.0%	34 1.2%	43 1.5%
11	7 0.2%	4 0.1%	7 0.2%	22 0.5%	32 0.8%	14 0.5%	6 0.2%	7 0.2%
12	0 0.0%	0 0.0%	5 0.1%	5 0.1%	24 0.6%	8 0.3%	20 0.7%	15 0.5%
13	1 0.0%	4 0.1%	3 0.1%	6 0.1%	22 0.5%	12 0.4%	14 0.5%	8 0.3%
14	0 0.0%	0 0.0%	7 0.2%	13 0.3%	43 1.0%	32 1.1%	47 1.6%	29 1.0%
15	0 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	5 0.1%	20 0.5%	15 0.5%	22 0.8%	21 0.7%
16	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.1%
17	1 0.0%	1 0.0%	11 0.3%	27 0.6%	38 0.9%	22 0.7%	21 0.7%	18 0.6%
18	1 0.1%	3 0.1%	6 0.2%	14 0.3%	17 0.4%	4 0.1%	12 0.4%	12 0.4%

②男子

	小5		小6		中1		中2		中3		高1		高2		高3	
1	3	0.2%	2	0.1%	3	0.2%	2	0.1%	5	0.2%	5	0.3%	5	0.4%	6	0.5%
2	37	2.2%	26	1.6%	39	2.0%	14	0.7%	19	0.9%	1	0.1%	2	0.2%	5	0.4%
3	6	0.4%	5	0.3%	14	0.7%	12	0.6%	16	0.8%	4	0.3%	9	0.7%	3	0.2%
4	0	0.0%	6	0.4%	4	0.2%	2	0.1%	5	0.2%	1	0.1%	2	0.2%	2	0.2%
5	17	1.0%	15	0.9%	25	1.3%	8	0.4%	17	0.8%	1	0.1%	2	0.2%	2	0.2%
6	3	0.2%	0	0.0%	3	0.2%	4	0.2%	1	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
7	1	0.1%	7	0.4%	13	0.7%	11	0.5%	24	1.1%	1	0.1%	5	0.4%	9	0.7%
8	1	0.1%	1	0.1%	2	0.1%	6	0.3%	2	0.1%	0	0.0%	2	0.2%	3	0.2%
9	5	0.3%	2	0.1%	5	0.3%	10	0.5%	22	1.0%	11	0.8%	20	1.5%	29	2.2%
10	2	0.1%	1	0.1%	11	0.6%	12	0.6%	27	1.3%	22	1.5%	26	2.0%	23	1.7%
11	7	0.4%	4	0.2%	7	0.4%	17	0.8%	26	1.2%	11	0.8%	6	0.5%	5	0.4%
12	0	0.0%	0	0.0%	5	0.3%	3	0.1%	17	0.8%	6	0.4%	13	1.0%	9	0.7%
13	0	0.0%	2	0.1%	2	0.1%	2	0.1%	11	0.5%	3	0.2%	5	0.4%	3	0.2%
14	0	0.0%	0	0.0%	6	0.3%	13	0.6%	36	1.7%	24	1.6%	41	3.1%	24	1.8%
15	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	3	0.1%	13	0.6%	7	0.5%	19	1.4%	17	1.3%
16	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
17	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.05%	3	0.1%	0	0.0%	2	0.2%	1	0.1%
18	1	0.1%	0	0.0%	2	0.1%	1	0.05%	2	0.1%	1	0.1%	3	0.2%	1	0.1%

③女子

	小5		小6		中1		中2		中3		高1		高2		高3	
1	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.2%
2	3	0.2%	0	0.0%	3	0.2%	2	0.1%	1	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	4	0.3%
3	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	1	0.1%
4	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.1%	1	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%
5	2	0.1%	2	0.1%	1	0.1%	1	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	1	0.1%
6	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	1	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
7	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	1	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
8	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.0%	6	0.3%	1	0.1%	5	0.3%	2	0.1%
9	0	0.0%	1	0.1%	1	0.1%	2	0.1%	15	0.7%	8	0.5%	10	0.7%	15	1.0%
10	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	5	0.2%	11	0.5%	8	0.5%	8	0.5%	20	1.4%
11	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	0.2%	6	0.3%	3	0.2%	0	0.0%	2	0.1%
12	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	7	0.3%	2	0.1%	7	0.5%	6	0.4%
13	1	0.1%	2	0.1%	1	0.1%	4	0.2%	11	0.5%	9	0.6%	9	0.6%	5	0.3%
14	0	0.0%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	7	0.3%	8	0.5%	6	0.4%	5	0.3%
15	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%	7	0.3%	8	0.5%	3	0.2%	4	0.3%
16	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.1%
17	1	0.1%	1	0.1%	11	0.6%	26	1.2%	35	1.7%	22	1.4%	19	1.3%	17	1.2%
18	1	0.1%	3	0.2%	4	0.2%	13	0.6%	15	0.7%	3	0.2%	9	0.6%	11	0.8%

(3) 項目別

表2-1 無謀な運転をしたり、しばしば事故を起こしてしまう

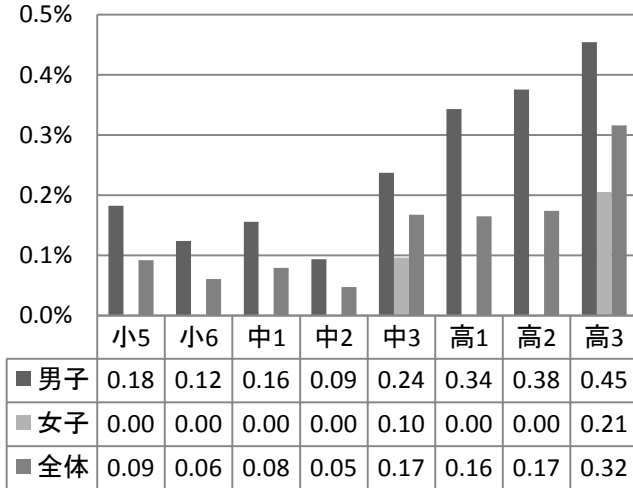


表2-2 たびたびけんかをする

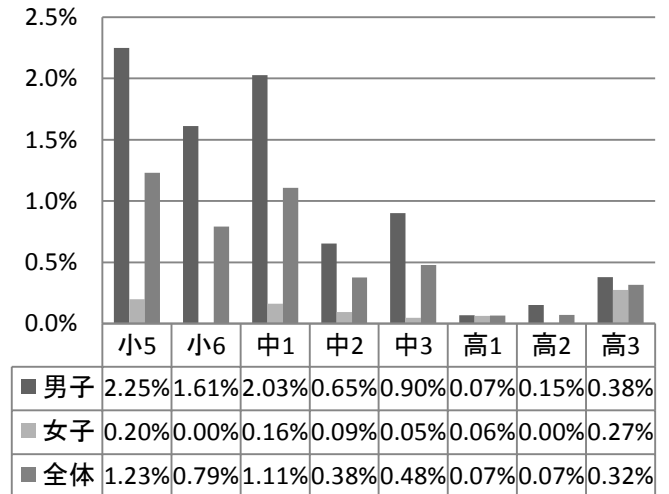


表2-3 身の危険を顧みないような行為を繰り返す、または、しばしばケガを負う

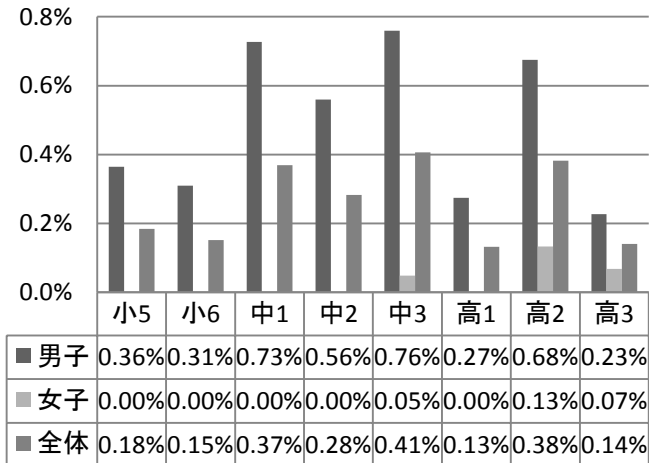


表2-4 家庭内暴力がみられる

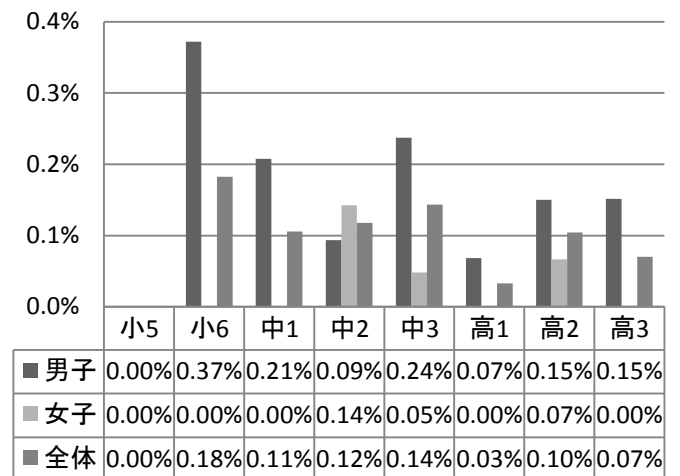


表2-5 他の児童生徒に対して暴力をふるう

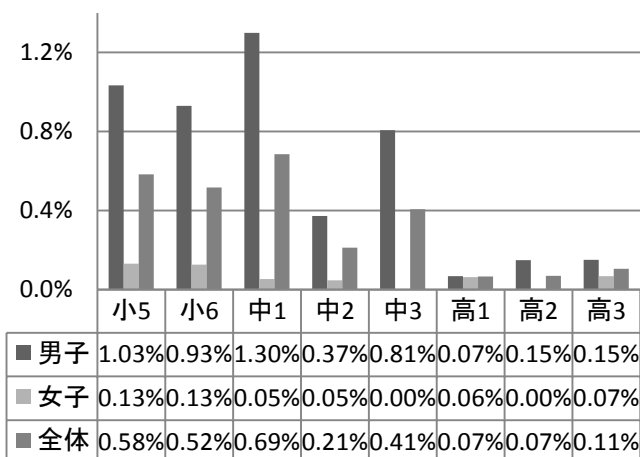


表2-6 教師に対して暴力をふるう

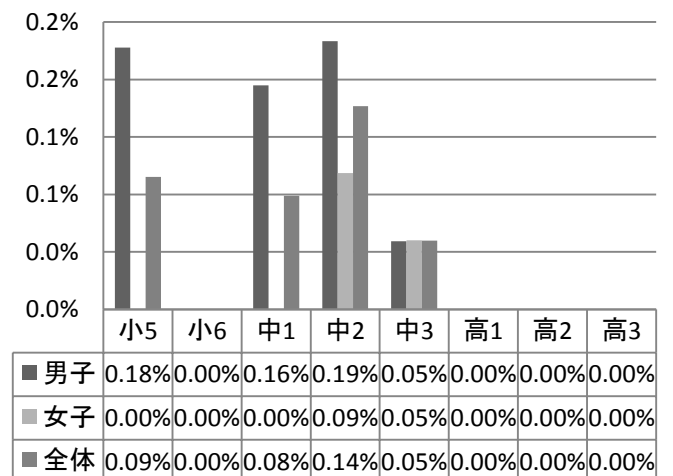


表2-7 学校内の施設や物を壊したりする

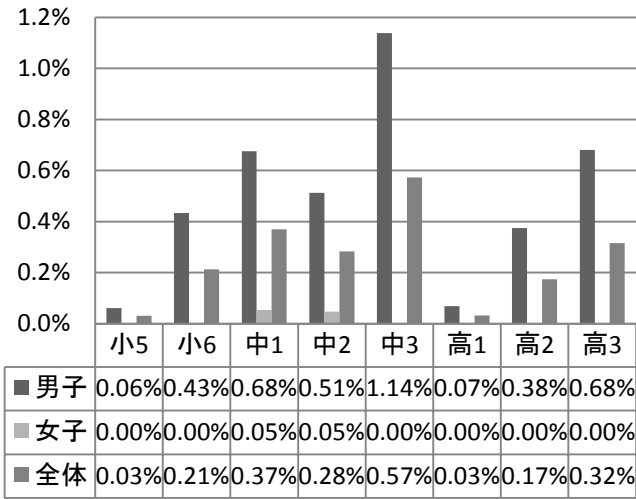


表2-8 性的逸脱行為がある

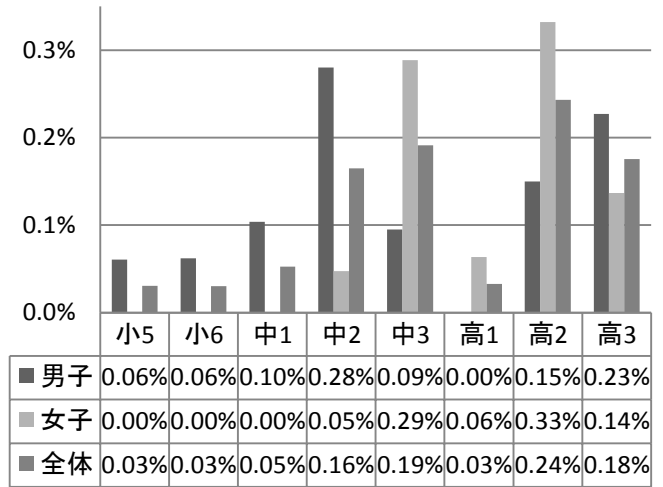


表2-9 授業をさぼる

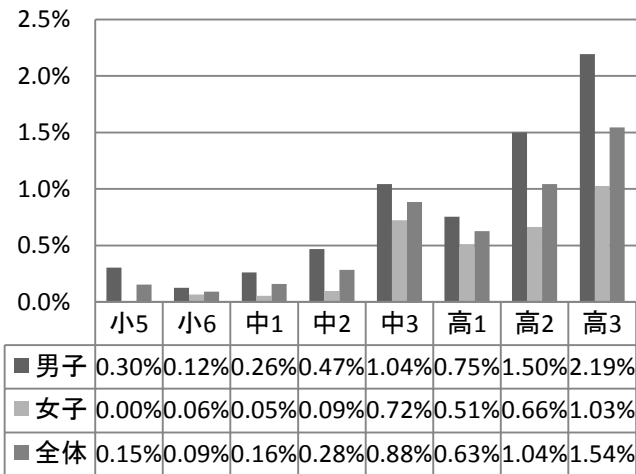


表2-10 夜遅くまで遊ぶ

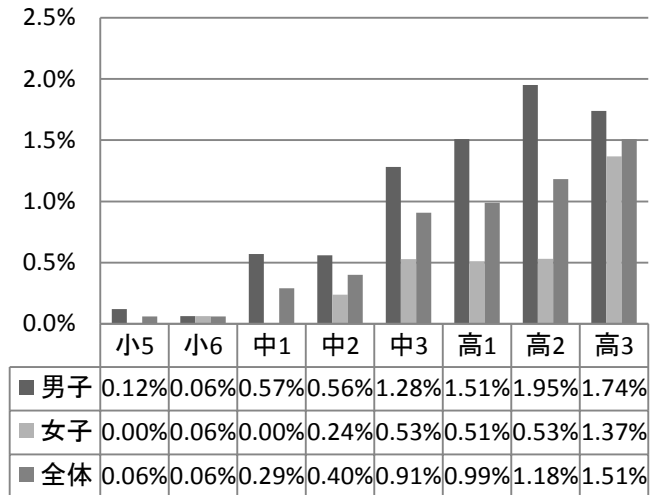


表2-11 触法行為等がある

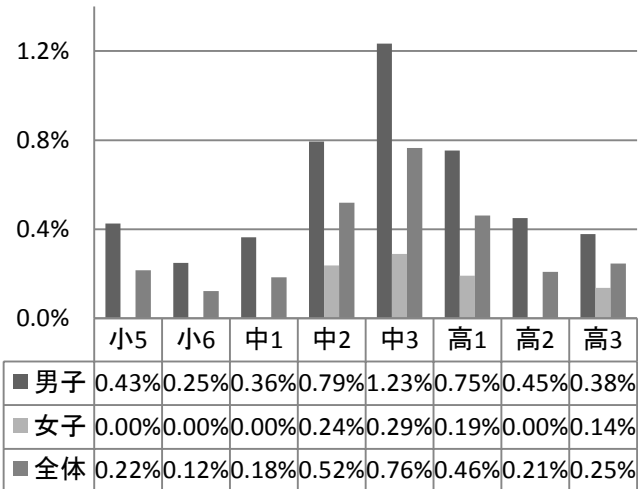


表2-12 無断外泊や、家に帰らずに遊び歩くことが多い

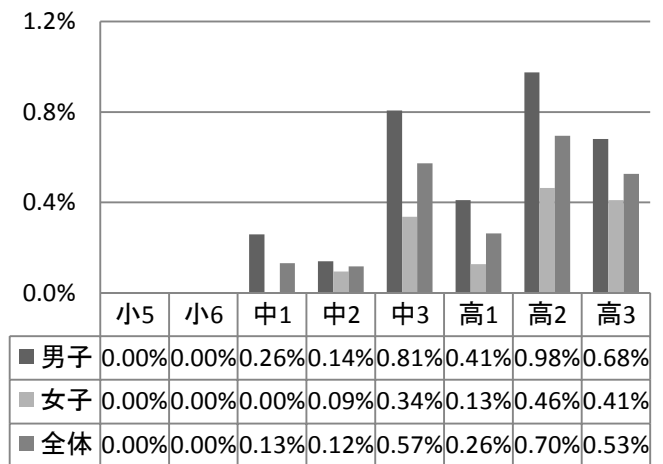


表2-13 急に、髪、化粧、服装等が派手になった

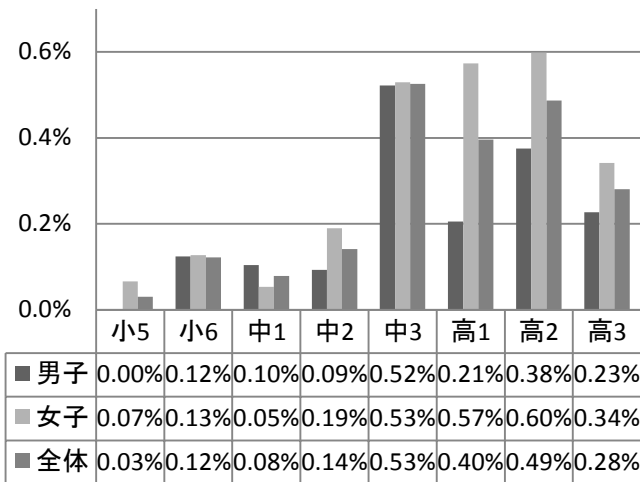


表2-14 喫煙をする

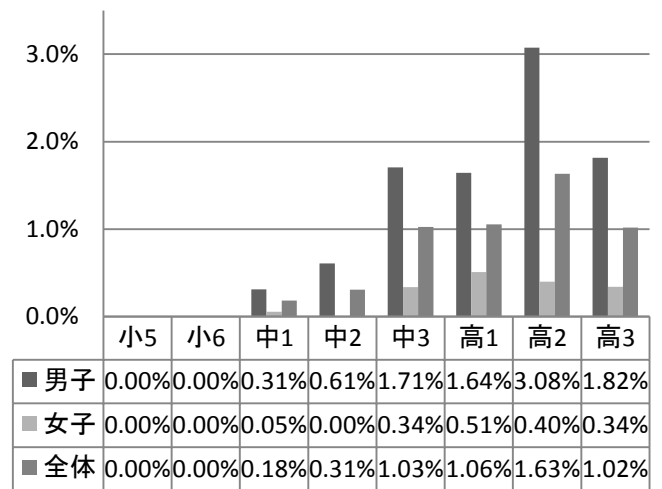


表2-15 飲酒をする

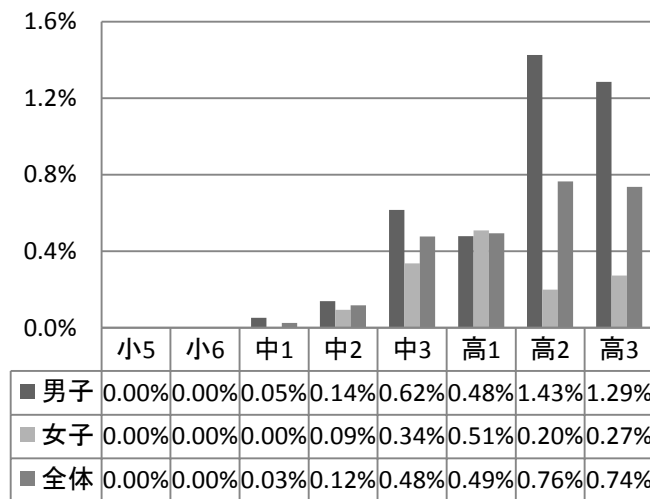


表2-16 薬物の乱用がある

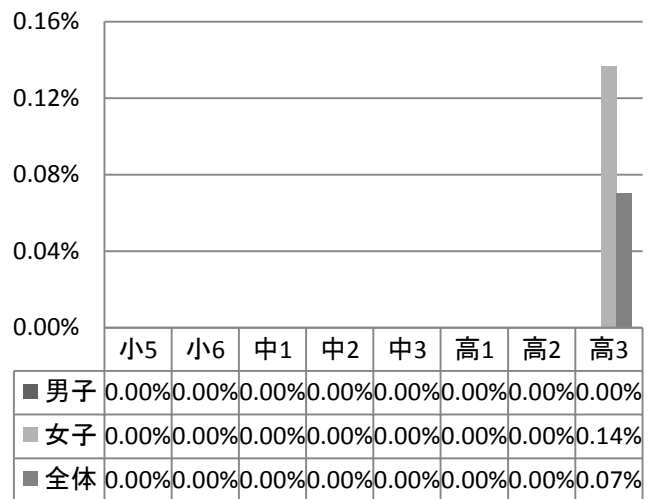


表2-17 リストカットをしたことがある

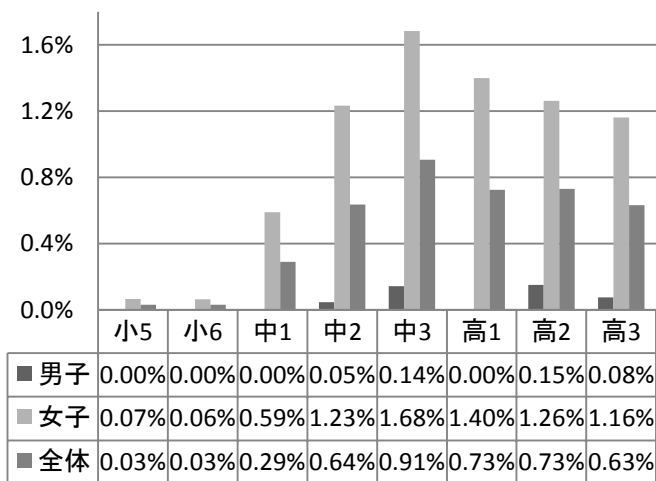
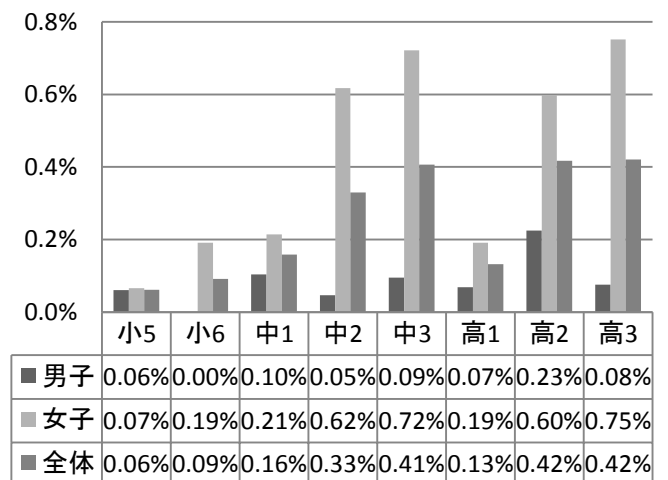


表2-18 「死にたい」と口にすることがある



(4) 学年別

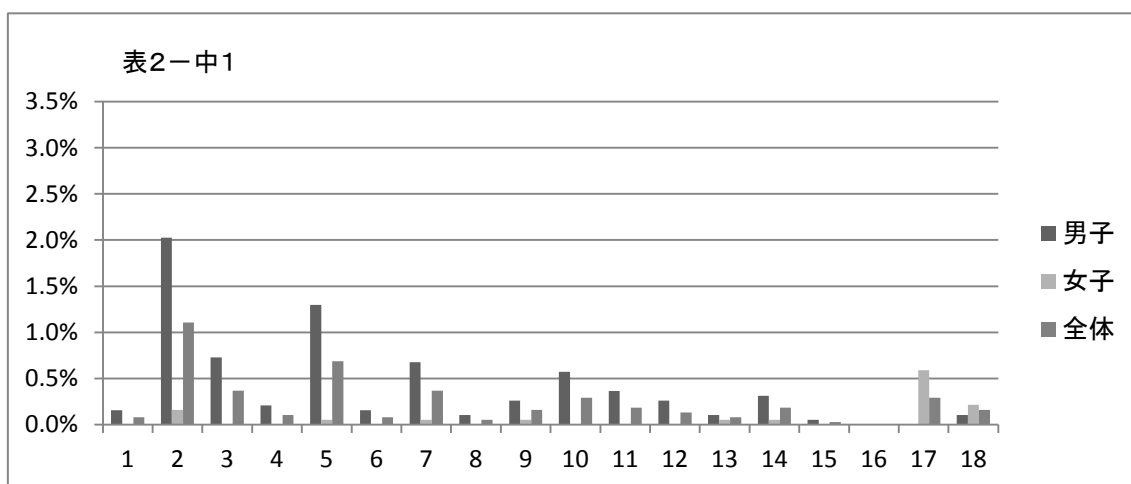
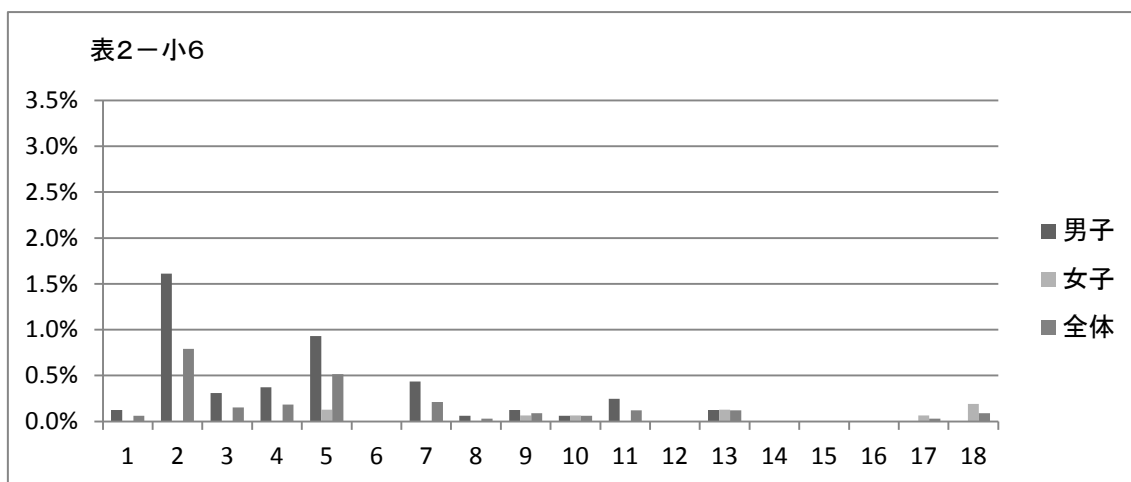
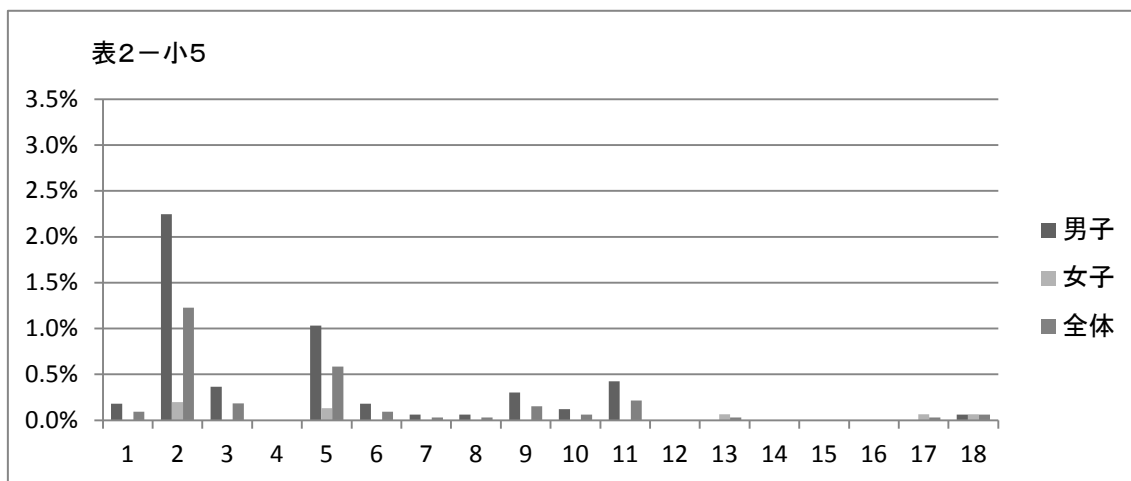


表2-中2

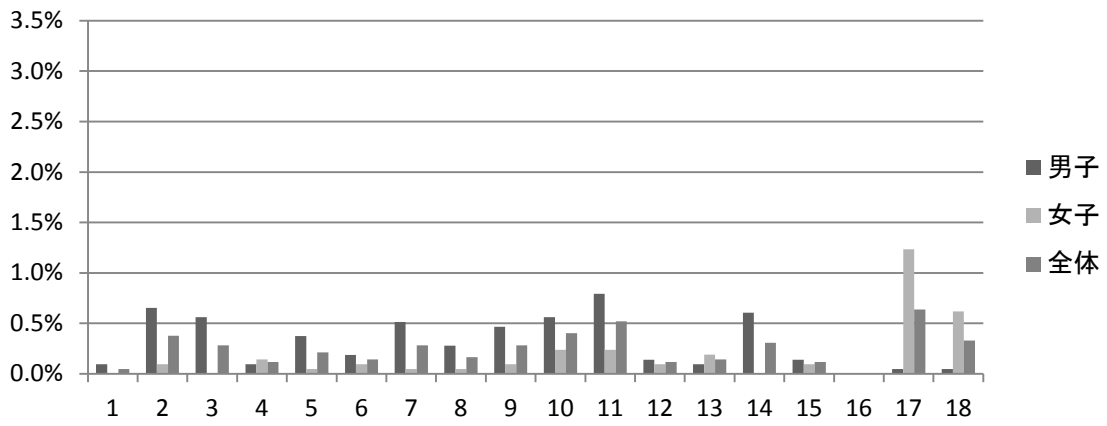


表2-中3

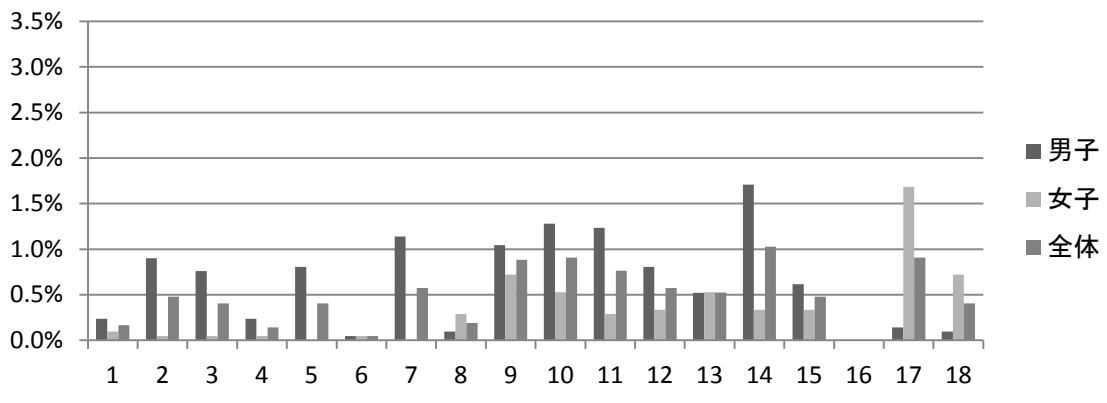
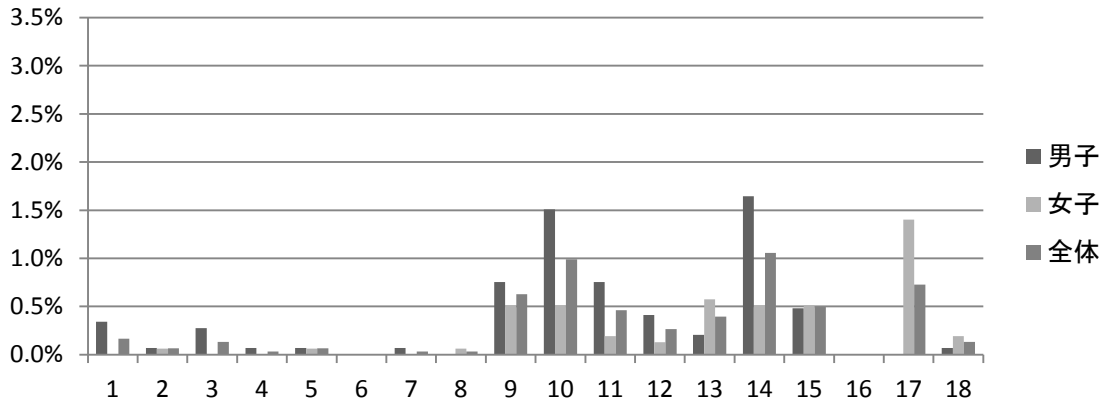
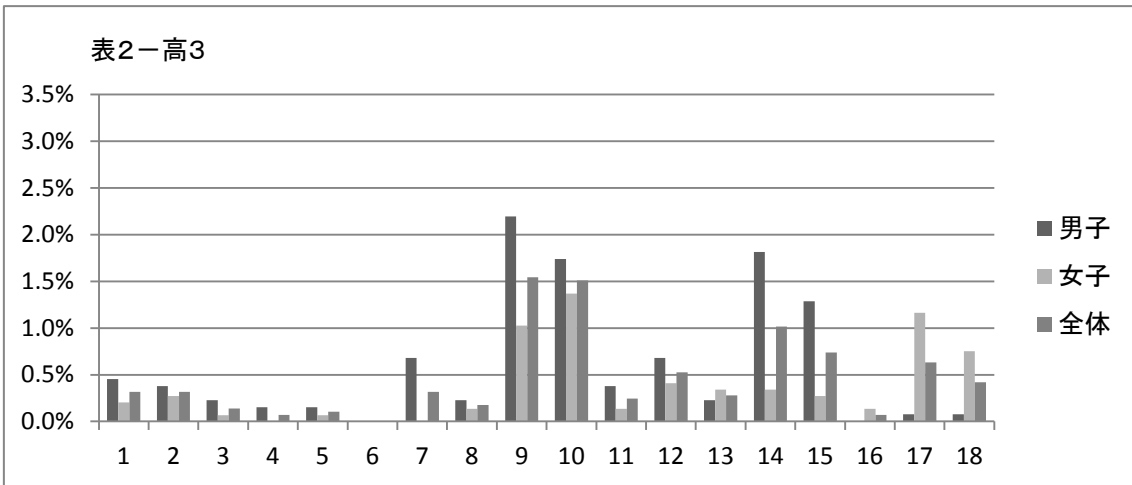
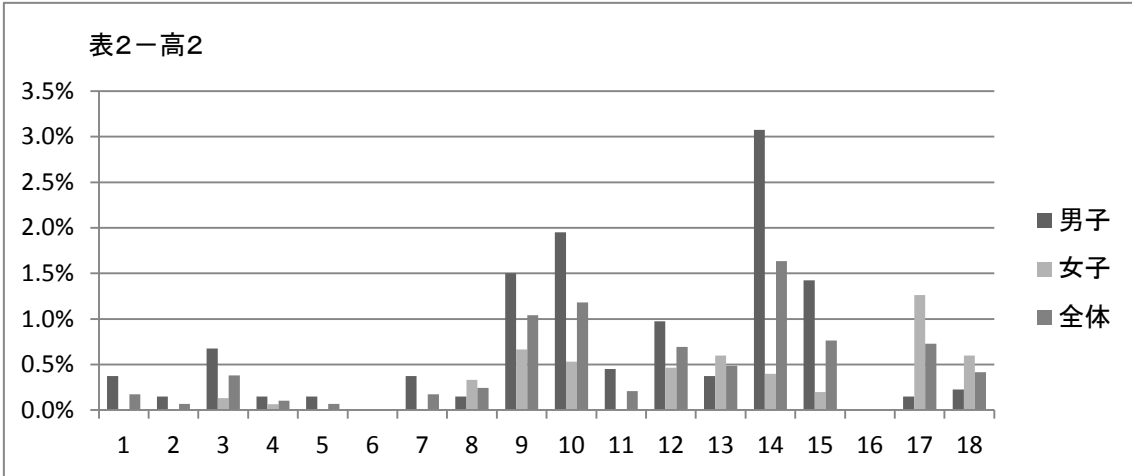


表2-高1





(5) 学年別上位3項目

①男子

	1位	%	2位	%	3位	%
小5	2. たびたびけんかをする	2.2	5. 他の児童に対して暴力をふるう	1.0	3. 危険を顧みない行為、怪我 11. 触法行為等がある	0.4
小6	2. たびたびけんかをする	1.6	5. 他の児童に対して暴力をふるう	0.9	4. 家庭内暴力がみられる 7. 家庭内の物を壊す	0.4
中1	2. たびたびけんかをする	2.0	5. 他の児童に対して暴力をふるう	1.3	3. 危険を顧みない行為、怪我 7. 家庭内の物を壊す	0.7
中2	11. 触法行為等がある	0.8	2. たびたびけんかをする	0.7	3. 危険を顧みない行為、怪我 10. 夜遅くまで遊ぶ 14. 喫煙をする	0.6

中3	14. 喫煙をする	1.7	11. 触法行為等がある	1.2	7. 家庭内の物を壊す	1.1
高1	14. 喫煙をする	1.6	10. 夜遅くまで遊ぶ	1.5	9. 授業をさぼる	0.8
高2	14. 喫煙をする	3.1	9. 授業をさぼる	1.5	15. 飲酒をする	1.4
高3	9. 授業をさぼる	2.2	14. 喫煙をする	1.8	10. 夜遅くまで遊ぶ	1.7

②女子

	1位	%	2位	%	3位	%
小5	2. たびたびけんかをする	0.2	5. 他の児童に対し暴力 17. リスクをしたことがある		13. 急に服装が派手になる 18. 「死にたい」と口にする	0.1
小6	18. 「死にたい」と口にする	0.2	5. 他の児童に対し暴力 13. 急に服装が派手になる		10. 夜遅くまで遊ぶ 17. リスクをしたことがある	0.1
中1	17. リスクをしたことがある	0.6	2. たびたびけんかをする 18. 「死にたい」と口にする	0.6	5. 他の児童に対し暴力 10. 夜遅くまで遊ぶ 13. 急に服装が派手になる 17. リスクをしたことがある	0.1
中2	17. リスクをしたことがある	1.2	18. 「死にたい」と口にする	0.6	10. 夜遅くまで遊ぶ 11. 触法行為等がある 13. 急に服装が派手になる	0.2
中3	17. リスクをしたことがある	1.7	18. 「死にたい」と口にする 9. 授業をさぼる			0.7
高1	17. リスクをしたことがある	1.4	13. 急に服装が派手になる	0.6	10. 夜遅くまで遊ぶ 14. 喫煙をする 15. 飲酒をする	0.5
高2	17. リスクをしたことがある	1.3	9. 授業をさぼる	0.7	13. 急に服装が派手になる 18. 「死にたい」と口にする	0.6
高3	10. 夜遅くまで遊ぶ	1.4	17. リスクをしたことがある	1.2	9. 授業をさぼる	1.0

設問6 「気になる子」や「問題行動のある子」への対応について。表3にあげた項目の実施について、該当する所に○を記入してください。

(1) 設問6に回答した担任教師数

(人)

項目	a十分に実施している	bやや不十分だが実施	cまだまだ不十分だが実施	d実施していない	記入なし
1. 学校への登校が途切れないように継続的に声がけをしている	517	184	31	33	105
2. 面接、家庭訪問等でコミュニケーションをとり児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている	441	301	64	17	47
3. 補習事業など学習面での配慮を行っている	134	303	185	160	88
4. 出席日数への配慮等を行っている	279	138	64	246	143
5. 出身校と連絡を取り、必要な情報を把握している	112	93	114	384	167
6. 校内で話し合いを持ち、生徒への統一した対応方針などを協議・決定している	386	262	83	53	77
7. スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、校医等に相談しながら対応している	286	206	91	176	110
8. 他機関と連携しながら対応している	150	129	90	370	130

(2) 項目別

表3-1 学校への登校が途切れないように継続的に声がけをしている

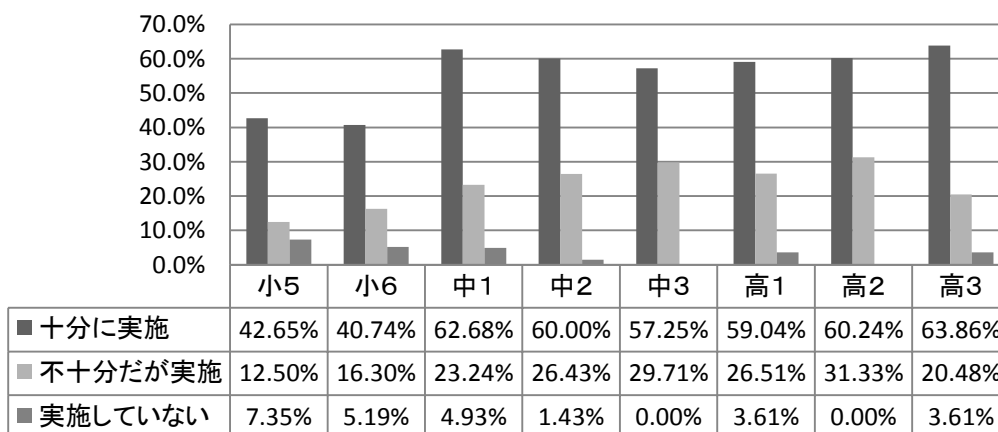


表3-2 面接, 家庭訪問等でコミュニケーションをとり児童生徒や保護者との関係性が途切れないようにしている

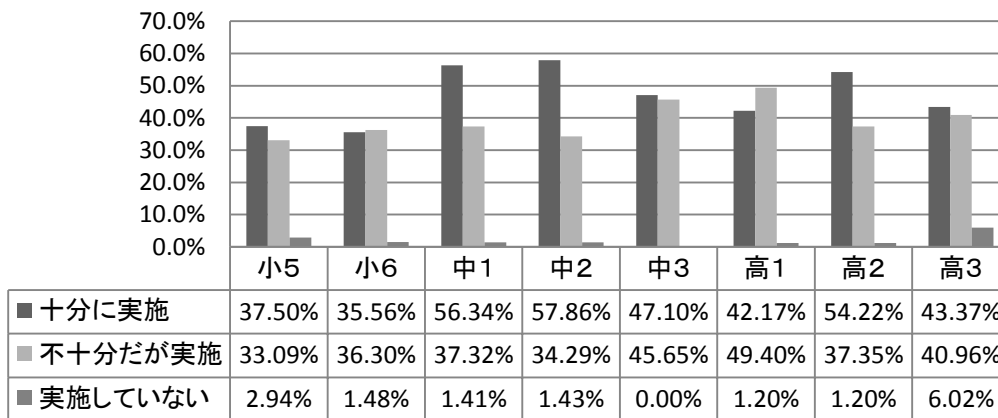


表3-3 補習事業など学習面での配慮を行っている

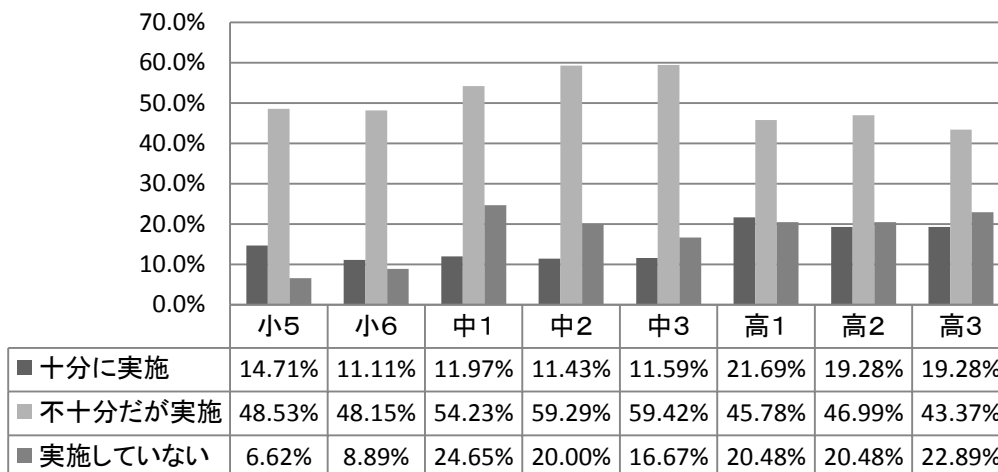


表3-4 出席日数への配慮を行っている

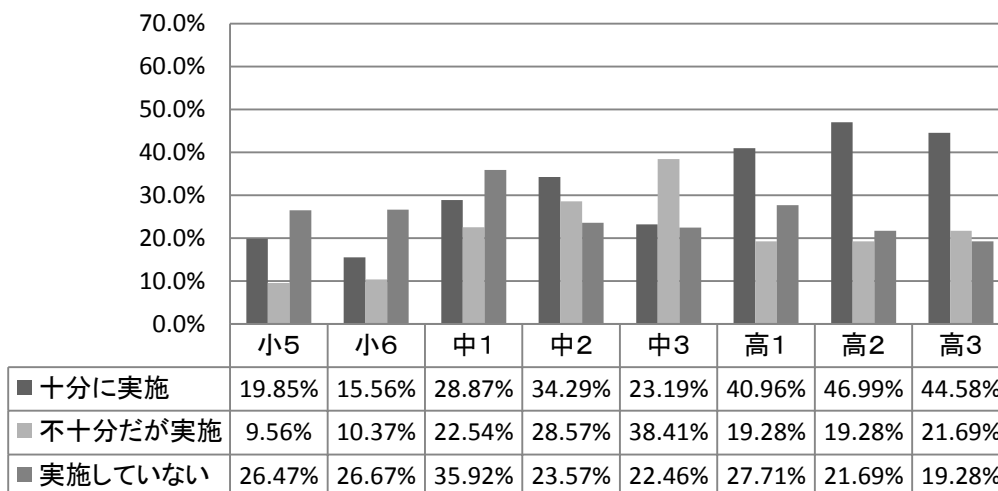


表3-5 出身校と連絡を取り，必要な情報を把握している

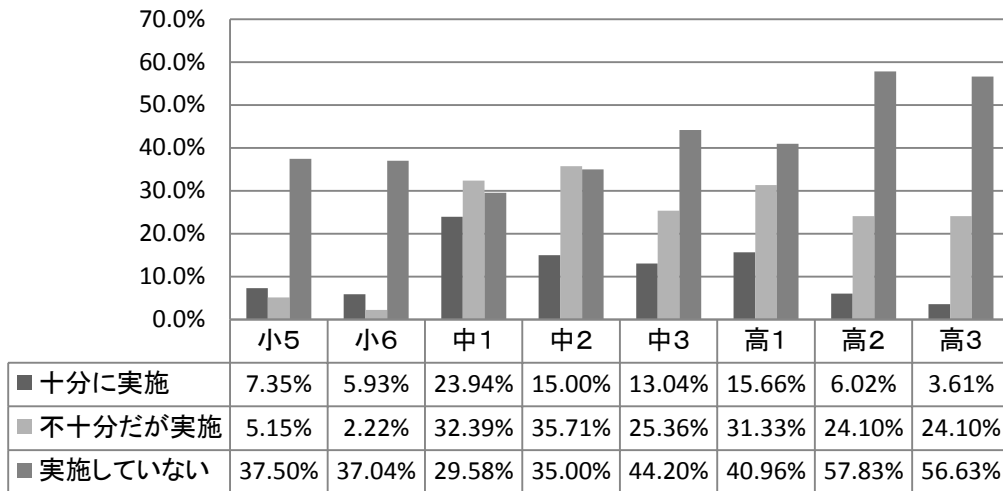


表3-6 校内で話し合いを持ち，生徒への統一した対応方針などを協議・決定している

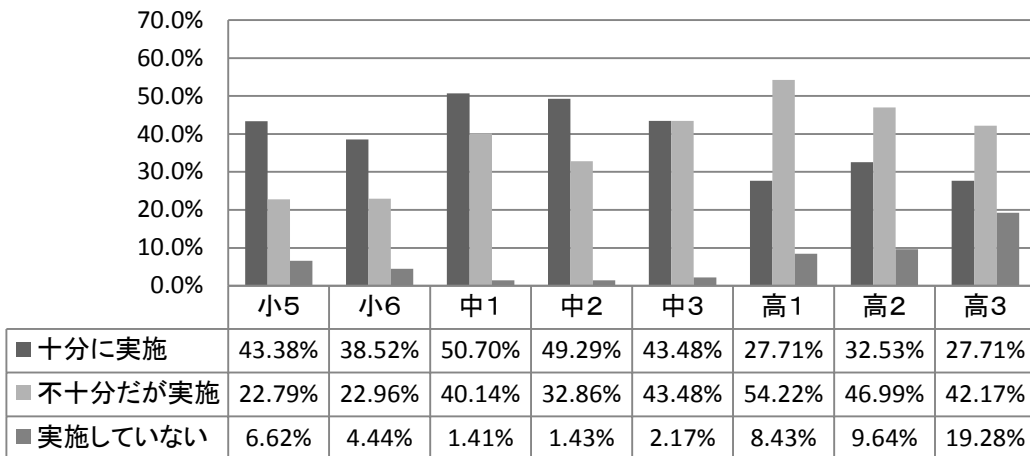


表3-7 スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー，校医等に相談しながら対応している

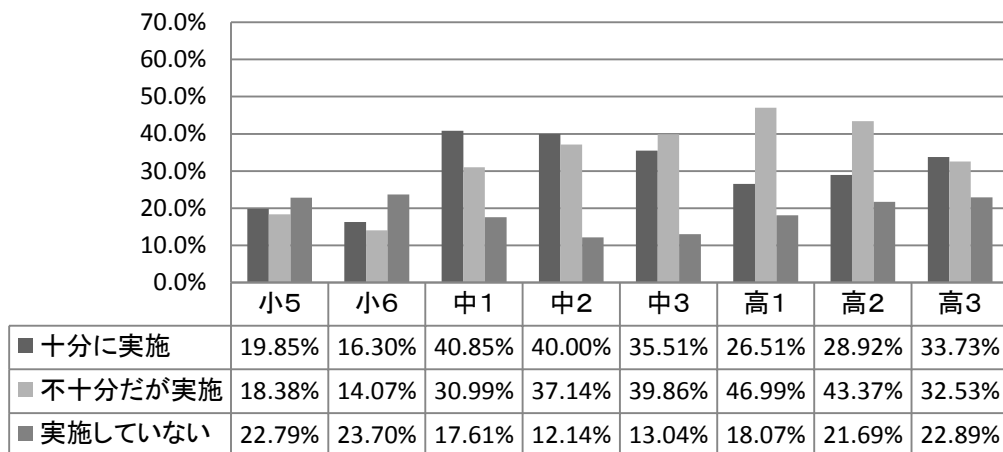
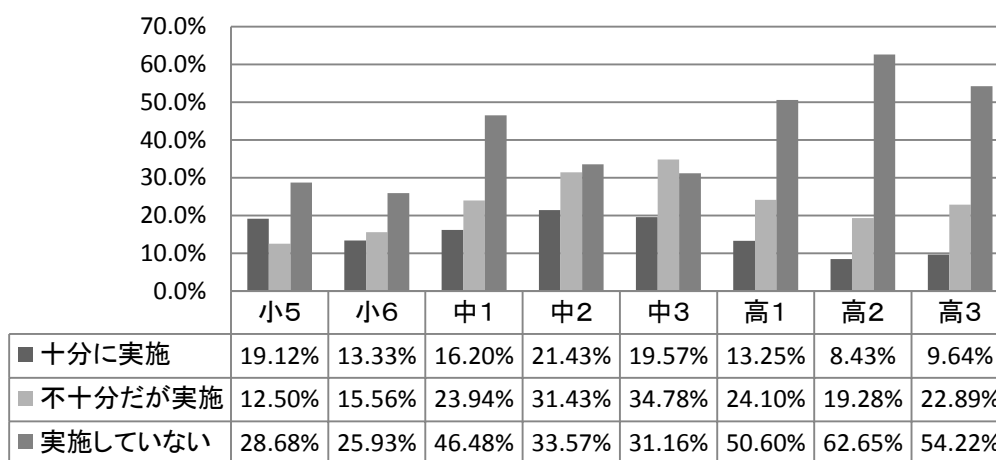


表3-8 他機関と連携しながら対応している



設問7 「気になる子」や「問題行動のある子」への対応について、あなたが実際の対応の中で特に「心がけてきた」点はどのようなことですか？また、「難しい」と感じるのはどのようなことですか。表4の項目の中から、該当するものをそれぞれ3つ以内で選び○をつけてください。

(1) 設問7に回答した担任教師数

項目	(人)		
	心がけてきた	難しい	両方(再掲)
1. 子どもの気持ちを知ろうとする努力をすること	676	117	76
2. その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること	394	157	18
3. なるべく孤立しないように働きかけること	337	102	11
4. 受容され、見守られている感覚がもてるようにすること	426	100	9
5. 学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所であることを保証し、伝えること	209	122	8
6. 問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること	417	246	52
7. 学習面だけでなく、子どもが学校に来やすくなるような配慮や働きかけをすること	297	66	6
8. 成長過程を踏まえた上で、今どのように関わるべきかを意識すること	292	209	17
9. 学校のみならず、家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること	183	517	30

(2) 項目別

表4-1 子どもの気持ちを知ろうと努力すること

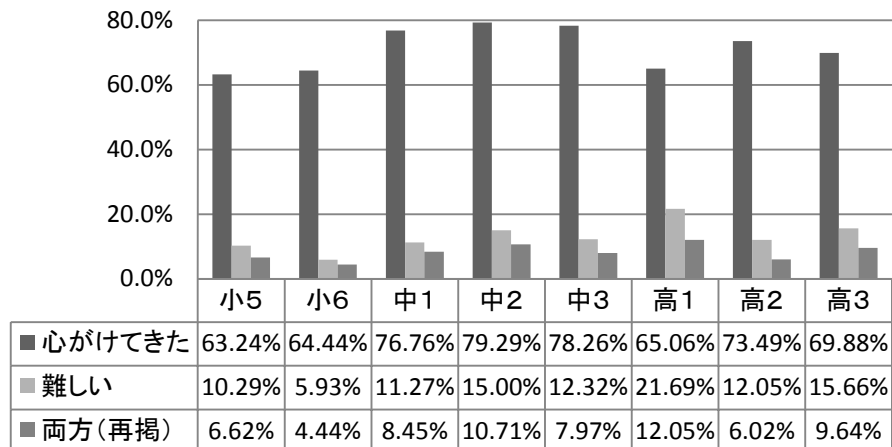


表4-2 その子どもが本来持っている強さや良さに着目し、それを伸ばす関わりをすること

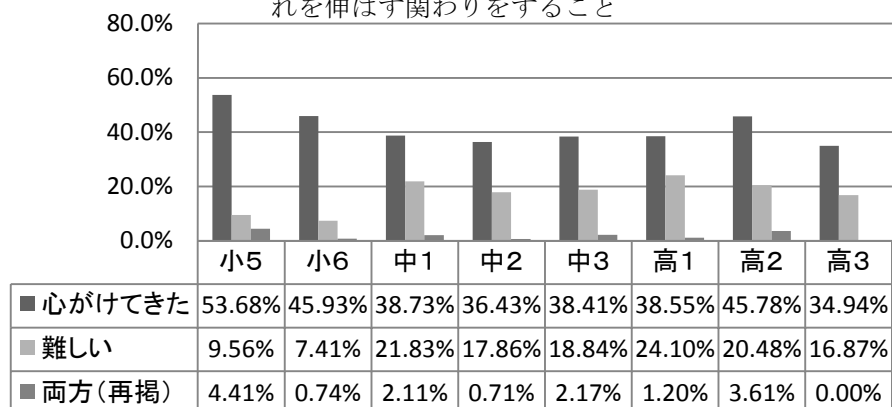


表4-3 なるべく孤立しないように働きかけること

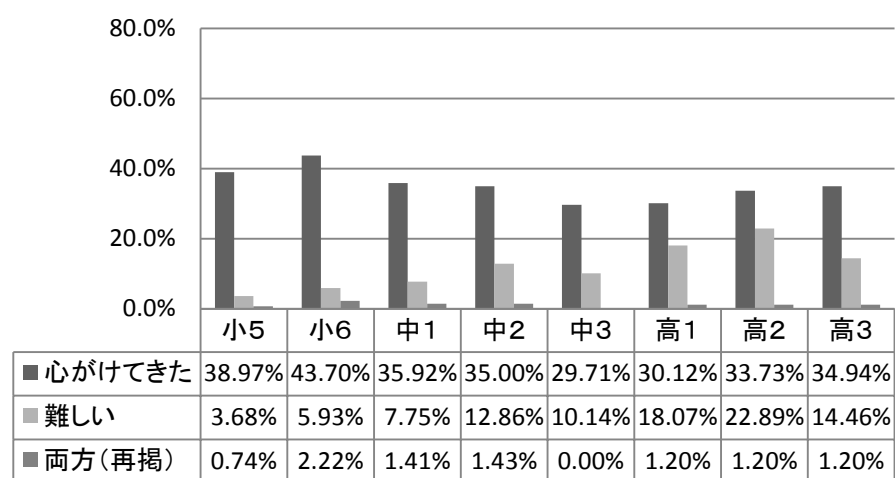


表4-4 受容され、見守られている感覚がもてるように
すること

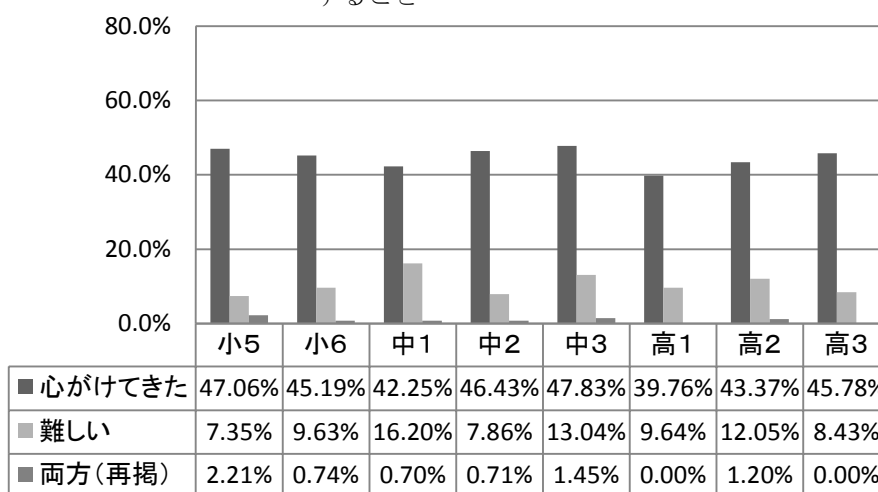


表4-5 学校が帰ってきてよい場所、子どもにとっての居場所
であることを保証し、伝えること

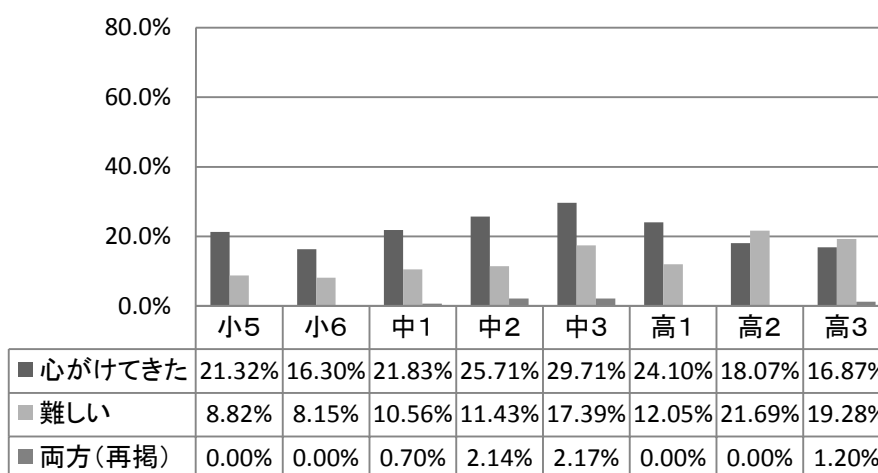


表4-6 問題行動の背景にある要因を考慮しながら、関わること

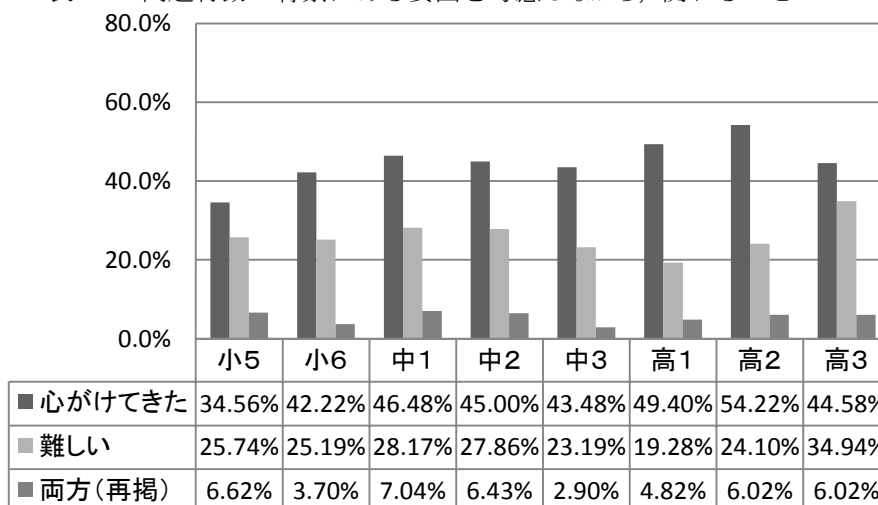


表4-7 学習面だけでなく，子どもが学校に来やすくなるような配慮や働きかけをすること

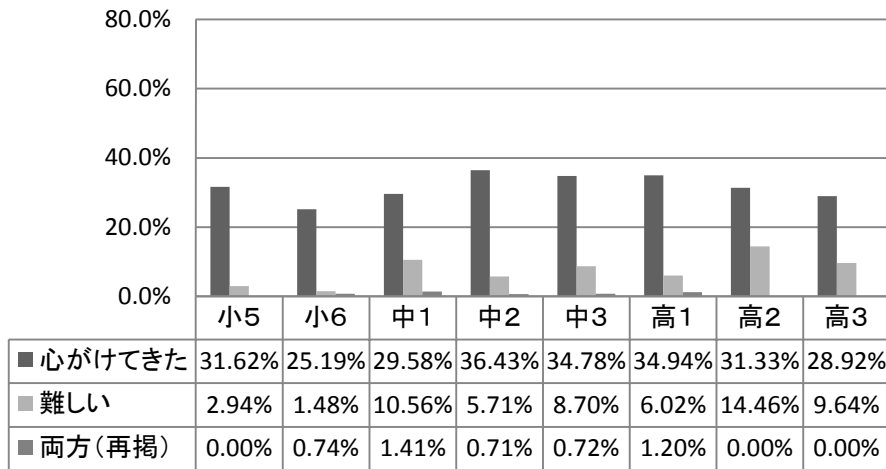


表4-8 成長過程を踏まえた上で，今どのように関わるべきかを意識すること

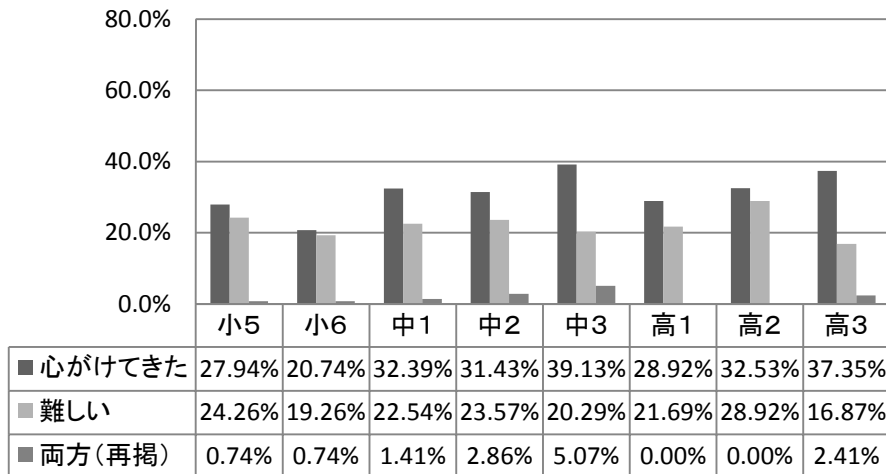
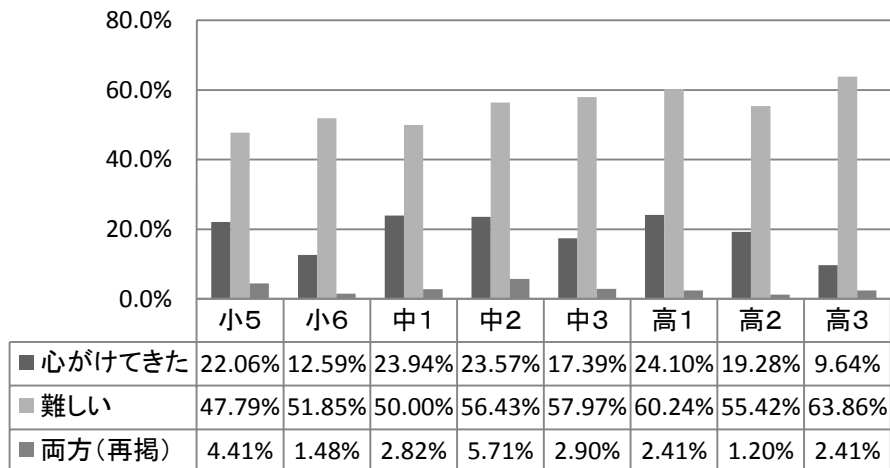


表4-9 学校のみならず，家庭や地域での生活を踏まえた指導や関わりをすること



設問8 児童生徒の言動や行動について、「気になる」「問題だ」と思われる行動はどんな行動ですか。
また、それに対し、基本的にどのような対応が必要だと思いますか。(自由記載)

(1) 児童生徒の言動や行動について「気になる」「問題だ」と思われる行動

(①1/② (①/③))

大分類	中分類	小分類	小5	小6	小5, 6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計①		
I	対人関係に関すること (他者との関係の中で起こること)		59	75	3	77	70	66	23	30	24	427		
内訳	1	トラブルや問題を起こしやすい												
		a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある	11	18	1	18	5	10	3	8	6			
		b 感情のコントロールができない、衝動性が高い	11	15	0	14	13	11	3	5	2			
		c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない	23	19	0	17	19	12	13	6	11			
		I-1計	45	52	1	49	37	33	19	19	19			
		2	他者との関係づくりが出来ない											
	d 対人関係(人間関係)が構築できない	3	3	0	7	12	2	1	1	3				
	e コミュニケーションがとれない	4	6	1	9	13	5	3	3	2				
	f 孤立、孤独、他者と関わらない	7	14	1	12	8	26	0	7	0				
	I-2計	14	23	2	28	33	33	4	11	5				
II	学校生活への適応に関すること		17	25	1	14	13	17	20	23	9	139		
内訳		g 状況への順応性が低さ(興味・関心の狭さ)	8	5	1	5	5	0	2	7	2		12.6%	14.7%
		h ルールにそった行動がとれない(ルール違反)	3	2	0	4	2	6	2	4	1			
		i 基本的な生活習慣が身につけていない	3	13	0	2	5	4	10	5	4			
		j 学力、学習面	3	5	0	3	1	7	6	7	2			
		k 登不登校、不登校気味、欠席が多い等	14	7	0	14	18	16	12	8	8		97	8.8%
IV	情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		22	18	0	38	18	15	12	9	13	145		
内訳		l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い等	9	10	0	11	5	7	6	1	5		13.1%	15.3%
		m 落ち着きがない、集中力がない等	10	5	0	12	4	6	3	2	4			
		n 精神症状、精神的に不安定な行動等	3	3	0	15	9	2	3	6	4			
		o 家族に関する問題 (家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等)	10	22	2	16	15	14	4	7	5		95	8.6%
VI	反抗的な態度、言動、反社会的な行動		5	5	0	11	13	8	1	0	4	47		
内訳		p 反抗的な態度、言動	2		0	7	5	5	0	0	2		4.3%	5.0%
		q 反社会的な行動	3	5	0	4	8	3	1	0	2			
VII	その他		12	8	1	33	18	24	14	26	19	155		
		r (分類しきれないもの) (行動の記載なく、対応や意見の記載のみのもの)										14.0%	16.4%	
		計(延数)②	139	160	7	203	165	160	86	103	82	1105		

	小5	小6	小5, 6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	計
記載あり(学校数)	101	102	4	123	110	117	71	69	69	766
記載なし(学校数)	35	33	4	19	30	21	12	14	14	182
計	136	135	8	142	140	138	83	83	83	948

(2) 児童生徒の言動や行動について、「気になる」「問題だ」と思われる行動
 に対し必要だと考える対応

①小学校5年生

大分類	中分類	小分類
I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）		
1 トラブルや問題を起こしやすい		
<p>a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 相手を思いやる心やマナーなどの必要性について話したり、自分がかもし同じようなことになった時の気持ちを考えさせたりして対応している。 ・ 友達関係の充実と、さらに、学級内での存在が認められる状況を作っていくこと。 ・ 家庭内の問題もありそこには入っていけず、学級内に居場所が作れるようにしてきた。なかなか周りの子ども達への働きかけができていないし、難しいと感じている。 ・ 本人や友達の話をよく聞き、トラブルの原因や、それを取り除くための方策を探った。問題行動のある児童の深層心理を知ることは、様々な要因があって難しいと感じた。 ・ 双方から相手について感じていることをよく聞き、トラブルの背景をとらえる。また、日頃からよく観察し、些細なことから大きなトラブルへと発展しないように細かな指導をする。家庭への連絡も行い、協力と理解を得られるよう努める。 ・ TVの影響や親兄弟が使うからといったケースが多い。相手を傷つけたり、もめ事に発展することを考えず使うことがよく見られる。事あるごとに他の児童にも意見を求めるなど、全体の問題として取り上げ考えさせること。教師が共通理解のもとに指導をくり返し行うことなどが大切ではないかと考える。 <p>b 感情のコントロールができない、衝動性が高い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その子の良さを認め、誉め、そこを伸ばしてあげること。上記のようになった時は、よく話を聞いてあげ、一方的に指示を出さないことが大切だと思う。 ・ 暖かい学級づくりを、学級指導でも学習指導でも行うよう努める。 ・ 心情面や家庭的な面で問題はないかを考え、集団の中での節度ある生活について理解させていく。対話を大切にし、信頼関係を良い方向に保つようにする。 ・ 担任はもちろんだが、学年、学校全体で「だめなものだめ」ということをしっかり子どもに伝えることが大切だと思う。 ・ 家庭環境、友人関係、学業面など児童の様子を把握すること、家庭と連絡をとること、自己肯定感が高まるような働きかけに努めることなど、周りの先生方と連携を図りながら対応したい。 ・ 学校だけでは対応しきれない問題も多々ある。家庭や専門機関との連携が大切だと考えている。 ・ 校内で話し合いを持ち、児童へ共通の対応を取るようにする他、安全面を考えできるだけ支援員等の先生にも見てもらえるようにする。 ・ 毅然とした対応と、相手の痛みや悲しみに気付かせる指導。自分を客観的に見ることができるようにならなければならない。 <p>c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 誰にでも良いところがあると気付かせ、嫌な人とで関わったり、やり過ぎたりすることを教えていく。 ・ 家庭との連絡をとることや児童の学校での頑張りを伝えること。 ・ 児童自身に長所を話しかけること、伸ばすこと。 ・ どうすべきか、その子自身に具体的に教えていくことと、周囲の子ども達へその子を理解していくことの働きかけ。 ・ 家庭内の問題もありそこには入っていけず、学級内に居場所が作れるようにしてきた。なかなか周りの子ども達への働きかけができていないし、難しいと感じている。 ・ 事実を確実に把握し、本人、保護者と情報交換し、共通理解を図っていくこと。 ・ 教師の思いを前提として、集団の中の一員であることを自覚させていく。そのために学級作りに力を注ぐ。学級で取り組んだ行事、イベント等で達成感、成就感を持たせていく。 ・ 先のことを考えて話すこと。集団生活の場として周りの人との関わりを意識させること。 ・ 話を聞くことの大切さに気づかせる指導が必要。 ・ 将来のことなど見通しを持たせながら、今自分がどうすべきか判断できるように指導しています。（また、一度失った信頼関係は、取り戻すのが大変だということも伝えるようにしています。） ・ 相手がどんな気持ちか、なぜそのようにしたのか、どうしたら良かったのかを話し合い気付かせる。 ・ そういった行動をとっている子に、自分の良さを感じ取らせ、自分も大切だし相手も大切なのだ、という気持ちを持たせること。また、自分のとった行動がどういうことを引き起こすのか想像させること。 		

大分類	中分類	小分類
	2	<p>他者との関係づくりができない</p> <p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常に他者との関わりの中で生きているということを実感させる指導が必要だと思う。 ・様々な体験（他者と関わり合いながら）と成功体験を積み重ねていく。ソーシャルスキルトレーニング。 <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語的な部分のみでなく、道徳や特活などでのエクササイズを取り入れていく指導が必要。 ・原因は、幼児期のネグレスト（育児放棄）に問題があり、改善のためには家庭を中心としたケアが必要である。学校としては、教科の遅れの対応や集団の中での役割を明確にし、自己有用感を得られるよう対応していかななくてははいけない。 ・人と関わることの楽しさを味わわせる。 <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・努めて話しかけ、信頼関係を築く。 ・学級内での居場所があるようにする。 ・家庭やその子と関わりがある人から情報を得て対応するようにする。 ・よく観察し、変化を見逃さないようにする。 ・対話を多くしたり、様子を見たり、周りの子供達に聞くなどして、事実を把握し対応する。 ・全面的にその子を受け入れて、話を聞く。解決方法を見つけてあげてバックアップする。 ・保護者と連携をし、対処方法を養護教諭や他の先生に相談している。 ・SST、カウンセリング、クラス内の人間関係の改善。 ・子どもと一緒に活動することが第一だと思います。
II 学校生活への適応に関すること		
		<p>g 状況への順応性が低い（興味・関心の狭さ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆっくりと話を聞き、子どもの頭の中を整理してあげる。又は、まったく違う話題にし、気持ちを切りかえさせる。 ・相手意識を高めMAP、PA等の積極的活用。家庭への協力を求める。 ・現在、カウンセラーの先生と情報交換をしながら、今後保護者も交えながら相談していく予定である。 ・スモールステップの指導体制を組み、自信を持たせられるようにする。その都度声がけをする。 ・最低1回は生徒指導の情報交換の場を設け、全職員で共通理解を図る。生徒指導主任を中心に同一歩調を取って全職員で対応にあたる。 ・声掛けや励ましをその時その時で見極めなければならない。 ・児童の気持ちや考えをきちんと聞き、周囲の友達と話し合いながら対応する必要がある。 <p>h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ等小集団での体験活動、規則の尊重等の道徳的価値に気付かせる取り組み。 ・この状況に対しての対応としては、やはり、病的なものに対しては治療的・・・な対応になると思うが、今の学校の状況（教育界全体という意味）では、忙しすぎて（毎日みんなで何時間も過剰勤務していて限界）対応不可。なので、何とかしたいので、子供の成長を待ちたいと思っている。 ・「このような時は、このような行動をしなければならない」ということを、折に触れ学ばせる必要がある。特に友人に対しての接し方など、「伝える力」「受け止める力」において経験の不足を感じることが多い。成功体験でも失敗体験でも、行動から学ぶことを意識させることが大切と考える。 <p>i 基本的な生活習慣が身につけていない</p> <p>j 学力、学習面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週に1回漢字小テストを実施し、それに向け家庭学習を継続させる。点数が上がれば自分自身の伸びを実感し、さらに意欲を高め取り組む。そうすることで、まず、自分で学習する習慣を身につけさせ、基礎基本を定着させる。目に見える形で自分の伸びを実感させることが大切だと思う。 ・授業中の担任以外の教員によるケアが必要。 ・予定の半分は、放課後に個別指導をしている児童もいます。 ・お金がからんでくることであり、どう接して対応していけば良いのか・・・
III 登校に関すること		
		<p>k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童との信頼関係の構築と、思いを表現させるための働きかけが必要だと思う。 ・家庭との連携、情報交換、職員全員の共通理解。 ・上記の件に関しては、家庭での生活習慣が確立していなかったことが大きく、本人はもとより家庭への働きかけが必要であった。 ・学校ではなく家庭に問題があるようだが、第三者の影響もあるようなので、なかなか学校側の思い通りにはいかない。

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> ・個々に応じた関わり、対応をし続けていくことが重要だと思われ、また、それは迅速で適切な状況把握があった上でのものだと思います。 ・子どもの背景を考えた声掛け、学校が居場所があることを実感できる学級、学年経営をする。 ・家庭、関係機関との連携。 ・毎日の声掛け、家庭の協力が必要だと思う。家庭に問題がある場合は、スクールカウンセラーなどの他の機関との連携が必要である。 ・学校が子どもにとっての居場所になるようにするとともに、登校の形態もいろいろあることを伝え、安心して登校できる環境をつくること。
IV 情緒・心理・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		
		<p>l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小さいうちから、たくさんほめたり、何かをやり遂げたという達成感を持たせたりする。 ・教師の励まし、声掛け、家庭と連携した指導、適切で自分に合った目標の設定。満足感、充実感を持たせる声掛け。 ・保護者の児童に対する関心のなさが家庭の教育力の低さにあると思う。保護者への啓蒙が大切だと思う。 ・自分で決定するという機会を多くした学習、生活指導。 ・いけないことはきちんと叱る。よい行動は誉めて学級に紹介し、自信を持たせていきたい。 ・家庭との相談。医師との連携。 <p>m 落ち着きがない、集中力がない 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門機関との連携が必要。 ・集中して楽しいと思う授業の組み立てと、その子の持っている良さを伸ばす声掛けを根気よくしていく。 ・教室内の環境整備、教師の声掛け。 ・心理検査を実施し、特別な支援が必要かどうか判断する。他機関との連携。 ・一対一対応で、声掛けをする。 ・できること、できるようになったことは大いに認めてあげる。 ・どのような友達に対してでも、相手の存在を否定したり、バカにしたりする言動は、個でも全体でも「いけないことである」としっかり伝えていかなければならない。 ・どんな言動にも理由があるので、その背景についてじっくりと話を聞いてあげること。 ・あまりにひどい時は、家庭と連絡を取って改善を目指します。 ・学校（教師）と親が連携していくことが必要だと思う。 <p>n 精神症状、精神的に不安定な行動等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・専門医への相談と家庭との連携で対応し、見えなくなった。
V 家庭生活に関すること		
		<p>o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携が必要と感じている。 ・より一層、家庭と連携を取っていく必要を感じる。 ・話し合おうと試みるが、どこまで踏み込むかなどで躊躇してしまうこともある。より多く連携していきたいと思う。 ・担任として、親と子への啓蒙、レポートづくり。相談できる関係づくり。第三機関との連携。
VI 反抗的な態度、言動、反社会的な行動		
		<p>p 反抗的な態度、言動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話を聞く、共感する。いいところを見つける。励まし続ける。 <p>q 反社会的な行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事実を把握すること。 ・じっくり時間をかけて話を聞く（親からも）
VII その他		
		<ul style="list-style-type: none"> ・「気になる」「問題だ」「人として反している」「人に迷惑をかける」という言葉の捉え方でも大きく違うと思うが、「悩みを持っていそうだ」からよく話すこと。（わざと反抗するか、必ず合図を出しているのか、何でも話しやすい雰囲気を作ることが大切。 ・少人数の学級、単級の学年では、児童の人間関係（友人関係）が固定化したり、力関係が明確になったりして、教師の指導や支援が行き届かないことがある。また、子ども達の間関係や悩みに対して、親（家庭）が必要以上に入り込み、子ども達同士で解決しなければならないことが、さらに深刻化することが問題である。 ・精神的、あるいは身体的に特別支援が必要なレベルの児童であっても、積極的にwiscを受験させるとか、医療機関を受診するよう進めるとかの手立てが、学校の雰囲気づくりや親の理解不足で難しい。 ・子どもが本心話をしてくれるようになるまでの信頼関係づくりは重要かつ難しい。 ・インターネットを使用する時間が長くなっている児童がいる。今は学校のことをある程度優先させているが、今後、学年が上がるにつれて、親の目の届かないところでも、インターネットなどで、色々なサイトを見たり、書き込んだりするのではないかなと思う。

②小学校6年生

大分類 | 中分類 | 小分類

I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）

1 トラブルや問題を起こしやすい

a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある

- ・ お互いが思っていることを知らせたり、いじめの恐ろしさを伝えたりしていくことが大事。そして、お互いに大事にし合おうという意識を育てていきたい。
- ・ 授業中に集中するような教材や手立てを考える。個別に話をし、気になることがあるかどうか聞いてみる。して良いこと、悪いことを考えさせる。家庭と連絡を取り合う。
- ・ 日常的に、適時適切に指導を続けていく。そのためにも、日頃からアンテナを高くし、観察を続ける（予防）。
- ・ 教師と児童の望ましい人間関係の構築が大前提で、何か問題が生じても対応しやすい。
- ・ 問題行動の背景にある要因を考えたり、認めてあげる良さを見つけて誉める努力をする。
- ・ 改善を図れるよう働きかけているが、長い間の関係に入り、意識を変えていく難しさがあった。
- ・ 決まりに対する考えや行動。
- ・ 本人の良さに気付かせ、社会に適應する方向で頑張る意欲を喚起する。
- ・ その児童の表面の行動に惑わされず、内面の心の動きを理解しようとする。
- ・ 家庭と連携しながら指導を進めていく。

b 感情のコントロールができない、衝動性が高い

- ・ その行動の要因として、家庭環境が大きかったので、家庭との連絡を密に取り、問題の行動だけでなく、良くなかったところや頑張っているところなども伝え、なるべく誉めてもらえるようにした。また、その児童の対応に追われると、他の児童の指導が十分にできなくなるため、学校全体の問題として他の先生方にも協力をいただきながら対応した。さらにクラスでは、他の児童に話をし居場所作りに努めた。
- ・ 学校だけでは対応しきれない問題も多々ある。家庭や専門機関との連携が大切だと考えている。
- ・ 本人の居場所づくり（得意な面をアピール、仲良しの友人から交友関係を広げる。仕事を頼みやってくれたら“ありがとう”と伝えるなど）
- ・ 暴力で問題は解決しないことを指導。
- ・ 保護者との面談で協力し合う。
- ・ カウンセラーに相談する。
- ・ どのような状況でパニックになるのか把握し、その子が落ち着いて生活できる環境を整える。
- ・ 問題行動の原因がはっきりしているのか、家庭や医療機関との連携を密にし、校内での対応の仕方を確立してきた。基本的には、パニック状態にあるときは1人にさせ、冷却時間を設けること。落ち着いて話せるようになってからその時の思いを聞いてあげ、同様のことが起きた際の対処の仕方を具体的にアドバイスすることを心がけている。周りの児童には、人は様々な個性をもっており、受け入れていくことが大切であることの指導を入れている。
- ・ 家庭との連携（ゲームのやりすぎ等、生活習慣の乱れを改善するよう働きかける）
- ・ 授業中に集中するような教材や手立てを考える。個別に話をし、気になることがあるかどうか聞いてみる。して良いこと、悪いことを考えさせる。家庭と連絡を取り合う。
- ・ 原因がどこにあるのか探ること。家庭にあるのか、学校にあるのか、交友関係にあるのか、あるいは、複合的な要因なのか、それをできるだけ突き止めることが必要だと思う。
- ・ 関係機関との連携を図りながら、その子の心の中を探る必要があると思う。また必要に応じて生育環境も聞く必要があると思う。
- ・ 家庭と連絡を取り合い、学校での状況を伝えつつ、保護者の支えとなるような対応。関係機関の紹介。
- ・ その背景にある本人の心情を聞いてやる必要がある。保護者と連絡を取りながら、協力して対応していくことが大切だと思う。

c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない

- ・ まずは受け止めてから、こちらの思いを伝える。受け止めていないと感じることが、よりひどい行動を引き起こすことになりかねない。
- ・ 当然教師が“絶対的な力”を身につけるべく努力すべきだが、教育は子どもに関わる全ての大人によって行われるべきもの。学校と親がともに高め合い、一つの方向を目指して子どもに当たるべきだと思う。
- ・ 自律・自立したクラスを作っていくとともに、家庭との考え方のすり合わせを続けていくこと。
- ・ 事実を把握すること、家庭との連絡を取る。問題行動だけでなく、信頼関係を築くためにも、児童の良さを、頑張り伝えること。児童自身に働きかけ、良さを認め励ます事などが必要と思いがけ指導しています。
- ・ 学校だけでは対応しきれない問題も多々ある。家庭や専門機関との連携が大切だと考えている。
- ・ 児童に対して、温かい言葉や態度で意識的に接する。人の優しさ、温かさを感じ取らせる。
- ・ そもそも虐待を受けた過去があり、成育歴の中で、母子関係が十分ではなかったなどがあることから、自己肯定感を養うことが重要であると思います。ただ、大人がそうであっても、子ども同士の関わりの中で、大人のような対応が難しいことから、3歩進んで3歩戻るといった感じである。また、要対協が十分機能し始めれば、やや改善も見込まれるが現状では難しい。
- ・ 自分のことだけでなく、他のことも考えながら行動できるよう声かけ、指導が必要。特に子どもとのラポートをいろいろな場面で取りながら、つながりを強化していく。問題が起きた時だけでなく、普段からつながりを持っていくことが大切。

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> 許容範囲はその児童によって変わりますが、上記の行動は絶対に許されない姿勢を示すべきと考えます。 子ども達は大人の態度を見ているので、生活指導や学習ルールを身につけさせるために、全校一丸となって、同じ方向に向けて指導しなければならない。何でもありを黙認することで、秩序が乱れる。クラス内で一度崩れると、次年度、新しい担任が立て直すことはとても大変である。 授業中に集中するような教材や手立てを考える。個別に話をし、気になることがあるかどうか聞いてみる。して良いこと、悪いことを考えさせる。家庭と連絡を取り合う。 暴力的な行為を行っている人だけではなく、それを見過ごしていることも同じように問題なのだというのを、その都度、その場で指摘し、教えていかなければならないと思う。友達の困り感を共有できるような問い掛けをその都度行っていく。児童の気づきを促す取り組みを重ねていく。 日常的に、適時適切に指導を続けていく。そのためにも、日頃からアンテナを高くし、観察を続ける（予防） 教師と児童の望ましい人間関係の構築が大前提で、何か問題が生じても対応しやすい。 家庭及び学校や地域など様々な社会生活の場で、とるべき行動について児童に考えさせる機会を積極的に設けるようにする。子どもは時に過ちや失敗をする。よって、その都度、その失敗の原因や背景を把握し、児童にしっかり受け止めさせていくことが必要である。失敗を次の礎として生かせるような対応の仕方を常に考えていかなければならないと思う。 相手や周囲の立場について考えさせる。いけないことは、はっきりと指導する。
	<p>2 他者との関係づくりができない</p>	<p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> 基本的にどんな対応が必要か、児童との会話を多くし、児童理解に努めること。保護者との関わり、連携を密にする。 家庭・地域・学校でも子どもの話に耳を傾け、学級においては、みんなが思っていることを自由に話せるクラス作りをする。 周りの友達に聞いたり、本人に聞いたり、家に確認したり、子ども達とコミュニケーションを図りながら、普段からアンテナを高くしておくことが大切だと思う。 <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> 状況や周りの友達がどんな気持ちでいるかを、その都度、本人に伝えて改善していけるようにする。学校での様子を家庭にも知らせ共通理解を図る。ソーシャルスキルトレーニングを行う。 それに対しては、集団生活の中で必要なこと、例えばルールやマナーを教え、お互いに気持ちよく生活できる術を体得させることが大切だと思います。 日常的に、適時適切に指導を続けていく。そのためにも、日頃からアンテナを高くし、観察を続ける（予防） 教師と児童の望ましい人間関係の構築が大前提で、何か問題が生じても対応しやすい。 教師と話す時、相手を見て話すことが自分の意思を伝えるのに大切であることをくり返し指導することが必要だと思う。 <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p> <ul style="list-style-type: none"> 密接な友達を作ってあげられるよう周りの児童に働きかけたが、かえって迷惑がるか、逆効果になる。本人が進んで心を開くことができるような手立て（具体的には分からない）が必要だろう。クラスエンカウンターが有効か。 本人の指導に加えて、周りの子どもたちがその子を認めるような雰囲気をつくり、その子たちに協力してもらいながら対応する。 児童理解（家庭環境・友人関係等）に努め、積極的に児童に関わる。 クラス内で、協力や人と関わること（MAP）的な活動を積極的に取り入れていく。 対話を多くし、様子を見たり、周りの子供たちに聞くなど事実を把握し、問題によっては校長・教頭・生徒指導の先生と相談し、対応にあたる。 クラス全員で遊ぶ日を決めて実行したり、帰りの会でその子の良い行いなど発表して、みんなに分かってもらう。 周りの友達に聞いたり、本人に聞いたり、家に確認したり、子ども達とコミュニケーションを図りながら、普段からアンテナを高くしておくことが大切だと思う。 周囲が声掛けをする。 家庭や他教員との連携。
<p>II 学校生活への適応に関すること</p>		<p>g 状況への順応性が低い（興味・関心の狭さ）</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達に対し、自分の主張を通そうとする。 本人を理解しつつ、他の児童にも理解を求め、保護者とも連携を図り、指導していく。 全体の流れを壊さず、且つ、その子の気持ちを折らないように、注意したり、励ましたり、その子のペースでの学習を保障することが、とても大変だと感じている。 スモールステップの指導体制を組み、自信を持たせられるようにする。その都度声かけをする。 最低1回は生徒指導の情報交換の場を設け、全職員で共通理解を図る。生徒指導主任を中心に、同一歩調をとりながら、全職員で対応にあたる。 まずは、落ち着かせる。落ち着くと、表情も柔らかくなる。それから話して聞かせる。 日常的に、適時適切に指導を続けていく。そのためにも、日頃からアンテナを高くし、観察を続ける（予防） 教師と児童の望ましい人間関係の構築が大前提で、何か問題が生じても対応しやすい。

大分類	中分類	小分類
		<p>h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とにかくルールが守れないとみんなが困ることをその都度指導。守れたら認める。 <p>i 基本的な生活習慣が身につけていない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早寝・早起き・朝ごはんの推進 ・学級担任としては「何となく変だ」と感じることから、生徒指導上の対応として、まず、子どもと遊ぶこと、話を聞くことが基本になると思う。小さなことでも、その子のよさを見つけ誉めること、そして、いつも見ているというサインを送り続けることが大切だと思う。 ・家庭との連絡、交換日記、面接、友人からの情報収集など。 ・担任等の声がけも必要だが、学校での専門家等の説明もあると効果的なのでは。 ・基本的にどんな対応が必要か、児童との会話を多くし、児童理解に努めること。保護者との関わり、連携を密にする。 ・家庭での金額の把握や持ち物の管理、見守りが必要である。 ・インターネットやゲームの使用法に関する約束が必要である。 ・小さい時から、自分の欲求が通らない時もある。少しガマンをするということを経験させなければならぬ。 ・生活リズムの乱れが学習や日常生活、心の発達、ひいては将来に及ぼす影響が大きいということ、折に触れて児童及び家庭に伝えながら、家庭と連携をとりながらよりよい生活リズムを徹底させていくことが必要だと思う。また、生活リズムの乱れが不登校へとつながる恐れもあるという認識をもち、特に、土日や長期休業時などの様子に十分に目を配っていかなければならないと考える。 ・子どもは往々にして、テレビ等の影響を受けやすい。自分で十分に考えず安易に言葉を選んでしまい、周囲との関係を悪くしてしまったり礼儀に欠いた行動をとってしまったりすることがある。学校だけでなく、家庭や友達間においても、どのような言葉を用いているかを把握しながら、言葉の重みを感じ取らせるための指導を心がけていく必要があると思う。 <p>j 学力、学習面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・失敗は次へのステップだと感じるようにアドバイスする。 ・やればできることを児童にも実感できるように、授業での個人指導や放課後の指導を行う。また、児童の取り組みや頑張りを認め、意欲の継続化を図る。その根底には、児童理解と児童との信頼関係が必要。 ・課題を明確にしたり、時間を区切ったりし、意欲を持たせる。 ・基本的にどんな対応が必要か、児童との会話を多くし、児童理解に努めること。保護者との関わり、連携を密にする。
III	登校に関すること	
		<p>k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対応としては、家庭での生活習慣の見直しと、学校でのお互いに認め合えるようなクラス作りをしていかなければならないと思う。しかし、生活習慣については、祖父との2人暮らしのためなかなか困難である。 ・学校とのつながりを保つこと。家庭と連携を取る。補習授業など学習面での配慮。先生方や友人との関わりをつくること。 ・家庭へ連絡を取り、家庭での状況を把握する。 ・友人関係の持たせ方を話し合い等で解決する。 ・関連機関との連携により対応していく。 ・家庭の協力を得られないことが大きな壁である。 ・スクールカウンセラーや子どもセンター、訪問指導などを含め、今取り組んでいるところ。今後も引きこもりにならないように、家族以外の人とのふれあう場を設けること。保護者の意識改革、学校とのつながりが絶たれないう家庭訪問や電話連絡を継続するなどの対応をしていく。
IV	情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること	<p>l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長所を伸ばし認めてあげること。 ・その子の成果を認めたり、お互いの良さを認め合ったりする活動を継続していくことで、マイナスをプラスに変えていくようにしています。 ・対応の第一歩は、どんな時にも「何が彼（彼女）をそうさせているか」と考えることだと思う。つまり原因を探ることだと思います。 ・行事等を通して自信を持たせるような活動に取り組ませている。 ・個別に声がけする。 ・児童が自分の思いが話せるような環境（保護者、カウンセラー、養護教諭、担任など）をつくること。 ・家庭的な問題もあるので、家庭とも連絡を取ったり、その子のよい所を誉めて、認めてやるようにしている。 ・対応としては、受容されているメッセージを送り続けることと同時に、家庭との連携が不可欠。家庭とのレポートには時間をかけることが最大の基本であると思う。

大分類	中分類	小分類
		<p>m 落ち着きがない、集中力がない 等</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業中に集中するような教材や手立てを考える。個別に話をし、気になることがあるかどうか聞いてみる。して良いこと、悪いことを考えさせる。家庭と連絡を取り合う。 子どもの気持ちを分かちあげたり、原因を追及したり、話を聞くよう努めている。 改善を図れるよう働きかけているが、長い間の関係に入り、意識を変えていく難しさがあつた。 <p>n 精神症状、精神的に不安定な行動等</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校だけでは対応しきれない問題も多々ある。家庭や専門機関との連携が大切だと考えている。
V 家庭生活に関すること		
		<p>o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭とのコンタクトを密接にし、子どもの不安、親の不安について話し合い、改善に努めることが大事だと感じる。学校、保護者間で解決が困難な場合は、関係諸機関との連携を図っていく必要がある。 家庭との連絡を深め、地域の協力を得る。 学校としてできることは、家庭に子どもの様子をしっかりと伝え、よりよい方向を一緒に考えていくことが大切である。また、その子の教室での居場所もしっかり確保してあげることも大切である。ただ、親への対応は、とつても難しいです。 児童相談所と連携している。 不衛生（サイズの合わない、異性のお下がり・デザイン等）な着衣を親に話した時、「本人が着たいのだからこれでいい。」と言われた時。保護者に理解してもらうことの難しさを感じた。 親と連絡を取りながら、本人には担任がいつも見守っているということを、いろいろな形で伝え対応する。 家庭に連絡を取って、様子を見ながら話してきた。 機会を見つけて、父親とも話し合う必要があると思われる。 子どもだけでなく、家庭の両親も含めてカウンセリング等の教育相談を実施する必要があるあつた。 スクールカウンセラー等との連携を通して、児童の心のケアが必要であると考え。また、保護者との連絡を密に取り、対応することも大切であると考え。 家庭との連絡を密に取り、保護者への啓蒙が大切であると考え。児童に対しては、家庭との関わりをできるだけ多くしていくことで、自分の居場所を保証していくことが必要であると考え。 生活習慣等の指導を学校でなるべく（できる範囲内で）行い、保護者との良い関わりを持ち、子どもに目をかけるように親へも指導していく。 先生方との共通理解、共通行動。 電話等で連絡を取り、親を孤立させないこと。 どこまで事情を聞いていいのか、どう励ましたり、対処したりすればいいのか悩むことがありました。この時は、周りの先生に相談したり、職員室内で話題にしたりしました。保護者が担任等に相談しないと、踏み込んで聞けないことがあります。 注意して見守り、関わり、家庭とより密な連絡を取って状況を理解できればと思っている。 児童本人から家庭での様子を聞くこともできるが、不利な事実に関しては曖昧で、家庭での様子をうかがい知ることができない。
VI 反抗的な態度、言動、反社会的な行動		
		<p>p 反抗的な態度、言動</p> <p>q 反社会的な行動</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの気持ち（理由）を知ろうと努力すること、やっつてはいけない行為だと気づかせ、理解させること。家庭と連携をとり指導すること。 事実を把握すること、家庭との連絡を取る。問題行動だけでなく、信頼関係を築くためにも、児童の良さを、頑張り伝えること。児童自身に働きかけ、良さを認め励ます事などが必要と思ひ心がけ指導しています。 家庭と連絡を取り合い、学校での状況を伝えつつ、保護者の支えとなるような対応。関係機関の紹介。 家庭との連携。 担任だけが対応するのではなく、生徒指導担当を中心に、学年・教頭・校長・教務で対策会議を開き対応する。問題行動によっては、保護者、児童とも話し合いをしていく。
VII その他		
		<ul style="list-style-type: none"> その都度声がけしたり、指導したりすることはありますが、特別な対応をする必要はないと考えています。 事実関係を正確に把握し、家庭と情報交換しながら、同一歩調で児童へ対応していくこと。 恵まれない家庭環境の中で、自己肯定感を持たせること。 教師と児童の望ましい人間関係の構築が大前提で、何か問題が生じても対応しやすい。 保健室の利用が必要かどうかを見極めるために、体の様子や状況を聞く。 対応としては、受容されているメッセージを送り続けることと同時に、家庭との連携が不可欠。家庭とのラポートには時間をかけることが最大の基本であると考え。 傾聴と将来の見据えた今後の生き方、あり方を話し合っていくこと。

大分類	中分類	小分類
I	対人関係に関すること	<p data-bbox="226 286 619 309">1 トラブルや問題を起こしやすい</p> <p data-bbox="306 318 1008 340">a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある</p> <ul data-bbox="363 340 1445 990" style="list-style-type: none"> ・ 強行的な姿勢ではなく、生徒の心境に配慮した対応 ・ 家庭との連携と未然防止に努める ・ 如何なる場合においても、生徒理解から出発し、家庭や諸機関と連携した指導体制をとる。 ・ 正しいモデルを示してあげること、暴力に向かってしまう本人のイライラや自己肯定感の低さを受容しながら、自己コントロールを高めていくことが必要。 ・ 常に該当する生徒と接点を持つておくことが大切 ・ 弱い立場の生徒はいつも同じで、その雰囲気を変えるのが難しい。 ・ 話を通じる人を介して、そのような態度を戒めるようにさせる ・ 他者を重んじるような道徳教育。日頃から気を配り、あたたかく接する。 ・ 集団の結びつきを強め、規律正しい雰囲気を作る ・ 生育歴や家庭環境など学校側だけではふみこめない背景・要因もあり、対応は難しい面が多々ある。教師として愛情深く指導にあたりたいと思っているが、時にうまく伝わらなかったり、逆にうとんじられることもある。 ・ 個によって感じ方・受け取り方も様々なので、校内や学年間で情報を密にし、話し合いながら、個に応じた指導を進めていきたい。 ・ 現場で一つ一つ見逃すことなく教師が教えていく。根気強く指導する。ただし、マスメディアのモラル低下も大きな要因であり、生徒と教師の間で改善しきれないケースも多いと考える。 ・ 保護者の協力を得る、時間をおかずに対応する ・ 勇気と情熱を持って向き合い、親身になって対話と行動をする ・ その時をとらえて指導。個別にじっくり。学年集会で全体に投げかけ、家庭連絡、共同で声かけ。 ・ 壊れた所は本人に直させる ・ 日頃から親身に相談に乗るようにする。問題行動の背景を知る。 <p data-bbox="306 1012 880 1034">b 感情のコントロールができない、衝動性が高い</p> <ul data-bbox="363 1034 1445 1550" style="list-style-type: none"> ・ 周囲の生徒に聞いてみたり、必要な場合は家庭と連絡を取り合ったりする ・ ちょっとした子どもの変化に敏感でいることが必要なのではないかと考え子どもと接するようになっている ・ 教師数名でとりおさえて個室でなだめる。 ・ 人によって態度を変え接する。相手によっては高圧的な態度で接することもある。 ・ 問題行動を起こしそうな子、起こしてしまった子が落ち着ける場所を確保すること、気持ちを伝えあえる関係作り、子どもに対する情報収集と職員間の連携による対応。保護者を含めて子どもに対する方針（悩みの理解と方向性）が必要。 ・ 対話をする ・ 部活・家庭内でのことなど原因となりそうなことがないか、顧問に聞いたり、情報を集める。 ・ 普段からレポートをとり、受け止め、良さを認める。良くないことは正面から向き合い、分かりやすく筋を通し伝える。 ・ 将来の夢を持たせ、それに向かう努力の必要性、具体的な手だてを教える。収入が多い職種を考えさせるのではなく、夢や希望の先に仕事があるという将来像を考えさせたい。 ・ 校内で生徒指導の話し合いの上、対応を柔軟かつ適切に行う ・ だめなことには毅然として対応し、行動は許さず、背景となっている心根には温かく寄り添い関わる ・ 勇気と情熱を持って向き合い、親身になって対話と行動をする <p data-bbox="306 1572 1104 1594">c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない</p> <ul data-bbox="363 1594 1445 1989" style="list-style-type: none"> ・ 如何なる場合においても、生徒理解から出発し、家庭や諸機関と連携した指導体制をとる。 ・ 道徳や学活の時間の指導。小さな出来事でチャンスを見つけじっくり話す機会を作る。 ・ 対象生徒が理解出来る言葉や態度でその都度説諭する ・ 本当のことをしっかり把握し、それについて生徒とともに考えていく。嘘をつくより本当のことを言った方がいいと認識させる ・ 自分のせいで他の人が困っている場面に気づかせる声かけをして考えさせる ・ 道徳や保健の授業、普段の生活の中で生命の大切さを教える ・ 本人の言葉を受け入れることが大切だと思うが、保護者の協力を仰ぎながら医療機関との連携を図る ・ 「悪いものは悪い」とはっきり教え指導する。その場面を逃さず指導する。時間をかけてでも児童生徒に自分の言動を考えさせ責任をとらせる。 ・ 学年のチームワークで乗り切るなど一人で抱えこまない ・ 場面、場面で、人に対して嫌がること等言った時に、いけないことだと諭す。 ・ 生徒集団の理解（実態とその背景）

大分類	中分類	小分類
	2	<p>他者との関係づくりができない</p> <p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> 原因を明らかにすることに力を入れ、道徳的な側面から指導することを意識し、人間関係の再構築を心掛けている。 自分の行動・言動に対し、心を落ち着かせ、振りかえさせるようにする。保護者にも連絡し、対応を双方で検討・話し合いをする。 幼少の頃からの育てが大切。また、家庭とともに育てていきたいと考えているが、保護者も様々な方がいるので、難しいことが多々見られる。 生徒の心の声、思っていることを全て聞いてあげる 幼少期に人間関係づくりや基本的な生活習慣の指導 小学校時代の人との接し方を把握し、家庭との連携を密にする 本人への指導と、周囲の生徒への理解を求める <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> 人によって態度を変え接する。相手によっては高圧的な態度で接することもある。 根気強く支援していき、道徳や学活などでライフスキルやソーシャルスキルなどを高める取り組みをしていく 発言しやすい雰囲気を作ることや、コミュニケーションの大切さを伝える（行き違いによるトラブルを防ぐ） 自分で正しいと思ったことはためらわずに行動に移すことや、それが周りの勇気にもつながるように活かす 聞く態度になるよう指導を継続して行う 成育過程、家庭環境を十分把握の上接する <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ作り等でさりげなく話のできる級友と一緒にになれるよう配慮したり、休み時間の様子など観察する 学級においての帰属意識を高めるとともに、学習面での配慮も必要 気持ち素直に出させる関係を保つことが大切 学級・学年への所属感を持たせる。多様な生徒を結びつける学級経営の在り方が重要になってくると思う。そのためにも様々な角度から物事を見れる目を養うことが必要。 レポートをとることはもちろんであるが、地域の人々の手助けも必要 校外の関係機関を大いに活用する 全校での取り組み 生育歴や家庭環境など学校側だけでは踏み込めない背景・要因もあり、対応は難しい面が多々ある。教師として愛情深く指導にあたりたいと思っているが、時にうまく伝わらなかつたり、逆にうとんじられることもある。 個によって感じ方・受け取り方も様々なので、校内や学年間で情報を密にし、話し合いながら、個に応じた指導を進めていきたい。 コミュニケーションルールとリレーションの定着を図る学級活動、グループワークやエンカウンターエクササイズを継続していく。 グループ行動などで配慮する 多くの関わりを持つようにする

II 学校生活への適応に関すること

- g 状況への順応性の低さ（興味・関心の狭さ）**
- 周囲の生徒へ理解を求める。場の状況を見れるようにその都度声をかける。
 - 視覚情報を活用する
 - 1つ1つその状況、場面にあった助言・指導をする
 - 担任1人の考えによらず、学年・学校全体で意見を出し合い対応する。また、保護者との協力（理解）のもと行う。
- h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）**
- 期限を守ること、約束を守ることとはもちろんのこと、社会生活を営む上で信用・信頼されることの大切さを踏まえながら対応する。
 - その場その場で助言・指導を与える。また、全体にも朝・帰りの会や授業の中で機会をとらえ指導する。
 - 幼少の頃からの育てが大切。また、家庭とともに育てていきたいと考えているが、保護者も様々な方がいるので、難しいことが多々見られる。
 - 本人への継続した支援、保護者への連絡・協力要請
- i 基本的な生活習慣が身につけていない**
- 保護者への働きかけを根気強くする
- j 学力、学習面**
- 個別の支援（必要だが現状としてはなかなか難しい）
 - 補習や追試などを行い、積極的に学習する状況を作る

大分類	中分類	小分類
Ⅲ 登校に関すること		
	k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等	<ul style="list-style-type: none"> 日々の細かな事でも家庭連絡を行い、困難な事から逃げ出しそうな時でも家庭で話をしてもらうなどして登校させる。 スクールカウンセラーなど専門的な方との連携が不可欠。登校刺激を与えていけない状況（生徒の状態）があることもカウンセラーの先生との面談で知ることが出来る。ただ、学校とのつながりだけは途切れないようにすることが大切。 その生徒が戻る際の周囲の生徒たちの対応が難しい。戻ってこれる雰囲気は大切だが、周りの生徒にとっても負担とならないようにするにはどうすればよいか。 教師とその生徒だけでなく、クラスの仲間や家族との連携も大切にながら関わっていく。 生徒の心に迫るため、臨床心理士への協力要請 その生徒が感じていることを話させることにより、自分でその原因を発見させる 家庭への理解と協力を求める スクールカウンセラーやソーシャルワーカーとも連携して取り組む。（しかし、学校に来ようという動きが今のところ全くないので悩んでいる） 学校からのアプローチには限界があるので、民生委員などの関係機関の協力が必要。 家庭との連絡 その理由や思っていることを聞く。話をする 担任1人の考えによらず、学年・学校全体で意見を出し合い対応する。また、保護者との協力（理解）のもと行う。
Ⅳ 情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		
	l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等	<ul style="list-style-type: none"> 本人との面談（ラポートがとれていることが前提）や保護者との面談をあせらず丁寧に進めていき、生徒の内面を理解する。 必要であれば積極的に公共機関や医療機関と連携をとっていくことが大切。 自己肯定感を高める。成功体験をさせる。 よいところを見つけ、ほめて伸ばす。継続的な声かけ 折りに触れて話をする機会を作り、自己理解や他者理解をすすめる
	m 落ち着きがない、集中力がない 等	<ul style="list-style-type: none"> 強行的な姿勢ではなく、生徒の心境に配慮した対応 個別対応が出来る教員補助をつける 関係機関との連携 席替え時に窓側・壁側にしないなどの配慮をする ADHDの傾向があると感じており、座席や叱り方、出来るだけ良いところをほめるように心がけ実践している。家庭との連絡を密にとる。 声かけを継続 T2の先生が側に付き、T1の先生の指示を説明したり、一緒に学習する 繰り返し本人や保護者と話し合い根気強く向き合う 幼少期に人間関係づくりや基本的な生活習慣の指導 出来る限り注視し、声かけなどを行う。他の先生方からも目をかけ、声をかけてもらう。
	n 精神症状、精神的に不安定な行動等	<ul style="list-style-type: none"> 必要であれば専門家へ協力を要請し、チームで対応するようにする（もちろん家庭との連携が一番大切） なるべく多く話を聞いてあげる時間を取り、見守っているという姿勢を示す
Ⅴ 家庭生活に関すること		
	o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）	<ul style="list-style-type: none"> 家庭での教育力が大切。学校で声かけをしてもなかなか改善されない。 原因を明らかにすることに力を入れ、道徳的な側面から指導することを意識し、人間関係の再構築を心掛けている。 学校と保護者の関係が離れた時に、間に入って話をまとめる機関が早急に必要 正しい大人像や夢のある将来像を持たせる 保護者との話し合いを何度も行っているが、同一歩調で本人に接してもらえないため、改善することは極めて難しい 家庭的な問題が背景にあるので、個人として尊重し受容するような対応が大切。同時に家族とも相談活動をしていかねばならない。 叱咤激励しながら見守られているという感覚を持たせる 社会全体で改善していかなければ学校だけでは抱えきれない それぞれの場面で自己有効感を持たせること、ワークシェアリング等を用いて他者理解の場を作ることで、SCや児相と連携し、本人・家庭との関係を保ち深める 担任だけでなく、主任や生徒指導主事、他機関との連携 担任にはどうすることも出来ない。生徒との関係もあるので、管理職の先生方、委員会に願います。

VI 反抗的な態度、言動、反社会的な行動

p 反抗的な態度、言動

- ・強行的な姿勢ではなく、生徒の心境に配慮した対応
- ・声がけ、見守る、記録しておく
- ・受容、理解からもう一度信頼関係を築く
- ・感情的にならず、冷静にかつ毅然に対応する
- ・折りに触れて話をする機会を作り、自己理解や他者理解をすすめる
- ・幼少時、小学校時のしつけがなっていない場合が多く対応は難しい
- ・保護者との協力を行うべきだが、保護者自身反省をしない事が多いので困難
- ・初期に前の学校を情報交換を密にし、事前に対応する

q 反社会的な行動

- ・如何なる場合においても、生徒理解から出発し、家庭や諸機関と連携した指導体制をとる
- ・レポートをとることはもちろんであるが、地域の人々の手助けも必要
- ・校外の関係機関を大いに活用する
- ・全校での取り組み
- ・生育歴や家庭環境など学校側だけではふみこめない背景・要因もあり、対応は難しい面が多々ある。教師として愛情深く指導にあたりたいと思っているが、時にうまく伝わらなかつたり、逆にうとんじられることもある。
- ・個によって感じ方・受け取り方も様々なので、校内や学年間で情報を密にし、話し合いながら、個に応じた指導を進めていきたい。
- ・ダメなものはダメと一貫性をもった指導や家庭との連携や協力
- ・問題行動があった時だけでなく、いいこともこまめに家庭に知らせることで、家庭からの協力が得やすくなる。

VII その他

- ・声をかけて様子を確認する。
- ・意識して声をかける
- ・早期に声がけを行い、事実を把握し、対応していく
- ・教育相談を行ったり、常に声がけする
- ・「問題だ」「気になる」生徒の要因となるものはやはり“家庭”と思う。保護者との協力や話し合いは低学年ほど大切。
- ・どこまでが精神的なものか、どこまでが怠けなのか判断がしにくい
- ・第1は本人であり、本人の課題・問題に目を向け自分で解決ができるようにアドバイスをすることが成長させるポイントでは。
- ・一番は環境的要因からの問題が多いので、生活に関しての情報をまとめ、背景を考えながら指導していくべき。
- ・声がけ、見守る、記録しておく
- ・スクールカウンセラーとの連携はとても大切。指導的・カウンセリング的アプローチの良い関係を構築することが重要。
- ・学校だけでは限界にきていることも現状としてあるので、外部との連携が必要。
- ・学校での指導、保護者との連絡、特に小さいことでも気づいたことにはその都度指導の手を差し伸べる早期発見・早期対応が重要
- ・「励ます」「叱る」「声をかけ生徒に話させる」「常にこちらが気にかけていることを伝える」
- ・担任のゆとり、学校全体で子どものことをたくさん話し合えるゆとりが大切(現実に担任は40人弱の生徒を抱え日々のゆとりの中で一人一人にじっくり対応出来る余裕がない)
- ・保護者の考えも多様であるため、連携を密にする
- ・本人を理解してあげるよう努めてはいる。しかし、本人に寄り添うべきか、乗り越えるものとして突き放すべきかいつも迷う。
- ・将来の夢を持たせ、それに向かう努力の必要性、具体的な手だてを教える。収入が多い職種を考えさせるのではなく、夢や希望の先に仕事があるという将来像を考えさせたい。
- ・その場その場で助言・指導を与える。また、全体にも朝・帰りの会や授業の中で機会をとらえ指導する。
- ・幼少の頃からの育てが大切。また、家庭とともに育てていきたいと考えているが、保護者も様々な方がいるので、難しいことが多々見られる。
- ・問題行動及び精神的不安定による不登校傾向の問題等は、生育歴を含めた家庭での関わり方の要因が極めて大きい。本人の心の成長を促すためには、校内でチームを組み、保護者の協力や関係諸機関と連携しながら進めていくことが必要である。
- ・それぞれの場面で自己有効感を持たせること、ワークシェアリング等を用いて他者理解の場を作ること、SCや児相と連携し、本人・家庭との関係を保ち深める

④ 中学 2 年生

大分類	中分類	小分類
I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）		
1 トラブルや問題を起こしやすい		
<p>a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある</p> <ul style="list-style-type: none"> 理由を問うよりも、相手がそのことによってどのような気持ちになっているのかを考えさせる必要がある。 その場での指導。家庭に協力を得る。校舎内の巡回を多くするなどして、多くの教員で対応する。 怒る、声をかけるなど。 学校での思いやりある関わりを通して、密な人間関係を築き、心の負担を減らせるような友人を見つけたいと考えます。そのための第一歩として、学級経営がとても重要だと感じています。 愛情を持って接し続ける。 <p>b 感情のコントロールできない、衝動性が高い</p> <ul style="list-style-type: none"> 難しいが、本格的にその生徒の内面から解決していくような対応。 悪いことは悪い、ダメなことはダメだという指導を一貫するとともに、その生徒と多く関わり、その生徒が心を許せる相手になること。 親の理解と協力を得る。 親の協力と養護教諭の協力。 保護者、他教師への報告、連絡、相談。該当生徒とのレポート作り。 大切に思っているということを、言葉や行動で大人が示すこと。 毅然とした対応をとる。 家庭環境が不安定な生徒ほど、問題行動等が多く見られるので、まず、本人の話をよく聞いてやること（二者面談は効果的だった）、家庭との連携を図ること（家庭訪問は効果的だった）が大切で、絶対必要である。 そのような言動や行動の背景にあるものを探り、問題を取り除けるように支援することだと思う。その際、家庭との連絡を密にしながら対応する。また、自分に自信が持てるように支援することも必要であると思う。 <p>c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない</p> <ul style="list-style-type: none"> 関係機関との連携。著しく秩序を乱すものに対しては、出席停止などの毅然とした対応。 場面場面でその都度指導していく。 当事者である教師がそれを教える必要がある。（周りの教師だけではだめだと思う） 学校生活を通して、人との関わりの中で大切なことや言葉の重みについて指導する。（考えさせる機会を持つ） 道徳等で、他者の気持ちを考える場面や、多くの人の考えを聞く場面を多く設けること。 基本的な対応としては、努力を継続する、目立たない地味なことに価値を持ってないことについて、やれることを誉めて、認めてあげることで、価値を持たせ、子ども自身の“存在しているんだ”、“自分は素晴らしい”という思いにつながる指導を心掛けています。 他の立場に立って考えさせる場面の設定をする。 保護者、他教師への報告、連絡、相談。該当生徒とのレポート作り。 繰り返し、その都度言い聞かせやめさせる。 その都度、相手の立場になって考えさせる。生活の中で繰り返し指導する。 生徒との関わりを密にし、成長過程を踏まえた指導を継続して行っていく。 自分のこととして置き換え考えさせる。 学年生活の中で、様々な場面で他人の気持ちを考えさせるという経験が必要なのかと感じています。 思いやりの大切さを伝え続けること。 分かるように話をする。実際にやったことはないが、全体でロールプレイなどをして、気付くように仕向けるのも有効ではないか。場合によっては厳しく対応することも必要だと思います。 道徳、学習等で他者理解や自己理解、また、人の死についても考えさせていかなければいけないのではないかと思います。 		
2 他者との関係づくりができない		
<p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> 周りの生徒に働きかけると同時に、本人の問題をしっかりと指摘してやり、自分でも言動を正すように心掛けさせる。 自分ではどのように考えているのか考えさせたり、言葉で表現させることを繰り返し行うことや、家庭と連携し、協力して継続することが必要かと思う。 本人→「周りに関わることの大切さ、楽しさ」を教え体験させる。周り→「全体での活動の楽しさ、気配り」を呼び掛ける。ことを基本にして対応していく。 自分から行動する必要性を確認させ、実行に移すよう声掛けしている。 それができなくて困っているので、もっと話を聞いてやり、受け入れる必要がある。 		

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 道徳や学活で「友情」について扱ったり、「自己主張」の大切さを指導する。「主張」については、ディベートなどの場を設定し、トレーニングさせるのもよいと思う。 ・ 繰り返し、その場その場で具体的に本人に気付かせ、論していくこと。 ・ 人と関わる場を多く設け、社会性を身に付けさせる。 ・ 社会性をこれまで以上に育てる必要があると思っています。 ・ コミュニケーションをとらざるを得ない場を設定し、経験を積ませる。 ・ 他者との関わり方を学び、身につけさせなければならないと思う。 ・ 本人とよく話し受け止めることが必要。しかし、いつもうまくいくとは限らない。時間が必要な場合もあるし、保護者や周囲の協力が必要な場合もある。 <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人の気持ちの面で引っぱりがあるのではと考え、悩みや考えていることなど聞くようにしている。 ・ 普段から多く触れる様にし、不満があることを見逃さないようにすることが大切。家での不満を口にできずにいる生徒もいるので、書かせたものや雰囲気になっておく必要がある。また、みんながいるところでなく話をすることも必要だと思う。 ・ 他者とのコミュニケーション能力を養う。 ・ カウンセラーやコーディネーターなどの協力、情報交換を密にしていく。 ・ よく関わりを持ち、レポートづくりをやっていくしかないと思うが・・・ ・ 話をじっくりとできる時間と場がほしい。また、多くの人（対応教員）が必要である。 ・ 「障害」と捉えればよいのかどうか、対応が難しい。中学校は3年間で終わってしまうので、将来の見通しをもって保護者と協力していくのが大切だと思う。 ・ 学校での思いやりある関わりを通して、密な人間関係を築き、心の負担を減らせるような友人を見つけたいと考えます。そのための第一歩として、学級経営がとても重要だと感じています。 ・ 積極的に人と関わる機会や、交流の場を設けることで、意識も高まり効果的であると思う。 ・ その都度、本人に望ましい行動を教えてあげること。（例：注意してくれる人が、真剣な顔をしていたら、真剣な顔で聞きます。） <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろと聞いてあげる。 ・ 教師が積極的に声をかけたり、発表させる場をつくってあげるようにしている。 ・ 認めてあげること、受容してあげることが一番大切だと思います。本当は幼い時に、母親に全てを受け入れてもらえるはずが、それをされてこなかったことが原因と考えています。どの生徒も親の対応に問題があると考えられます。 ・ 集団との関わりを多くもつ。 ・ 家庭との連携と、学年間の共通理解。
II 学校生活への適応に関すること		
		<p>g 状況への順応性の低さ（興味・関心の狭さ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校等との情報交換。保護者との共通理解。 ・ その様子を隠すことなく家庭に連絡し、早い段階でカウンセリングや病院等で、きちんと診断してもらうことが大事だと思います。 <p>h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本来、家庭で行わなければならないしつけがなっていないと大変さを感じる。でも、見過ごすことはできないので、社会に出ても対応できるような基本的なことも常に話をしている。 ・ 計画を立てさせ、一つ一つクリアさせる。 <p>i 基本的な生活習慣が身につけていない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者と連絡を密に取り、家庭での状況を把握。 ・ 自分ではどのように考えているのか考えさせたり、言葉で表現させることを繰り返し行うことや、家庭と連携し、協力して継続することが必要かと思う。 <p>j 学力、学習面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ スモールステップで、生徒が先を見据えて取り組める指導の工夫。
III 登校に関すること		
		<p>k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 親との関係づくり（本人が登校する必要性、目標を持っていない。親も放任） ・ 母親のカウンセラー利用はあるが、学校（学年）として、どう対応していったらよいのか判断できなかった。 ・ 段階的な指導で学級に復帰させる。 ・ 生徒、保護者とよく話し合う。（どうしたいのかを知る） ・ 行事などを通して、学級の一員としての自覚を持たせる。 ・ 担任だけでなく、学年のスタッフや生徒指導主事、スクールカウンセラーなど多い人数で対応する。 ・ 本人への気持ちの落ち着きを持たせるようなアプローチ（会話）を増やしながらか関係を保ち、改善に向かっていく。

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校として生徒の成長過程における「今」の段階でできることをしていこうという想いはあるのですが、正直に記しますと、「親」の自分の子どもへの関わりが見られません。こういう状況では、子どもの成長は良い方向に向かないと思います。大変難しいと感じています。学校は努力している！！というつもりではなく、率直な感想です。 ・ 目標を一緒に見据えながら、継続的に励ましたり、学習面でのサポートをしたり、学校に気持ち向きが向いている状態を保った。 ・ 市教委のサポートを活用しながら、学年内で学習支援を分担して行った。また、本人のペースを大切に、選択肢を与えて、自分で選ばせるよう配慮した。 ・ 生徒のわずかな変化を見逃さないこと。 ・ 焦らずじっくりと、保護者と本人としっかりした信頼関係づくりに取り組むことが解決への一歩であると考え。 ・ 根気強く、生徒や家庭との連携を取り続け支援すること。 ・ 登校刺激が途絶えないようにする。 ・ 家庭環境が不安定な生徒ほど、問題行動等が多く見られるので、まず、本人の話をよく聞いてやること（二者面談は効果的だった）、家庭との連携を図ること（家庭訪問は効果的だった）が大切で、絶対必要である。 ・ 登校すれば、スクールカウンセラーへの相談もできるが、家から出なくなると相談することも減るので、家庭訪問できる機関が増えると良い。
IV 情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		
		<p>l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本音なのか、何かの裏返しなのか判断に迷います。前向きな声掛けをし、受容しようとしませんが、時間がかかります。 ・ 頑張ればできた。成果が現れた。という経験を多く積ませること。 <p>m 落ち着きがない、集中力がない 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その都度、今すべきことは何かを考えさせ、行動に移させる。 ・ 授業中は課題に取り組むように声をかけ、休み時間に話を聞いた。 <p>n 精神症状、精神的に不安定な行動等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の心情、背景を知る（話をよく聞く） ・ 真似をする生徒を生まない。 ・ 生徒との信頼関係を築く。 ・ 保護者と連絡を密に取り、家庭での状況を把握。 ・ 医療機関やカウンセラーとの連携。 ・ 症状が出る前に、精神的な不安を取り除く。 ・ 保護者、他教師への報告、連絡、相談。該当生徒とのレポート作り。 ・ カウンセラー、関係機関と連携し対応する。 ・ 本人とよく話し受け止めることが必要。しかし、いつもうまくいくとは限らない。時間が必要な場合もあるし、保護者や周囲の協力が必要な場合もある。 ・ そのような言動や行動の背景にあるものを探り、問題を取り除けるように支援することだと思う。その際、家庭との連絡を密にしながら対応する。また、自分に自信が持てるように支援することも必要であると思う。
V 家庭生活に関すること		
		<p>o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的な例よりも、家庭と学校の協力と、お互いに理解しようとする努力が必要であろう。 ・ よって、子どもにだけ指導するという対応では解決できず、親御さんへの指導が必要と分かりつつ、大変難しいのが現状です。 ・ 学校だけでなく、関係機関、地域での見守りが必要。 ・ 担任や学年だけの対応では不可能な場合には、「外部からのサポートを必要」とすることが必要だと思います。 ・ 家庭環境が生徒の人格形成に多大な影響を与えており、改善していくためには、学校だけでなく、家庭の協力が大切であると考え。また必要に応じては、関係機関の協力も必要であると思う。 ・ そういう場合、生徒本人との信頼関係を築き、本人の意識を高めるのが一番だが、それもかなわないような時、第三者（カウンセラーや外部機関）を通して、指導を進めることも有効な手立ての一つだと思う。 ・ 学校の方針を伝え、理解と協力を求め続けている。話し合う場を設定する。 ・ 面談等で、「お子さんが心配していましたよ。」という形で、保護者に聞いたことを伝える。 ・ 教師が生徒を大切にすること。

VI 反抗的な態度、言動、反社会的な行動

p 反抗的な態度、言動

- ・声をかける。
- ・第三者的な立場の人が諭し指導していく
- ・家庭環境が不安定な生徒ほど、問題行動等が多く見られるので、まず、本人の話をよく聞いてやること（二者面談は効果的だった）、家庭との連携を図ること（家庭訪問は効果的だった）が大切で、絶対必要である。

q 反社会的な行動

- ・衝動に駆られた時に、正しい判断ができるよう、定期的に面談を行い、様子を把握しておく。
- ・問題行動に至った経緯をきちんと理解してやり、説諭すること。
- ・その都度、相手の立場になって考えさせる。生活の中で繰り返し指導する。
- ・なぜ駄目なのかを話すことと、厳しく対応すること。
- ・繰り返し繰り返し、あきらめずに指導する。周りの気持ちを教えてやる。
- ・良いことと悪いことをその都度教えていく。

VII その他

- ・それを感じ取れるよう常に注意して生徒を観察し、気付いたらすぐにその原因を聞くなど、早めの対応が大切だと思います。
- ・生徒の外見への指導と、内面をつかむ指導と、もっと時間をかけたり、家庭との話し合いが必要。
- ・使い方の指導、親に対する指導。
- ・スクールカウンセラーや他機関との連携を密にすることが大切だと考えている。
- ・「周囲への配慮」ということについて考えさせたり、周囲とのコミュニケーションをとらせるような活動（ゲーム等）も取り入れたりした。いずれにしても、保護者にも協力してもらわないと改善は難しいと思うが、そういった生徒の保護者ほど、「無関心」「指導力不足」「怒るだけ」「携帯を持たせる」「PCを自由に使える」等の問題点が見られる傾向にあると思います。
- ・小学校等との情報交換。保護者との共通理解。本人との対話で状況を確認すること。
- ・生徒のわずかな変化を見逃さないこと。
- ・なぜその変化があったかを知る。本人と話す。他の先生にも様子を見てもらう。
- ・保護者と協力して、外に目を向けさせる。
- ・周りから話を聞いたり、いろいろな先生方の話や生徒から情報を集めて、教員全員で考えて対応していくことが必要だと思います。
- ・言葉でのコミュニケーション、読んだり書いたりすることで、感情について考えたり、よりよい行動を考えさせたりしている。
- ・今までそのように生活してきたので、なかなかすぐに改善させるには難しいが、毅然とした態度で、世の中のルールと指導していくべきではないだろうか。
- ・家庭での子どもとの関わりの他に、学校でも素直に自分を表現し、受け入れられていると感じさせるため、多くの教師の関わりや、学級づくりで人を受け入れられる雰囲気を作るなどの対応が必要。
- ・本人とよく話し受け止めることが必要。しかし、いつもうまくいくとは限らない。時間が必要な場合もあるし、保護者や周囲の協力が必要な場合もある。

⑤ 中学 3 年生

大分類	中分類	小分類
I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）		
1 トラブルや問題を起こしやすい		
<p>a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 互いを認めあえる環境作り ・ じっくり話を聞いてあげて、それぞれの問題を少しずつ解決していく ・ 言動は厳しく指導するが、その背景を理解し、内面の成長と行動の一致を図る。 ・ 傷つけられる側も含め聞く姿勢を持つ、そうならないための積極的な生徒指導 ・ やってはいけないことに対して毅然とした対応をする。それと同時に背景を理解する。 ・ その都度話していく。保護者にも伝え協力を得る。 ・ じっくりと話を聞く、その子の良さを認め伸ばす努力 ・ 生徒へ訴え続けること、良いところを認め合う活動を取り入れること ・ 受け入れられている、大切な存在であることを分かってもらえるよう話を聞く、よいところをほめるなどしてレポート作りを行った上で「こうするともっとよい」という形で助言する。 <p>b 感情のコントロールできない、衝動性が高い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ だめなものはだめと注意しながらも、生徒に寄り添う気持ちを忘れないで対応する。 ・ 本人について、家庭と学校の見方を統一して対策を考える ・ 同一歩調で指導を進める ・ 諦めず繰り返して何度も指導する。継続的な声かけと励ましをおこなう。 ・ 生徒とのレポート作りを力を入れ、適切な言動が出来るよう指導する ・ カウンセラーとつなげる ・ 自分の存在価値が認められる学級作りを行う ・ 家庭と学校、また学校の職員間の協力・共通理解が大切 ・ 保護者と話し合う機会を定期的に設定し、同一歩調で生徒に接する。 ・ 生徒の立場を理解しながらアドバイスを行う。 ・ その都度話をしたり、教えたりしながら生徒の中に知識、経験として残るように対応している。 ・ 善悪の判断がしっかりできるように心を育てる。ただそれが難しいと感じる。 <p>c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 相手を思いやる心の育成のために、集団での関わり合いを大切にする授業や活動を多く取り入れる ・ 学校での指導、声かけの継続、保護者に対する声かけ、意識の向上 ・ 授業や学級活動の中で繰り返し声かけをしていく ・ 継続して話す、そして理解させる。 ・ ひどい時には家庭に連絡しながら、その都度注意する。 ・ 発言の裏にある本音を探って、その後の指導に役立てる。 ・ 出来る限りそのような言葉を使わせないようにする。 ・ 周りの大人が気づくたびに声をかけ行動で手本を示す 		
2 他者との関係づくりができない		
<p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その都度話をしたり、教えたりしながら生徒の中に知識、経験として残るように対応している。 ・ 成育歴を把握した上で本人に寄り添うこと <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人、周囲双方への指導。どのような指導をすれば本人も周囲も互いに受け入れられるようになるのか非常に悩む。 ・ 機会を多く見つけ、話をする。 ・ コミュニケーションスキルを学ばせる ・ 周りの大人が気づくたびに声をかけ行動で手本を示す ・ 寄り添う姿勢で話をし続けていく <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 少しでも多く話しかけ原因を探る ・ 本人から実状を聞く、または生活の様子を常に観察する。 ・ クラスでは周囲の生徒がよく声をかけてくれるのでそれに任せる。本人が居心地良い場面を多く設定するように心掛ける ・ 友人が出来るよう本人へ働きかけていくとともに、他の生徒には「色々な人がいる」ということを自然に受け止め受容する心を育てる ・ だめなものはだめと注意しながらも、生徒に寄り添う気持ちを忘れないで対応する。 ・ 話を聞く、家庭へ連絡する 		

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> ・ そういう態度や様子なのはどんな背景があるからなのか、今どんなことを考え悩みを持っているのかなど、その子のことを考え想像してみても対応する。 ・ 教科・行事の中で周りと関わることのできる場面を積極的に作る。その生徒の抱えている気持ちや願いを聞く。 ・ 繰り返し周囲への指導を行っていき、本人が頑張っていることをみんなの前で認める、ソーシャルスキルを学ぶ機会を持たせる。 ・ なるべく声をかける、友人関係に目を向ける、先生方とこまめに情報交換する ・ 声をかけ、現在の状況のある程度把握する ・ それらの生徒は何らかの問題を抱えていると思う。特に家庭の問題（家庭内不和、ネグレクト傾向）は大きいように感じる。 ・ 該当生徒とのレポートづくりが大切 ・ できるだけ人と関わるなど、コミュニケーション活動を多く取り入れた指導 ・ 家庭の問題も多いので、保護者と連携して対応していく ・ 原因となっていることを早く理解し、配慮しながら関わる ・ クラスが仲良くなれるような活動を取り入れる ・ 学校でも地域でも多くの目で見て関わっていくこと、また、その中で連絡を密にとっていくこと ・ 家庭や地域、そして職員間の連携 ・ 話を聞いてあげられる人なりカウンセラーや教師等が必要 ・ まめに声をかける。班やグループの活動を意図的に入れ関わるチャンスを作る。 ・ その子の発達段階を適確に見取り、対応する。 ・ TPOを考えて、色々な先生方と協力する ・ まず生徒と保護者の相談に応じる
II 学校生活への適応に関すること		
		<p>g 状況への順応性の低さ（興味・関心の狭さ）</p> <p>h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ダメなものはダメという強い姿勢と問題の背景の考慮 ・ 本人について、家庭と学校の見方を統一して対策を考える ・ 同一歩調で指導を進める ・ 諦めず繰り返して何度も指導する ・ 根気強く指導し、期限を守ることや当たり前のことができるよう対応する。 ・ 小学校時からの子どもへの指導とともに、親への指導 <p>i 基本的な生活習慣が身につけていない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人について、家庭と学校の見方を統一して対策を考える ・ 同一歩調で指導を進める ・ 諦めず繰り返して何度も指導する ・ 生活習慣の確立については、家庭での過ごし方を細かくチェックする、積極的な声がけ ・ 色々な事を経験させる。行動一つ一つへの対応ではなく、根本的な対策が必要。 <p>j 学力、学習面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ じっくり話を聞いてあげて、それぞれの問題を少しずつ解決していく ・ 個別指導が必要 ・ 個別支援やスクールカウンセラーなどの面談などを行う ・ 継続的な声がけと励ましを行う ・ 学習面でのフォロー、チャンス相談を行う ・ 家庭と連携する
III 登校に関すること		
		<p>k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外部機関に相談。相談しても引きこもりに対しては手だてが見いだせない。話を聞くだけで行動しないのでは意味がない。引きこもりに対応してくれる機関が今後ますます必要になってくると思う。 ・ じっくり話を聞いてあげて、それぞれの問題を少しずつ解決していく ・ 保護者との連携を密にする。場合によってはスクールカウンセラーや相談員の協力を得る。 ・ 家庭訪問や電話連絡を通して、生徒との関係づくり、保護者との協力体制を作る ・ 一人で抱え込まず、他教師・家庭と協力して取り組む ・ 食事や衛生面など中学生でもまだ難しいことがたくさんあるため、精神面・行動面に気になる子の大きな原因は家庭にあると思う。 ・ 保護者と話し合う機会を定期的に設定し、同一歩調で生徒に接する。 ・ 生徒の立場を理解しながらアドバイスを行う。 ・ 家庭の人と話をして改善するよう取り組む ・ 本人に、遅れても登校したことを認めつつ、遅刻や寝不足の原因を聞く。家庭にも連絡をとり、家での生活の様子を聞き、改善策を考える。

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 相談機関との連携 ・ 小学校時からの子どもへの指導とともに、親への指導 ・ 学校側から働きかけているが、なかなか保護者の協力を得られない。学校以外からの支援や働きかけが必要。 ・ 本人の資質・長所・頑張りをほめてあげる場面を作る、本人の気持ちに耳を傾ける ・ 会えなくても家庭訪問を続け見捨てていないというメッセージを送り続ける ・ 不登校の経過にあわせた対応をとる、関係教職員の連携協力、教員・養護教諭・スクールカウンセラーとの協働体制 ・ 保護者、出来れば生徒にも家庭で話を聞く
IV 情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		
		<p>l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒とのレポートづくりを一番に、理解者となりながら複数の人間で指導にあたる ・ 正論をぶつけても全く効果がない。幼少時からの成育歴にも起因している場合対応策は存在するの？受容の心を重視すれば、怠学傾向を助長しつつことにもなりかねない。 ・ 命の大切さを認識させる。 ・ 将来に希望を持てるような指導、安心感を持って十分に将来について考えられる生活をさせる ・ 家庭との連携 ・ 受け入れられている、大切な存在であることを分かってもらえるよう話を聞く、良いところをほめるなどしてレポート作りを行った上で「こうするともっと良い」という形で助言する。 <p>m 落ち着きがない、集中力がない 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 周りの先生方と相談しながらすすめる。複数の目で見て対策を考えていく。 ・ （どんな言葉や指示であれば伝わるのか） ・ 繰り返し周囲への指導を行っていく、本人が頑張っていることをみんなの前で認める、ソーシャルスキルを学ぶ機会を持たせる ・ 生徒と保護者の関係が途切れれないようにし、できるだけたくさんコミュニケーションをとり理解に努める。 <p>n 精神症状、精神的に不安定な行動等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭との連携 ・ カウンセラーとの協力
V 家庭生活に関すること		
		<p>o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人の行動の理解、親の協力を得ること、他機関との連携 ・ 本人と正面から話をし、聞いてあげる。保護者への協力を願う。 ・ カウンセラーなどの協力を得る。 ・ 学校全体での協働体制を得る。 ・ 職員の共通理解と家庭との連携 ・ 生徒とのレポートづくりを一番に、理解者となりながら複数の人間で指導にあたる ・ 本人だけでなく、親子共に考える姿勢、話し合う機会が必要。 ・ 何度も母親と直接話をしていくが、母親が高校時代にいじめにあい、自分の子どももそうなのではないかと不安がある。母親へのカウンセリングも必要。 ・ 生徒に限らず保護者、地域も含めて ・ 家庭という小さな社会の中でももう少し関わること、愛情をかけて育てることで子どもは満たされ問題行動をとらなくなるのではと思う。 ・ 生徒へ訴え続けること、良いところを認め合う活動を取り入れること ・ 小学校時からの子どもへの指導とともに、親への指導
VI 反抗的な態度、言動、反社会的な行動		
		<p>p 反抗的な態度、言動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それについてそのまま放置してしまうことは、こちらの問題としてとらえる ・ 場面をとらえて本人と話し合う。レポート作りによる信頼関係が重要 ・ 指導にあたる際はチームを中心とした関わりを多方面から持つ。関係諸機関との連携。 ・ 保護者には状況を把握してもらい家庭としての関わりを持ってもらいたいが、現状は難しいことも多々ある。 ・ レポート作り。諭すような言い方。 ・ 問題が発生してからその生徒に関わるのではなく、普段からの何気ない会話を大切にす。 ・ 話せる相手であることが前提になるので、そのような人間関係づくりを丁寧に行う。

大分類	中分類	小分類
	q	反社会的な行動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 本人について、家庭と学校の見方を統一して対策を考える ・ 同一歩調で指導を進める ・ 諦めず繰り返して何度も指導する ・ 家庭との連携を図り、家でもたくさん気にかけてもらうようにする。悪いと分かっているでもやってしまう心理を探るよう心掛ける。 ・ 生徒へ訴え続けること、良いところを認め合う活動を取り入れること
VII	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長い目で自分づくり（キャリア）教育、問題解決能力を育てていく ・ 声かけをしながら授業を受けるよう励ます ・ 家庭生活の様子を聞く ・ マナーの徹底指導と携帯電話の意味 ・ 信頼関係の確立については、生徒本人のよさを保護者にその都度伝えていく、保護者の苦勞を生徒本人に伝えていく ・ 子どもの自立にどう関わっていけるかが課題。 ・ 常に目をかけ声をかける、個別で指導する ・ 他の教員と情報を共通理解し、助言を受ける ・ 保護者への連絡・相談を行う ・ その都度話をしたり、教えたりしながら生徒の中に知識、経験として残るように対応している。 ・ 何でも良いので達成感を味あわせる。 ・ ADHDなどの生徒を普通学級で指導することの難しさを感じる。突発的な行動（教室を飛び出す、物にあたる）にどう対処すればよいのか？ ・ 情報モラルに関する授業、親・企業の協力を得る ・ 問題を抱える子ほど受け入れるのが難しい ・ 何事にも意味があり積み重ねることの大切さを話す ・ どのような対応をするにしても、校内は多忙で実施できない場合が多い。人員増が一番の近道のような気がする。 ・ 学校でも地域でも多くの目で見て関わっていくこと、また、その中で連絡を密にとっていくこと ・ 集団生活において他者との関わり方を考慮した言動をとることが大切だと思う。そのためには幼い頃から家庭や学校などで成長発達段階に応じた指導を心掛ける必要がある。 ・ 将来への目標や希望を持つことも必要だと思う。学校生活において目的意識を持ってないと、何事においても意欲的に活動することが困難になると思われる。 ・ 将来に希望を持てるような指導、安心感を持って十分に将来について考えられる生活をさせる。 ・ 幼少の頃から、ほめる・しかるのバランスが重要 ・ 個別にできるだけ早期に問題点を指導する。保護者との適切な連携 ・ 問題が出てからの対応では遅いので、普段の生活指導が重要 ・ 中学校で親に気づいてもらっても、子どもは親への不信感だけが強くなり、いい方向には進まない傾向がある。 ・ 毅然とした態度で指導する、ゆっくり話を聞く姿勢 ・ 家庭との連携 ・ 関わりを持ち、自信を持たせる場面を設定する。

⑥高校1年生

大分類	中分類	小分類
I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）		
1	トラブルや問題を起こしやすい	<p>a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉遣いの指導というより、コミュニケーションや相手の立場に立って考えること等の指導が必要だと感じる。 生徒や家庭と話し合うなど必要だと思う。 <p>b 感情のコントロールできない、衝動性が高い</p> <ul style="list-style-type: none"> 対応→①見守る。 ②認める。 ③心配り。 将来的にも、人間関係の面でも、非常にマイナスである旨を話す、本来的には、異常な状態と感じられる場合は、何らかの矯正（施設等での）が必要と考えられる。 当の本人にその自覚はなく、場面毎に自覚を促すしかない。また、周囲を大人にする。 <p>c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない</p> <ul style="list-style-type: none"> その場面のその時に指導し、理解させ、家族と連絡を取り合い指導を継続していく。 できるだけ、家庭との情報交換に努めたいと思うが、高校生には自立させて家庭の中で会話をしっかりしてもらいたい気持ちでいっぱいである。年々幼い感じがしてきている。 問題行動の背景を考慮しながら、その都度面談を持ち、人との関わり方、自分の行動を振り返らせる。 注意深く見守る。 ルールよりもモラルを重視させ、他に迷惑をかけないようにすべきである。 不適切と思われる言動があった生徒には、個人指導を徹底していますが、家庭との協力も必要不可欠だと思います。 家庭における本人の関わり方が重要となる。保護者の意識改革が必要。 日常的に、具体的な例を挙げながら、望ましい行動が出来るように指導する。また、誤った行動をした時には、その場で行動を振り返らせることが必要だと思う。 その都度、対話を通じてしっかりと生徒に向き合うこと、そして良いところを探す努力をし、誉めることを忘れないことが大切ではないかと思えます。 常に「自分だったらどう感じるか」。その立場になって考えるように指導しているが、あまり十分な効果があるようには思えない。
2	他者との関係づくりができない	<p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> 周囲の生徒に状況を聞いて、仲裁の協力してもらったり、時には話を聞いて仲裁するなど。 <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者から、過去の類似した事例について説明され、カウンセリングを通じて、本人、保護者ともに前向きできているようです。やはり、チームで対応することが重要と考えます。 出来るだけ均等に接する機会を持つ。 個人の気持ち、特性を理解し、集団とのパイプの役割を教員が行うことになる。友人関係だけでなく、指導の対象となる場合等においても、生徒間、教員間で理解が大切であるが難しい。県の対策として、常駐のカウンセラーや臨床心理士について早めの実施すべきであると思う。週に1回や月2回では、本当に足りません。 <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p>
II 学校生活への適応に関すること		
		<p>g 状況への順応性の低さ（興味・関心の狭さ）</p> <ul style="list-style-type: none"> 機会を見つけて、全体、あるいは1対1で話をする。 <p>h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）</p> <ul style="list-style-type: none"> 普段から信頼関係を築き、授業のルールを確立することが必要。 <p>i 基本的な生活習慣が身につけていない</p> <ul style="list-style-type: none"> 社会との関わり。 教員が授業の開始を守る。 教員自ら見本を示し、丁寧に、根気よく生徒に接していくことが必要であろう。 学校だけでなく、家庭や場合によっては専門機関と連携を図りながら対応していくことが必要だと思います。ただ、問題を抱えている生徒の場合は、家庭の協力が得られない場合が多いように感じます。 清掃やゴミの分別などの声かけを実施してるものの、家庭でのしつけを重視していく必要があると考える。 教師が日頃から声かけをするのはもちろんだが、生徒の中から「教室をきれいにしよう」という声が出てくるよう促す。 整理の仕方と必要性を保護者と連携して伝えていく。勉強の大切さや学校活動の重要性を伝えていく中で、それに関連する物の大切さを指導する。 家庭での対応を含めて、総合的な取り組みが必要と考えます。 あいさつ、視線など、形から教える。心の中に響くよう話す。保護者の協力も得る。

大分類	中分類	小分類
		<p>j 学力、学習面</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 早い段階で生徒を理解し、将来の目標を明確にして達成のため協力を惜しまない（心がけている。） ・ とにかく、予習・復習を家庭学習で行うことが必要。その上で、具体的な将来の進路を決めていくようにしている。現時点では、成績は伸びてきたが、将来の方向性までは確立していない。 ・ 分かる授業づくりが何より一番必要されることだと考えている。そうすれば、授業中の無気力や欠席面の問題は改善されるだろう。 ・ すぐに学年等で対応し、多くの先生方が関わり合えるような指導体制をとっていく。 ・ 個人面談の繰り返し、スクールカウンセラーの協力、保護者との連絡、友人等からの励まし、自信を持たせるような工夫（行事や資格など）
III 登校に関すること		
		<p>k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習面やクラスの友人の受け入れる気持ちの養成等、不登校の状況を改善する配慮は行っているが、本人の復帰への意欲になかなか結びつかない。 ・ 保護者及び本人に連絡し、何か悩み事がないか問いかけたりしている。必要に応じて、スクールカウンセラーによるカウンセリングを勧めている。 ・ 自分自身で体調管理できるような強い精神力を養わせたいと考えている。 ・ 友好関係の比重を高校の級友に置くことによって、関心が高校の生活中心に向けられるので、そのような方向に向かう働きかけが必要だと思う。 ・ 原因を明らかにした上で、本人・家族との連絡を密にし、登校しやすい環境を整える。 ・ 粘り強く働きかける以外方法がないので、努力中である。 ・ 話を聞く。 ・ 家庭と連絡を密に取り、保護者と協力して長い目で見て解決を図る。 ・ 欠席が多いとなかなかこちら側のアプローチが届きにくく感じる。家庭と連絡を密にしても、直接本人の表情などを見ないと、本人の様子や内面を伺うことも難しいし、指導の手を差し伸べにくいように思う。登校するよう刺激を与える必要もあるし、見守る時期があっても良いと思うので、さじ加減が難しいように感じる。 ・ 家庭との連絡強化。 ・ 普通の学校教育機関では出来得ない、何らかの対応（次から次へと単に病名をつけていく精神医療とも違うものか？）が必要では？ ・ 早急な手立てを必要としない限り、時間をかけて生徒の様子を観察したり、個別に面談するなどして問題解決に向けていく。
IV 情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		
		<p>l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 細かな声かけの継続で、その場の雰囲気に慣れさせて緊張感を取り除く。 ・ 話を聞く。生徒に話をさせる。 ・ 生徒との二者面談を行って、まずは話を聞いた。泣いたり、関を切ったかのような感情が出てくれば、まず第一歩解決出来ると感じたが、話す内容がなかったり、何も喋らない場合は、問題の根が深いことが多いので、学年、保健室（養護教諭）、カウンセラーなどと情報を共有してあたってきた。担任も一人で抱えないことが大切だと考える。 ・ 子どもに関わる家庭での時間やコミュニケーションも大切だと思います。 ・ 早急な手立てを必要としない限り、時間をかけて生徒の様子を観察したり、個別に面談するなどして問題解決に向けていく。 <p>m 落ち着きがない、集中力がない 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的に、学校生活の意味を考えさせながら、社会生活と関連させ、何度も話をするように対応することが必要だと思う。 ・ こまめに声掛けや面談を行うことと、家庭へのまめな連絡を行うことで、徐々に落ち着いてくる生徒もいた。また教師が、目の前の課題や問題を一緒に行い、忍耐力（と自信）が取り戻せている。 <p>n 精神症状、精神的に不安定な行動等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ カウンセリングでストレスを解消することが必要。 ・ 家庭の連携、医療機関からの的確な情報獲得等が欠かせないと感じた。 ・ 本人に対しては、出来る限り話を聞いたり、声がけして気持ちを受け止めるようにしているが、実際にはどのようにクラスに働きかけたらよいのか戸惑っている。専門家の助言も必要と考えている。
V 家庭生活に関すること		
		<p>o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分がかげがえのない存在であることや、自尊心をくすぐることをしなければ改善は難しい、と常々感じている。 ・ 寄り添う指導が大切だと思うが、そこから次の段階への移行が難しい。 ・ 本人が話せる大人の環境整備。友人への聞き取りと、友人へのフォロー（ケア）

大分類	中分類	小分類
VI	反抗的な態度、言動、反社会的な行動	<p>p 反抗的な態度、言動</p> <p>q 反社会的な行動</p> <ul style="list-style-type: none"> なぜダメなのか、繰り返し指導し、心のブレーキを作る。
VII	その他	<ul style="list-style-type: none"> 何が問題かというより、生徒は多感な時期を迎え、毎日こころの変化があるはずで、生徒を見守ることが大切ではないか。 問題行動の原因、要因（背景）を調べ、生徒理解に努める。 学校にいる間は指導できるが、帰宅後の行動までは指導しにくい。基本的には保護者の協力が必要だと思う。 本人の取り組みを長いスパンで見守る。 基本をおさえつつ、その都度、生徒の対応を個別に検討する。 主任、養護教諭と連絡を密にする。 基本的に、学校生活の意味を考えさせながら、社会生活と関連させ、何度も話をするように対応することが必要だと思う。 生徒一人一人の家庭環境や問題行動に至ってしまう背景を明確に理解し、声かけ等を行っていく必要があると感じている。また、その子の悪い面だけを見るのではなく、本来持っている良い面を我々がしっかりと把握し、関わることも大切ではないだろうか。 その中の連携が必要不可欠で、生徒の家庭での生活が重要なポイントで問題行動がつながると思う。 保護者と接する機会の増加。 家庭との連絡を密にするとともに、周りの生徒からの話、多くの先生方と相談しながら、教員一人で悩まずに対応していくこと。そして、少しずつ前進出来れば良いという気持ちでやればよい。 その生徒に対する効果的指導を、教職員の共通理解のもとに指導を行うことが大切になる。 家庭における本人の関わり方が重要となる。保護者の意識改革が必要。 悩みや問題を告げてくれる関係を構築するように努めているが、個々の家庭環境や成長過程が様々であり、対応に苦慮するが多い。 家庭での教育力が重要であることは勿論であるが、学校としても何かしらの手を打たなければならぬ。私としては、情報機器に頼らない、アナログ的な（体験等）活動もあえて取り入れることが必要ではないかと考えている。 こちらが焦らず、生徒からの言葉を待つことが必要。 こうした風潮や考え方、行動に対する対応は、個人でできるようなものではないので、大変難しいと思います。社会の仕組みやあり方そのものを変えてゆかなければならないからです。努力した者は報われ、正直者が馬鹿を見ない大人の社会を作らない限り、子どもの世界でのこうした問題はなくならないのでしょうか。 事実の調査、いじめてるとされる生徒との話や指導。今後お互いどのぐらいの距離で接するかをはかる。授業での対策、他の教員との連携。 世の中には、自ら行動しなければ何ともならないことがあると教え、行動するよう指導する。 クラス全員に話したことを必ず繰り返し確認しないといけないようで、その都度、聞き直しに来るので、教員はもう一度その生徒に対して個別に話すようにしている。

⑦高校2年生

大分類	中分類	小分類
I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）		
1 トラブルや問題を起こしやすい		
a	他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある <ul style="list-style-type: none"> ・人の話を聞き入れる強さを持つよう諭す。 ・言葉遣いについて働きかけていく必要がある。 ・その都度指導するのも大切だが、動じず受け流し、本人に気付かせる対応も必要である。 ・基本的に対話を含めたコミュニケーション能力や、ソーシャルスキルが低い生徒が、相手を思う気持ちが欠如している。問題を抱えているところにも原因があると思う。良い人間関係を築く場面・活動を設定し、信頼関係を養った人間とコミュニケーションをとらせることで、相手を思う心を育てたい。 ・その都度、教えなければならないと思う。 	
b	感情のコントロールできない、衝動性が高い <ul style="list-style-type: none"> ・周りにどのような影響があるのか、客観的に見られるように指導。 ・自分の目線で、主観的に捉えるのではなく、客観的に同自分が見られているのかを意識させる。（難しい） ・保健室にいる時の話を聞くようにした。声がけをし、様子を見る。 	
c	浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない <ul style="list-style-type: none"> ・個々に応じた柔軟な対応。生徒個人を長いスパンで捉えた指導。自分を表現できる経験を多くさせる。 ・場所を変え、落ち着かせた上で冷静に対応する。生徒の納得を引き出すような指導を心がける。学年で対応し、保護者への連絡も密に行う。 ・家庭と連携しながら、基本的な躾を徹底するとともに、自らの行動に責任を持つこと、他者を思いやる気持ち等を身につけることが出来るよう働きかけていくべきである。 ・その保護者も同様の傾向を持つところから、カウンセラーや医療機関も含めた対応を行う必要がある。 ・その都度、声がけ。 	
2 他者との関係づくりができない		
d	対人関係（人間関係）が構築できない	
e	コミュニケーションがとれない <ul style="list-style-type: none"> ・自分の目線で、主観的に捉えるのではなく、客観的に同自分が見られているのかを意識させる。（難しい） 	
f	孤立、孤独、他者と関わらない <ul style="list-style-type: none"> ・そのような子には見えていないだけで、自分の周りにどんなに支えがあるのか、ということを諭していくことが必要だと思います。口で言うだけでなく、実感させる工夫をして、その子の意識を変えなければならないと思います。 ・いろいろな角度からアプローチする対応が必要である。 ・まず、その生徒が迎ってきた今までの状況を把握すること。小さいグループから慣れさせていくこと。 	
II 学校生活への適応に関すること		
g	状況への順応性の低さ（興味・関心の狭さ） <ul style="list-style-type: none"> ・個々に応じた柔軟な対応。生徒個人を長いスパンで捉えた指導。自分を表現できる経験を多くさせる。 ・理解出来るまで、粘り強く話すようにしている。 ・周りにどのような影響があるのか、客観的に見られるように指導。 	
h	ルールにそった行動がとれない（ルール違反） <ul style="list-style-type: none"> ・保健室にいる時の話を聞くようにした。声がけをし、様子を見る。 	
i	基本的な生活習慣が身につけていない <ul style="list-style-type: none"> ・できないのか、怠けなのか、ここをはっきりさせて指導する。 ・就寝時刻が翌日の生活に影響しないように、繰り返し、個人・全体へ働きかけている。 ・しつこく言って必ず提出させる。 ・改善には家庭との連携が不可欠であると思う。学校側と家庭、双方の取り組みがないと改善されないのではないか。 	
j	学力、学習面 <ul style="list-style-type: none"> ・勉強する環境をつくり、個別に指導する。 ・生徒が集中できるような授業に改善する。 ・保護者からの過剰な期待を背負い、期待に応えようとするあまり、そのような行動をとるケースが多い。生徒本人だけの問題にせず、年4回（5月、7月、11月、2月）の面談を通し、保護者との関係について聞き取りをするなどの対応が必要。 	

大分類	中分類	小分類
		<ul style="list-style-type: none"> 学校内の共通理解や保護者との関わりが大切である。2次障害の不登校にならないように、支援体制づくりが必要だと思う。クラス（通常学級）における「個」と「集団」のバランスの取り方が難しい。傷つきやすい生徒と自分勝手に自己主張する生徒。問題は多いが、どの生徒も持っている良い所を育てていきたい。
III 登校に関すること		
	k	登不登校、不登校気味、欠席が多い 等 <ul style="list-style-type: none"> 対応としては、常に本人を「待っている」と感じさせ、強い指導も必要だが、同じ目線で言葉がけを多くし、担任のみならず他の先生方とも連携し、登校刺激を多くする。 早めに声がけすることが必要だ。 対応としては、家庭と連携を取りながら指導していくことが大切である。学校の方針を家庭にもきちんと理解してもらった上で、教員と保護者が協力し合い、問題に対応していかなければいけないのではないだろうか。 保健室にいる時の話を聞くようにした。声がけをし、様子を見る。 本人、保護者と連絡を密に取り、面談を持つなどすることで、不登校や問題行動の防止につながると思う。
IV 情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること		
	l	自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等 <ul style="list-style-type: none"> 大人が手をかけすぎ。過保護の蔓延。
	m	落ち着きがない、集中力がない 等
	n	精神症状、精神的に不安定な行動等 <ul style="list-style-type: none"> 本人の奥深い悩みを聞き、広い心で接し、本人が安心できる環境づくりが必要。
V 家庭生活に関すること		
	o	家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等） <ul style="list-style-type: none"> 母も協力的であるが、家庭自体が本人にとって居心地の良い所ではないようです。この様なケースはなかなか対応が難しいです。しかし、金髪だった髪を、本日、黒くしてきました。声がけを続けたいと思います。 保護者の意識改革。倫理。規範。 経済的支援の充実。
VI 反抗的な態度、言動、反社会的な行動		
	p	反抗的な態度、言動
	q	反社会的な行動
VII その他		
		<ul style="list-style-type: none"> 個々に応じた柔軟な対応。生徒個人を長いスパンで捉えた指導。自分を表現できる経験を多くさせたい。 複数的人数で、継続的に、また組織的に取り組むことが必要と考える。 2名の方は保護者も協力的なので、よりよい進路を共に考えているところです。 生徒の表情をよく観察し、まんべんなく声がけをしていくことが必要だと思う。 悩みを聞き、また保護者とも情報交換を増やしていく。 早い時期（小・中学生）のうちに、使い方の指導が必要。 教師にとってできることは限られているが、私個人としては、深い愛情を持って信頼を得ていくことに尽きると思う。 気になる生徒については、早い段階で情報を集め、本人・家庭・友人等と相談し、長期化しない対応が不可欠である。 家庭状況が背景にあるのだが、どこまで踏み込んで指導すべきか思案している。なるべく優しく声がけしているが、それが甘えにつながっているとも考えられる。 成育歴が複雑だが、その子の親の悪口になってもよくなく、親の要望を聞こうとするも実現するのが難しく、結局本人も親も学校不信を募らせていく結果となる。親へのケアが鍵を握る場合が多くなっている。 仲介役となる生徒を育てるために、道徳的な授業を取り入れ、様々な意見があること、きちんと伝えなければならないこと、伝え方にはたくさんの方がいる、それぞれの良し悪しがあることを学ばせる。そこで、一人で解決する難しさを教え、きちんと話し合いをしないと誤解を生み、悪化するケースがあることを教える。その上で適切な仲介の仕方を考えさせる。 保健室にいる時の話を聞くようにした。声がけをし、様子を見る。 変化した原因を解明し対処した。 それに対しては、現時点で本人が持つ閉塞感や将来への見通しが持てない要因を突き止め、取り除く工夫が必要である。 面談（カウンセリング）。原因を見つける。

⑧高校3年生

大分類	中分類	小分類
I 対人関係に関すること（他者との関係の中で起こること）		
1	トラブルや問題を起こしやすい	<p>a 他児童生徒との関係で、トラブルや問題となる言動がある</p> <ul style="list-style-type: none"> 本人にその気がなくても、結果的に傷つける結果になっている。基本的に、自己中心的な考え、自分だけよければいい、という考えに端を発していると思われるので、周囲の人間を大事にすることがいかに重要か、説明する必要がある。 家庭内で使われていないか確認し、その生徒の家庭環境も考えた上で対策（その子に伝わる言い方）を考えることが必要だと思う。 時間をかけてでも論しながら指導し、精神的成長を促す。 耳にする度毎に、そういう言葉は言うてはいけなと注意しています（理由もつけて） 必ず何らかの問題が出てくると、生徒はいつもと違う行動や言動を起こすので、その小さな信号を見逃さないよう、よく観察しておく必要があると思う。又、休み時間や放課後等のちょっとした会話も重要だと感じている。 <p>b 感情のコントロールできない、衝動性が高い</p> <ul style="list-style-type: none"> 相談・専門機関やカウンセラーとの連携。 <p>c 浅薄な感情、共感性に乏しく、対人関係に配慮した行動ができない</p> <ul style="list-style-type: none"> 上記の行動をとる原因の追求が必要か・・・。 本人への注意（一つ一つのケースに合わせて説明し、反省させる。） 周囲の生徒がストレスを溜めないような配慮を、教師側がしなければならない。 学校内だけでなく家庭や地域を含めて、幼少時から継続的に子どもを育てていかななくてはならないと思う。 相手の立場になって話をするように指導することや、コミュニケーションの取り方を教える必要があると感じる。 きちんと努力を重ねていけば必ず認められ、評価されるということ、問題行動がどんな影響を本人と周りに与えるかということ、分かりやすく根気強く伝えることが必要。 理解すること、失敗できる環境をしっかりと確保して、相互行為そのものを行うトレーニングが必要だと思っています。 発見した時に、その場で指導することが大切だと思う。 問題行動を取る生徒には、成育歴・環境の影響が見られるケースも多い。しかし、現代一般的な問題として、社会としての考え方もあるので、学校だけ対応しても改まることはないだろう。また、いわゆるADHDのような障害を持つケースもあり、この件に関しては、海外のように早期に指摘し、指導していくシステムが必要。今の日本で指摘すると問題にされる。
2	他者との関係づくりができない	<p>d 対人関係（人間関係）が構築できない</p> <ul style="list-style-type: none"> 専門機関と連携をして、その子の対応策をより具体的にアドバイスしていただき、複数でその子へのサポートをしていくことが必要だと思います。 人との関わりより、携帯やPCでのバーチャルな世界を好む。何人かに協力してもらい、グループに入れ行動させたり、会話をさせている。 <p>e コミュニケーションがとれない</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭などに“ここの相談してみてください”と言えるような専門機関などを設けていく必要もあるように感じます。 <p>f 孤立、孤独、他者と関わらない</p>
II 学校生活への適応に関すること		
		<p>g 状況への順応性の低さ（興味・関心の狭さ）</p> <ul style="list-style-type: none"> どのようにすべきなのか、丁寧に話して聞かせる。 <p>h ルールにそった行動がとれない（ルール違反）</p> <ul style="list-style-type: none"> 適切な人間関係を築くことが、自分を形成する上で大切だということを伝え、個人の持っている長所を誉め、伸ばすように接することが必要。 <p>i 基本的な生活習慣が身につけていない</p> <ul style="list-style-type: none"> この状況は家庭とも共有して、相談を密にする。 原因は多岐にわたると思いますが、まず、その原因を知ることが大切だと思います。 本人・家族・友人と話し合いを持つことが第一歩ですが、話す順番がケースによって異なるかと思っています。一概に言えませんが、多くのケースは友人次第で決定される気がします。教員は話し合うための潤滑油であるべきだと思います。 本人との面談、家庭との情報交換。一人で対応をせず、複数の教員で対応する。 <p>j 学力、学習面</p> <ul style="list-style-type: none"> 教室内は小さな社会として捉え、他者を認める（いろいろな人の集まり）事を、重要課題として取り組む必要がある。

大分類	中分類	小分類
III	登校に関すること	<p>k 登不登校、不登校気味、欠席が多い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭との連絡を密にする。 ・ 生徒の話をよく聞いてあげる。良い方向に導き出させる。 ・ 学年・教科担任・養護教諭・スクールカウンセラーとの連携、家庭との連携、電話連絡、面談・家庭訪問などから理由を探る。また、登校を促す。 ・ まず、養護教諭や関係の深い部活動顧問に話を伺い、連続で欠席の場合は自宅に電話をし、保護者と話します。（元気がない、いつもと表情が違っている時には、常に声をかけています）。場合によっては本人、または、保護者も入れて面談をし、相談相手となります。カウンセリングが必要と感じた時は、申込を進めますが、本人が受けたくない時はそれ以上進めません。 ・ 家庭環境、成育歴と併せて問題の改善を図るべきだと考えます。 ・ 問題行動や兆候に早めに気付き、自己の行動について気付かせ、そういう行動を取ってしまう自分の内面的要因をしっかりと考えさせる。 ・ 必ず何らかの問題が出てくると、生徒はいつもと違う行動や言動を起こすので、その小さな信号を見逃さないよう、よく観察しておく必要があると思う。又、休み時間や放課後等のちょっとした会話も重要だと感じている。
IV	情緒・心理的・精神面の不安定、脆弱性等に関すること	<p>l 自己肯定感が低い、受動的、生きる意欲が低い 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 受容・傾聴・共感を柱に、生徒の本音を理解すること。自己肯定感をほぐくむこと。 ・ 面談をこまめにする。掃除の班などを組み替えて、級友同士の関わりを増やす。スクールカウンセラーに依頼して、ワークショップをする。 ・ 本人の長所に気付かせ、少しでも自分を好きになるよう何度も繰り返し促す。 <p>m 落ち着きがない、集中力がない 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なぜ、そうしたくなるのか本人とよく話し、本人の気持ち・考えを十分知る。 ・ 周りの先生にも協力させ、対応の仕方を複数で考えて接するようにする。 ・ 学年・教科担任・養護教諭・スクールカウンセラーとの連携。保護者との連携。 ・ 他の生徒への対応：問題行動から派生する問題を防止するためにも、その行動の理解や不満を聞く体制も必要。 ・ 二者面談、三者面談を含め、学校生活を通し生活の仕方や学校・家庭の環境を調べ、原因を探る。（集中力だけでなく、他の問題行動もすべて含まれると思う。）話し合いで普段の行動の中から、解決の糸口を見つけていく。すぐに解決できる問題は少なく、時間がかかるため、なるべく担任として持ち上げるようにしている。 <p>n 精神症状、精神的に不安定な行動等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在薬で落ち着いている。他クラスに友人がおり、また、クラス内の生徒の中にも声をかけてくれる者もおり、担任としても着かず離れず、いつでも気軽に相談に乗れる雰囲気作りをしてきた。生徒自身も、担任に相談をしてくれる。医師のアドバイスをベースに、家庭と本人との連携をとっている。生徒には「いつも見守っている」という意識を教員が持つべきであり、そう生徒にも感じさせることが必要と思う。 ・ 本人や親に対しても、よっぽどのことがない限り、精神科を進めることが困難である。できることは、生徒が困っていることに耳を傾け、先生方がそれぞれの立場で支援してゆくことが大切であると考えている。 ・ 相談・専門機関やカウンセラーとの連携。
V	家庭生活に関すること	<p>o 家族に関する問題（家族の態度、養育力の問題、経済的な問題等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その生徒及び親など、周辺環境の理解がまず必要である。高校に対して、小中学校からの情報伝達がなされていない（入試がある為と思うが）。合格後で構わないので、親に問題がある場合、情報提供の体制構築が必要であると思う。校内においては、まず本人以前に周辺生徒の理解・協力できる雰囲気づくりが重要か。問題行動を起こした時など、日頃から教員の個人偏重にならないよう、集団指導体制を作ることが絶対に必要である。 ・ その都度注意、なぜダメなのか教える。
VI	反抗的な態度、言動、反社会的な行動	<p>p 反抗的な態度、言動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1～2回であれば、個別に呼んでの口頭注意で済ませてもよいが、それでも修まらない場合は保護者を呼んだ上での特別指導をするなどの対応が必要。 ・ 深く自分自身と向き合う時間が必要と思ひ、面談をしたり、カウンセリングをすすめたりした。日常的に、繰り返し声がけをしていく継続的な指導が必要だと思う。 <p>q 反社会的な行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己管理、自己責任を徹底する。 ・ 生徒が今何を求めているのか、何を必要としているかを一人で考えるのではなく、養護教諭やカウンセラーの話や意見を聞き、多角的に見るようにする。（家庭連絡も）

Ⅶ その他

- ・ 病気（病名のしっかり確認できる）生徒の理解、または、その病気の理解が必要。
- ・ 物事を選択や決定を行う機会を意識的に設けて、「自分で決めた」という実感や責任を持たせることが必要だと感じています。
- ・ 対策は難しい。マナーを訴えるしかないと思う。
- ・ 本人の様子を見たり、話をしたり、他の先生方から話を聞くなどして状況を把握し、いろいろな場合を想定して、周囲との連携してすすめていくことが必要だと思います。また、中心が子どもでもあることも忘れず対応したいです。
- ・ 生徒に接する時に「なぜ、そのような注意をするのか」と言う理由をしっかりと分かりやすく説明していくことを、これからも心がけたいと思います。そして、注された点を直していくことにより、生徒によりよい将来の自分の姿を自覚させることを目指していきたいと思います。
- ・ 「気になる」「問題だ」と思われる生徒には、担任だけでなく、教員がチームを組み、それぞれ違った立場・役割でアプローチしていく必要があると考える。
- ・ 個々にしっかりとした対応が必要だと思うが、そのために十分な時間が持てない。
- ・ 周囲の子はそのような人物を受け入れているので、そのことでからかわれたりすることはない。教員は、その児童生徒の性格など十分に理解した上で、特別扱いせず普通に接することが必要かと思う。
- ・ その生徒にとってこれらの行動は、自分を守るためになされていることが多いであろう。周囲の人々に守られている、という感覚を味わって初めて、自分を過剰に守るのをやめるであろうから、時間をかけ、関わりを持つ人を少しずつ増やしていく方法をとるのがよいのではないか。
- ・ 話を聞くだけとは思うが、その後、どうすることも出来ないことの方が多かった。特に、金銭的なことは、とても対応できないと感じている。
- ・ 「気になる」「問題だ」と思われる行動は種々あるが、一番は急激な変化（突然成績が下がる。交友関係の変化等）に注意して、迅速に対処することが必要であると感じています。
- ・ 多くの先生から声をかけてもらう。保護者と面談を行い、生徒の様子を知ってもらい協力を得る。
- ・ このため、積極的な声かけが必要だと思う。

事務局

(精神保健福祉センター 所内検討会・ワーキンググループメンバー)

NO	所属・職名	氏名	職種	従事年度
1	所長	西條 尚男	精神科医	H24
2	副参事兼次長 (総括)	岡田 瑞明	事務	H22
3	副参事兼次長 (総括)	野村 元一郎	事務	H23～24
4	技術次長	小原 聡子	精神科医	H22～24
5	相談診療班 技師	佐藤 啓直	臨床心理士	H21
6	〃 技術次長 (総括)	佐竹 嘉裕	臨床心理士	H22
7	〃 技術次長 (総括)	長橋 美榮子	保健師	H23
8	〃 技術次長 (総括)	大場 ゆかり	保健師	H24
9	生活支援班 技師	浅野 直子	作業療法士	H22～24
10	企画班 技術次長	岩瀬 美津枝	保健師	H21～23
11	〃 技術主幹	横野 富美子	保健師	H21～23
12	〃 主任主査	粕谷 祐子	保健師	H21
13	〃 技師	小山 奈月	保健師	H22
14	〃 技師	畑澤 彩	保健師	H22～23
15	〃 技師	千葉 春香	保健師	H23
16	〃 技術次長	松野 あやえ	保健師	H24
17	〃 技術主査	吉田 愛	保健師	H24

若年者の自殺対策に関する調査研究事業
(平成 21～24 年度)
報告書

発行日 平成 24 年 8 月
発行者 宮城県精神保健福祉センター
〒989-6117
宮城県大崎市旭 5 丁目 7 番 20 号
TEL 0229-23-1657
FAX 0229-23-0388